

中部同人誌

●「じゅん文学」68号（愛知県）

「いわし雲」（千田よう子）は、リズムミカルな鋭い切れ味の文体は爽快感を伴いながらも暗い基調低音を響かせ、次第に闇の密度を濃くしています。敦子は母親の姉に預けられ、和歌山県の田舎町にやってきましたが、母親代わりの島子やその息子の信次とも違和感があり、いつも独りですが——行ってはいけないといわれていた坂の上の焼き場で、焼き場の作業員の儀一と知り合い、彼には淀んだ暗い過去があるものの、儀一と一緒にいると、敦子はなぜか心が落ち着きます。煙突の煙が白ければ善人で、黒い煙は悪いことをしてきた印、というような話をしたりします。老朽化した焼き場は解体されることになり、儀一にとつて自分の人生の決着と同じ意味であつて、焼き場の炉の中に入り、敦子に燃焼のボタンを押すように命じるが——敦子にとつても、ボタンを押すことは直観的に自分の短い人生の終幕に重なるように感じ、その場から逃げだすのだが——儀一との出会いと別れは敦子の胸に深く沈潜し、その呪縛は敦子の目の前の風景の色合いを変容させてゆくのです。十八

歳で東京に帰り、結婚もせず、四十九歳になつていて、多摩川の河川敷を歩きながら義一の姿を思い浮かべる場面で小説は終わつていきます。欲をいえば、敦子の子供時代の描写を圧縮してでも、孤独の影を引きずった大人の敦子の生き方を展開すると、そこに凄味が出てくるのではないのでしょうか。それだけの文才に恵まれています。

千田よう子はまた「幻想の街」で二〇一〇年度の全作家文芸時評賞を受賞し、「全作家」82号に掲載されていますが——リアリズム色の強い文体で、正確な表現ではあるものの、ロマネスクな雰囲気希薄で、男と女の妖しい関係はうまく浮き彫りにされてはならず、幻想をイメージするには文章上の精妙な工夫が必要ではないでしょうか。ピアノは情感を誘惑する色と香りにおいてヴァイオリンに劣り——相良百合子がヴァイオリンを弾き、里美がピアノに向かうという設定の方が百合子の優位性を示し、二人は対等であるわけはなく——百合子は里美に対して、同じ匂いにする、といいます。そこにリアリティは感じられず、里美の百合子の夫との情事は宙に浮いた偽物になっています。テーマと文体がうまく調和していません。

「お代はいらない」（佐藤慎祐）は小気味のいい仕上がりになつています。

●「彩雲」4号（静岡県）

「音楽の森を再生する」（富樫昌義）は独創音楽家・金澤

撮の仕事と世界へのプレリユードになつていきます。世界的コンクールにも挑戦したピアニストですが、埋もれた音楽家の発掘に努力しています。たとえばシヨパンやシューマンの時代の忘れられた音楽家の楽譜や経歴に光を当て、みずからそのピアノ曲を演奏し——何十人もの作曲家を甦らせる難事業であり、商業ベースで成り立つ仕事ではなく、

前に転動していた瀬戸内海沿いの町に夫婦旅行を試みるが、妻の心の修復はならず——テーマが使い古されたものであり、表現に甘いところがあります。

●「構想」50号記念号（長野県）

女神に魂を捧げる崇高な覚悟です。富樫昌義はその金澤の無謀と思える挑戦を音楽の森の創造と捉えています。

「はじまりの朝」（花島真樹子）——小田切朋子は急性白血病の夫の修の看病をしており、助かる見込みはなく、ここに森あかねが見舞いに訪れ、娘の美沙はあかねの振舞いに不審感を抱くのですが——小田切と朋子そして森あかねは学生時代の演劇仲間であり、小田切は演出を担当していたものの、やがて演劇から離れて朋子と結婚します。あかねは才能に恵まれ、その成長が期待されていました。天衣無縫の身勝手な言動によつて業界から締め出されたようです。あかねの、小田切に対する愛情と信頼感の混然とした気持は朋子を悩ませ、しかし小田切はあかねとの距離を誠実に設定しており、とはいえ朋子にとっては不安に苛まれる事象であり、夫とあかねの不可解な虚構の関係は朋子の重荷になつていきます。通夜にあかねは黒いワンピースで

「奈落」（太田清美）は読みやすく洒落た趣きがあります。美沙は見た目には豊かな家庭の主婦ですが、五十歳前後になると、日常の不平不満が気持ち悪く、その心の隙間に何年か前に亡くなった理津子伯母の誘惑が忍び込みます。劇団を創設した伯母とは相性がよく、劇団の手伝いもしており——伯母の誘う声に惹かれて、美沙は庭の池の奥にある岩陰の石段を下り、そこは黄泉の国への通路になつており、やがて伯母に巡り会い、伯母は美沙を死者の世界に案内しようとするが、そのとき美沙は迷いを断ち切り——夫や子供そして義父母の日常に戻ります。いささか密度の薄い作品ですが、肩の凝らない上品な趣きがあります。

●「弦」89号（愛知県）

「長い終楽章」（長沼宏之）は退職した主人公が妻の態度の変化に戸惑う話です。夫婦の間に隙間風が吹き、妻の不可解な言動がひどくなり、その解決の手段として、三十年

現れ、棺の前に白い百合の花束を捧げ、朋子にとって不吉な影のようです。慰問客が帰った後、娘の美沙はサイドポードの上の日本人形に惹きつけられ、その人形は朋子と修の結婚記念に森あかねから贈られたものであり——美沙は驚きの表情を示すので朋子が古風な趣きの日本人形を見ると肩のところで揃えていた黒髪が艶やかに腰まで伸びていて

朋子は夫とあかねの奇妙な虚構の世界にみずからの想いを溶け込ませ、孤独と苦悩の宿命を実感するのです。

森あかねからの人形の黒髪が美しく伸びる、という仕掛けはメタフィジックな世界に通じていて、これからの朋子の見る風景の色彩がどのように変容してゆくのか、イマジネーションを刺戟されるところではないでしょうか。

「夢三昧2」（畠山拓）は才覚の煌めく小品で、日常の中に非現実の影が忍び寄っていて——三つ目の「鰻日より」はない方がまとまりがよいように感じます。

「袖摺坂で」（陽羅義光）は芯の強さは窺えるものの、明らかに手を抜いています。題材を小手先で巧みに捌くのではなく、じっくり取り込むべきであり、適当に処理するのは虚しくなるだけではないでしょうか。

●「たまゆら」83号（滋賀県）

「聲音」（佐々木国広）は失業中の中年男の都会での孤独を描きたいようですが、その意図はうまく反映されていません。

「三つの吉祥」（多岐流二）では運に恵まれた三つの話がかまくまとめられており、ちよつと手を入れると、気の利いた短編に仕上がります。

●「風紋」6号（富山県）

「路地」（谷村紀子）は軽妙な語り口調のようなタッチで冴えない中年男の心の隙間を衝いています。安アパートの

に入らず——過酷なレースの体験記にはリアリティがありますが、幾分かのアレンジをすればもっと面白い読み物になっていくでしょう。

「大雪に降り込められて」（桑原加代子）は大雪のためにヒースロー空港が閉鎖になり、ロンドンに向かう飛行機はフランスのド・ゴール空港に着陸し——雪はやまず、二日もパリに滞在して市内観光を楽しみますが、歯切れのいい確な表現は見事です。たとえば時間について触れていて、パリの時間の曖昧さは日本では許されぬかもしれないが、そこには生活風習また民族意識が反映されており——海外旅行に馴染んだ作者は海外の流れに素直に従っていて、広い見識の自然な発露が窺え、その姿勢はひとつの文明論にもなっています。

●「文芸中部」87号（愛知県）

「ふたりのえにし」（堀井清）は若い二人の気持が自然に重なり、爽やかな風が世間の塵芥を吹き飛ばし、そこに美しい虹が浮かび上がるといような——読み手も、二人の心の流れに素直に納得でき、しんみりとした充実感に喜びを見出せます。堀井清は獲物を狙う狩人の鋭い眼光を抑制し、あくまで日常の穏やかな視線を守り、情感の乱れや才走った言葉を避けていて——作品である以上、巧妙な意図が織り込まれていますが、読み手は無意識に書き手の詐術に嵌り、しかもそのことに違和感を抱かないというのは書

田川は零細企業に職を見つめますが、路地でリヤカーを引いている老人が気になります。肉屋のおかみさんによると、八田という名前で路地の奥に住んでいるということですが、

廃品回収業のようですが、詳しいことはわかりません。八田さんと居酒屋で飲む機会があったものの、田川にとって八田さんへの謎めいたイメージは増殖するばかりです。八田さんの正体を見極めるために路地の奥に入ると、八田さんの子分のような老人がいて、八田さんの住居に案内されるのだが——大通りを抜け、寂しい山道を分け入り、寺院の伽藍の傍に八田さんの隠れ家があり、田川は八田マジックの幻想世界を泳いでいるわけであって——八田という人物は田川がみずからの人生を見直す触媒のような役割を果たしているようであり、やがて田川は幻視の遊泳から覚め、安アパートの前に佇みます。洒落た面白い作品です。

●「峠」60号（愛知県）

「初の100マイルトレイルレースへの挑戦」（大内輝夫）は還暦を過ぎたランナーの100マイルレースへの体験記であり——アメリカのユタ州のソルトレイクシティで行われ、スタート地点は標高約千五百メートルで、最高地点は約三千二百メートルの高地であり、山岳地帯のアップダウンをどのようにベース配分するかなのだが——制限時間は36時間であり、睡魔に襲われると、草の上に倒れ、しかも5分なり10分なりの制限を付け、疲労のため食べ物も口

き手のすばらしい技術の裏返しになっています。

最後の場面——七郎ははじめてよし子のマンションを訪れ、二人で朝食を食べますが、よし子は七郎のジャケットとネクタイに気付き——七郎の父親はとび職であり、二階から墜落して入院していて、七郎ははじめとしてネクタイ姿で見舞いに行くつもりで、よし子は七郎の気持を推し測り、一緒に病院に行くことになりませんが——二人の態度や言葉の遣り取りはいつも色彩感に乏しいのですが、心の中は豊かな色彩に彩られていて——その辺りのさりげない描写にも胸に迫る重みが浮き彫りにされています。

「海峡をわたる人」（北川朱実）は末期の朦朧がん患者を見守る世話人の話です。書き手の広い視野と柔軟な筆使いによって陰鬱な病院の状況また病人の妙な言動が爽やかに描かれ、といっても八十歳代半ばの大橋タカの魂の陰影も照射していて、深い味わいがあります。他の呆け患者は暗い影を引き摺っているだけですが、タカの医者や看護師を困らせる言動にはなぜか上品な輝きが伴っていて——タカは泳ぎたいといって駄々をこね、結局、看護師の目を盗んで海岸に出て海に入り、苦難の人生の出発点に戻ったような幻想——静かな波に戯れるタカは遠い昔に大きな海峡を渡ったことを甦らせ、日本の北の果てでの逃避行のようであって、さらに宛先不明で戻ってくる手紙を息子に出し続けており、白い髪を波間に漂わせるタカの胸中には悔恨

や喜びあるいは恨みや感謝の情が無秩序にざわめいて、タカの表情はときには菩薩のようにときには夜叉のように変化していたのかもしれない。

「ふたりのえにし」と「海峡をわたる人」は対照的な書き方です。

関東同人誌

●「文藝軌道」第14号（東京都）

「タコが食べたい」（八覚正大）は軽妙な小品で、不思議な魅力に溢れています。貧乏生活の女がタコに興味を抱き、いろんな産地のさまざまな種類のタコを買い、味付けに工夫を凝らしていますが——スーパーの鮮魚売り場で、プラスチックの容器に入った15センチほどのタコに惹かれ、足が9本もあり、まだ生きています。どうもタコの奇怪な靈気に取り憑かれたようです。慌てて水槽を買いに走り、水槽の中でゆっくり動くタコに魅せられてしまいます。おかずになるはずのタコが貧乏女の気持を虜にし、もはや食料ではなくなりました。何気ない素振りの文章ですが、女の意識を巧みに浮き彫りにして、技ありというところでしょう。

同じ号の「夜のレクイエム」（高橋ひとみ）は大きな可能性を秘めた力作です。高齢者福祉施設の夜勤での出来事です。中川ケアマネージャーには美華という婚約者がい

る。やがて中川は意識を取り戻しますが、そのとき鈴木サトが亡くなったという事実を知らされませんが、彼は鈴木サトの幻影から抜け出せず——独りでは生きてゆけぬ高齢者の死の問題が中川の心を苦しめているのです。

作者は巧みに中川を幻想の虜にしていますが——母親を幻想の中に登場させ、また昔の恋人も現れ、それは豊かな人生を約束された現在の中川への非難になっていて、しかしささか安っぽい手法のように感じます。自由に天空に飛び立つ幻想が地上に落下し、地上の論理に負けてしまったような印象で、むしろ中川の意識が現実に戻らず、鈴木サトを追いかけたまま鬱蒼とした姥捨山に消えた方が小説としては破綻するものの凄味があったのではないでしょう。作者がメタフィジックな視点を鋭く極め、どのように変貌するかは大いに期待できます。

●「夢類」第19号（東京都）

「冬の薔薇苑」（河合泰子）は小説の中に劇のシナリオが挿入されており、小説とシナリオが同時進行になっており、その奇抜な着想に拍手を送りたくくなります。

●「全作家」82号（東京都）

「藪の中」（有森信二）は巧みな作品です。長崎の離島が舞台になっていて、中学生の良太は成績が優秀で高校進学を望んでいるが——家族、とくに母親は農家を継ぐことを願っており、旧来の因習との葛藤が良太を悩ませています。

て、彼女の父親の経営する高級老人ホームに勤めています。が、逆玉として陰口を囁かれています。そのことが無意識に中川の精神を歪めていつており、それがこの作品の基調になっているようです。寝たきり老人のオムツの取り換え、夜中に徘徊する認知症患者、食事時に暴れる老婆——世話を受けないと生きてゆけない高齢者の悲惨な状況があり、夢と現実の狭間で衝動的な行動は生命の原初的光景を暗示して——夜勤のケアマネージャーとしては人間の裏側に接する厄介な業務になり、冷静に対応するには長い経験が要求されます。ケアマネージャーの中川はいつも夜中に廊下をうるつく二人の老婆に交じって見慣れない白髪の老女に気付きませす。寝たきりで歩けるはずのない鈴木サトであり、上司に伝えると、冷笑されただけであって——しばらくして中川は廊下をさまよう鈴木サトをふたたび見つけ、追いかけますが、中川の心の病の発現です。白髪の老婆はすごい剣幕で怒鳴り、階段を飛ばすように降り、その狂った女の後姿を中川は必死の思いで追い求め——こんなところには階段があるわけではないと思ったとき、中川の意識は夜の老人ホームから暗い幻想の迷宮に迷い込むのです。そこに母親が登場し——かつての恋人を忘れ、資産家の娘を選んだことを激しく罵り、金銭の誘惑に負けた息子を責め立てます。さらに中川は年寄りの墓場に行くという鈴木サトにも出会い、姥捨山に分け入る老婆の凄惨な表情に怯えま

有森信二の穏やかでその描写は農村の素朴な因習および人間関係をうまく捉えています。

有森信二はどのような素材でも的確に対応できそうです。それだけの技倆の持ち主ですが、新しい地平を切り開くという冒険心がありません。いつも安定して計算された納得性の高い小説は書けるでしょうが、従来の小説の枠を打ち破る意欲は希薄であり、そこが残念に思います。

●「カプリチオ」第35号（東京都）

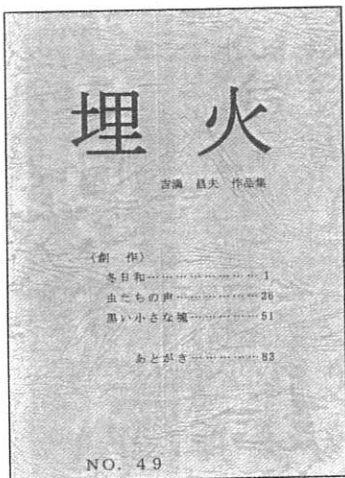
「Ulysses Brew」（塚田吉昭）には懐かしい高等遊民の亡霊のような趣きが漂っています。ジョイスのユリシーズの翻訳にまつわる話ですが——岩波茂雄や野上豊一郎、森田草平に伊藤整や小林秀雄など、錚々たるメンバーが実名で登場し、さらにイギリス情報部の元スパイのアンジェラ・



ナッツという金髪の美女も現れ、色気を振り撒いています。事実と虚構の境界はわかりませんが、むしろそこに拘るのは野暮であって、ジョイスの翻訳に絡んだ人間模様が面白く浮かび上がり、昭和初期の教養人の雰囲気伝わってきます。文章表現の欠点は数多くあるものの、そこには塚田吉昭の柔軟な精神性が顕れており、知識や時代を幻惑させるような優美な蟹気楼が虚空を彩り、嘘に真実さらに悪徳や事実など、すべてのものが混然となつて幽明な世界を創り上げているのです。

同じ号に、新宿ゴールデン街の酒場の奥山彰彦理事長へのインタビューが掲載されていて——新宿の闇市の状況、青線時代の様子、また安保闘争の政治の季節など、ゴールデン街の歴史が語られています。団塊の世代よりも先輩の方は狭く汚れたカウンターで感情や思想の竜巻に巻き込まれたことがあります。花園神社、ゴールデン街そして歌舞伎町といえ、確かに40年か50年前にはおぞましい妖気の得体の知れぬ影が徘徊し——路地の奥では素っ裸の若い女が血を流して倒れていて、薬の売人は物陰から酔払いにしんみりとした声を掛け、険しい顔つきの中年男が若い連中を連れて闊歩しており、いつ乱闘が起こっても不思議ではない気配であり——ネット時代の若者はノンシヤランとうろついでいて、あるいは二十歳代の夫婦が新しいパーを開き、昔日の無気味な呪文に呪われた陰気な飲み屋街は

吉満昌夫の作品集であり、意図的な装飾のない自然体の文章にはしみじみとした情感も滲み、年季というものの値打ちが見出せません。「冬日和」と「虫たちの声」の基調は——昼間は工場で働き、仕事の後は夜間高校に通うという青春を過ごし、ひたすら生き抜いた老人の人生であり、しかも虚飾はなく、生活者の視線による現実が描かれていて——巷の文化や教養というものがいかに贅沢で虚栄に彩られていくかが、実感として納得できます。さらに「黒い小さな塊」は、四十歳代前半の公務員の飯野は平和な穏やかな家庭を大切にしていたが、妻が脳腫瘍で手術するという事態に直面し——飯野は長時間の手術を談話室で待つのだが、彼の心象風景に闇の中に浮かぶ黒い塊が現れ、その得体の知れぬ生き物が自分と重なり、不可解な心象はこれまでの生き方および将来の人生に暗い影を投げかけ——吉満昌夫の文章は飾り気を排除しながらも硬苦しくなく、



もはや遠い記録として残っているだけのようです。

●「習志野ペン」93号（千葉県）

エッセイの名手が揃っており、風格もあります。そのひとつに野口寛子の「狐の話」があり、狐の嫁入りに触れられていて一人里から遠く離れた山道を提灯の灯りを頼りに狐の嫁入り行列が進み、そのイメージは懐かしい子供時代の風景を甦らせてくれます。

●「江南文学」62号（千葉県）

「入植者」（中嶋英二）は明治時代の北海道の入植者をテーマにした小説仕立てであり——開拓農民の過酷で悲惨な状況を描いており、青年開拓者とフランス人の獣医との女を巡っての決闘では獣医が敗れる最悪の結末を迎え——北海道にはもつと悲惨で残酷な事件が残っていて、たとえば石狩や釧路また網走に収監された囚人は道路工事に駆り出され、死ねば山林や谷底に捨てられていて——残忍な事例を拾い集めると、明治時代の開拓裏面史ができるのではないでしょう。

●「季刊・遠近」第42号（東京都）

「生き残るのは」（逆井三三）は取立て屋の健二が主人公ですが、彼の人物造形に厳しさが欠け、また殺しを請け負う西上もいささか虚弱な性格であり、作者の意気込みは空回りしているようです。

●「埋火」49号（東京都）

むしろ表現は柔軟で的確であつて、魂における光と闇の交錯を精妙に表しており、どこにでも通用する名品になっています。

●「河」第160号および「私人」第72号（東京都）

朝日カルチャーセンターの受講生が母体となつていて、文学へのひたむきな想いに満ちていますが、主婦感覚からいかに抜け出すかが課題になりそうです。

今回の推薦作は次の通りです。

「いわし雲」（千田よう子「じゅん文学」68号）、「ふたりのえにし」（堀井清「文芸中部」87号）、「海峡をわたる人」（北川朱実「文芸中部」87号）、「藪の中」（有森信二「全作家」82号）、「黒い小さな塊」（吉満昌夫「埋火」49号）。

準推薦作は次の通りです。

「はじまりの朝」（花島真樹子「構想」50号）、「夜のレクイエム」（高橋ひとみ「文藝軌道」二〇一一年四月号）、「Ulysses Brew」（塚田吉昭「カブリチオ」35号）。

幾人かの立派な書き手に出逢いました。また可能性を秘めた書き手もいます。大手出版社の文芸雑誌よりも、すぐれた作品があります。

同人誌の枠はなかなか強固で、横のつながりは難しそうですが、すぐれた書き手に自在に発表してもらおう舞台ができればいいなと思つています。

（東谷貞夫）

「札幌文学」76号（北海道）

「花の星座」(小南武朗) 緊密で正確な描写に優れ、狙った対象の姿を確実に浮かび上がらせる技術は群を抜いています。川田が小さな蝶のアオバセセリを探しに早春の山道を登るところからはじまりますが、その導入部は山道にある恵林寺の娘の周子に出逢う伏線になり、そこに書き手の巧みな配慮が窺えます。書き手の文体は静止しているものあるいは状況の説明などに対しては的確な効果を発揮するもの。情念の動きやたえず移ろいゆく不定形のものにはちよつと不向きなように感じます。川田と周子が初めて一夜を共にするとき、二人の肌の潤いまたしっとりとした心の共鳴はいわば白黒のデッサンのようで、パステル調の色彩感がやや希薄になっています。さらに、周子の尼僧が阿修羅になって般若の顔に変貌し、その般若の面が割れて尼僧の素顔の戻る場面では、その姿容はうまく説明されていますが、妖しい幻視あるいはこの世ではない間の世界の現出に凄味が欠けていくような気がします。正確な筆使いゆえに幅郭線が明瞭になり、曖昧な要素また言外の暗示などを排除するところがあって、妖しい雰囲気や密度の不足がいと不満です。

「雪」(須崎隆志) も、幻の女が登場し、現実と幻影の狭間を狙っていますが、正確に書くという長年の習性の悪い面が出ていて、貧弱な幻想性に

「ベン」6号(富山県)

「霞」という女(川島昭子) は遊郭に流れてきた女をその娘の雪子が哀しみの調べで追想しています。八十歳を過ぎた雪子は日本海沿いの道を散歩している、霧がかかり、その向こうに港が見えいつしかその近くの遊郭「娘の屋」の玄關前について、廊下には白粉の香りが漂っており、彼女の物語が始まります。

霞は海辺で赤ん坊の雪子を抱いて佇んでいるところを「娘の屋」に拾われ、娼婦として働きますが、白狐が化けたような色白の美しい容姿です。生まれても育ちも語らず、哀しげな風情を漂わせ、暗い魂の疼きを隠しているような気配であり、ちよつと近寄りたがるところがあります。ときおり遊郭から姿を消し、逃げ出すわけではなく、数日もすると帰ってきますが、どこで何をしているのかは誰にもわからず、謎になっています。実際、霞は大地主の娘で、十代の頃はお姫様であり、踊りや邦楽に親しみ、暗舞台にも立って、実家の没落ととも世の裏道に沈み、身体は泥沼に喘いでいても心は死んでおらず、夢と現実の薄暗い狭

なっています。

「バンと雷鼓」132号(北海道)

すこし大きめの誌面を開くと、洗練されたレイアウトで、気持がときめいてきます。「櫻、散る」(宮脇啓子) は北海道詩人協会の主催する第三回「北の詩賞」の受賞作品です。独特な発想と気品に思われた詩誌であり、気の利いたエッセイもあって、今後の発展が楽しみです。

「響」17号(北海道)

「船底」(高岡啓次郎) は青年の底辺の仕事から這い上がってゆく過程を描いています。峠岸高志は新聞配達をしながら平和運動のボランティアをしています。社長は若い頃は相当な遊び人であり、世間の裏側に精通し、その経験がプラスに作用したのか、刑務所上りの人を採用しています。業務に慣れなくて、高志は一筋縄ではいかぬ同僚には溶け込めず、塗装業として独立します。志の問題でしようか。景気の荒波に立ち向かいますが、かつて何年振りかで人影のない建屋の前に佇み、さまざまな想念が脳裏に浮かびますが、精神的に強く成長した高志は新しい地平に挑戦する決意を秘かに抱きます。高岡啓次郎には書くのではなく創るという意欲が備わっていて、こういう人物を造形するのか、楽しみであり、たとえば、峰岸高志が世の中でどのように変貌してゆくのか、その後日

間を浮遊しているようであり、海辺の荒波を眺める眼には世捨て人のような哀愁が凝縮されていて、心と体のアンバランスが娼婦としての妖しい魅力を濃密にしているのでしょうか。富山から遠くない港町も爆撃を受けると、「娘の屋」の女も従業員も防空壕に逃げ込みますが、その混乱時にも霞の姿はなく、娘の雪子は燃え盛る炎に怯えています。炎に母の顔が浮かんでいて、地獄の赤い絨毯に抱擁されているようで、しかし穏やかな表情であり、幻覚であっても、雪子にとってそれが母の最期の姿でした。どこかで霞の幸せだった頃の回想を織り込みたいたのが人情ですが、それを避けたのは巧みな着想でしょうか。遊郭の表裏、そこに霞の魂を重ね合わせると、重苦しい人間の業に触れたような気がします。

「あるかいど」44号(大阪府)

「サハラの夜明け」(木村誠子) は旅行記という枠を突破し、未知の砂漠を背景にしてのひとつの精神的物語になっています。リツはすでに夫を亡くし、二人の娘も結婚しており、妻や母の立場から解放されていて、リツは太陽日にサハラに立ち、砂漠の虚無の世界に触れながらも夫との人生を振り返り、またモロッコにまつわる話を織り込み、そこには都会から離れたの自在な心の躍動が顕れています。シングル池田やティーチャーなど、書き手と同じ一人旅の同伴者も個性的な言動を示し、ホテルやカフェの情景に広がりを与えていて、リアリティがどうかなどは読み手に任せおけばよく、気ままな上品な感覚の文章は臨場感に溢れ、読み手の好奇心を刺激し、い

譚でも立派な作品になりそうです。

「渤海」62号(富山県)

「冬のゆうれい」(いいだろ) は日本海に突き出た半島の先端にある鄙びた漁村の民俗が舞台になっています。高校時代のソフトボール部の仲良し三人娘、といつても三十路を過ぎてはいるのが、彼女達は狭くて暗いトンネルを通っている、ガタガタの自転車に乗ったセーラー服の女に出会い、顔は白く塗りたくると信じ、雨の日も雪の日もトンネルの向こうのバス停に迎えに行っている、その執念が幽霊に凝縮している、ということであり、実際、梅バアの自作自演なのだが、漁師やバスの運転手なども協力しており、初めてのお客にはトンネルを通らせる手筈になっていたのです。二人の釣り客が来るようになっており、三人娘も君江の幽霊で歓迎する作戦を練り、釣り客が酒を飲んでると、灯りが消え、気色悪い陰影が現れ、酔った釣り客は慌てふためいたとき、ほろほろに破れた軍服に鉄兜をかぶった土色の顔の兵士が登場し、政夫の亡霊であって、梅バアは吃驚して腰を抜かし、その日の新聞に、硫黄島の遺骨取集団の記事が載っており、それに触発されて政夫が甦ったようです。リアリティがどうかとは別に、読んで楽しめれば優れた長所であり、書き手の筆使いには良質なユーモアの隠し味が感じられます。

つしかレストランで騒ぎ、また砂漠の風に吹かれているような気分になってきます。小説という形式を詰まらなくさせる面白い作品です。

「法螺」65号(大阪府)

「風の連れ歌」(穂積耕) は認知症がテーマになっていますが、書き手の視点の高さおよび大きな精神的器ゆえに、ゲジャゲジャした哀れっぽいところがなく、乾いた感覚に貫かれています。志郎と啓子は六十歳代の夫婦で、妻の啓子がボケはじめ、日常の意識から見放されてゆく啓子の病状を冷静にしかも柔軟なタッチで描いており、正常な情動を失ってゆく啓子に対する志郎の切ない愛情そして厄介な家庭事情に巻き込まれる娘達の困惑など、啓子の周囲の暗い波紋の渦はひとつの演劇舞台を展開しているようであり、読み手としても、醒めた視線で悲惨な状況を眺められ、それは書き手の卓越した筆力の賜物でしょうか。

「漂泊民族への考察」(村川良子) は山間部を移動して生き抜いていたサンカの人々についてのエッセイです。シカやクマを獲り、木の実を採取し、また川魚を掴まえていて、ほとんど村里には姿を見せず、村人が山奥で得体の知れぬ人間を見たという話ほどの地方でも残っており、明治以降、鉄道の発達や道路網の整備さらに山林の開発などで、サンカの行動圏は時代とともに狭まり、昭和三十年前後までは中部地方にサンカの生活習慣を守っている山の民がいたようです。天狗や妖怪というイメージには里人の感情が幾分か投影されているのかもしれない、代官や庄屋つまり為政者にとっては秩序を乱す連中をサンカの類にしていたの

「半獸神」91号 (大阪府)

「首切り人形」(佐藤駿司)は高等遊民の遊び心が怪奇小説を仕立て上げたという印象です。呉服店の旦那とその妻そして可愛い娘の残忍な殺され方——鉞や刃物ではなく、途轍もない力で首を引き抜かれ、布団の周辺は血の海になり、畳や襖また天井にも大量の血が飛び散っていて——侵入者の跡跡はなく、奉行所の捜査は行き詰まり、下手人を挙げる必要から番頭が捕縛されますが、酷い拷問の末に獄死します。同じような事件が商家の助右衛門の屋敷で起こり、夫婦に娘の三人が首を引き抜かれた状態で発見されます。役人の長次郎は現場で見つけた女童の人形を家に持ち帰り、そこに知り合いの白髭爺さんが訪れ、家に漂う気の乱れを指摘しますが、長次郎は別に対策は立てません。長次郎は首を締め付けられる苦しさに目を開けると、人形の黒髪が首に巻きついていて、妻と娘はすでに首と胴体を引き裂かれており——その地獄絵が長次郎の最後の意識でした。なぜ人形は古道具屋の店先に飾ってあったのか、人形の怨念は何であるのか——残忍な事件の背景は謎のままであり、余計な説明をしないところに値打ちがあります。さらに「ごいまま」とか「ごいまま」などの語尾には無気味な世界に誘う呪文のようなものが響いています。この書き手の拙劣には多様な素材が隠されており、次の趣向が楽しみです。

「木木」24号 (佐賀県)

「認知症になる」(松雪形)では——妻が認知症になり、ボケが進行し、夫は困惑し怒り狂います、その夫も人格崩壊の認知症になっている、と「霧中に佇む」(野沢薫子)はベーリング海の荒波にもまれた漁船員の物語——厳冬のベーリング海のスケッチで漁船では荒波と吹雪そして強風との格闘であり、船員は殺気立ち、甲板にはいつとも死神が徘徊し、一瞬の油断は命取りになります。給料は陸の事務員の何倍もあったが、母港の長崎に帰ると、死と隣り合わせの緊張感から解放され、三郎はクラブやキャバレーを飲み歩き、稼いだ金は数日で使い果たすのも珍しくなく、散財の後は柳小路の小さな飲み屋「小春」に立ち寄り、そこは三郎達の安らぎの場であり——六十歳代のママとその娘は荒れ狂いの振り籠役であって、美保という若い女が手伝いはじめ、不幸を背負っている暗さが漂っていて、その美保はやがて「小春」を引き継ぎ、客層は漁船員からサラリーマンに代わっています。

三郎は同郷のりえと結婚したものの、貯金はなく、りえの才覚で平穩な家庭が築かれ——りえは継母に育てられ、酷い辛苦を味わっていたが、表情には出さず、三郎を支えていたのです。三郎はかつての同僚のブンさんと逢うことになり、二人とも漁船から離れており——ほぼ二十年ぶりに懐かしい柳小路を歩き、「小春」の暖簾をくぐり、二人とも若き日の身勝手な生き方を思い出します。三郎とブンさんの再会する辺りから書き方が微妙に変調しているようで、つまりそれまでの描写不足を補っているところがあって——継母を看病するりえの意地悪な振る舞いが明かされ、さらに三郎とブンさんの家庭事情が説明され——手品の種明かしのように、むしろ曖昧なところは読み手のイマジネーションに任せる方がよかつたのでは

いう着想が面白く感じます。佐保子は六十八歳で、夫の清司と孫娘の理科との三人暮らしです。佐保子はメガネの置き場所や通帳の保管場所を忘れ、日に日に毫厘の兆候を示し、そのたびに清司は怒鳴り声を張り上げます。夜中に目を覚まし、佐保子はバジャマの上におーパーを着て病院に向かい、診察日と思っているのですが、結局、深夜の街をさまよい、オーパーを投げ捨て靴下も脱ぎ、バス停で震えている——警官に保護され、家に送られると、清司は佐保子を拳骨で殴りつけ、彼女は入院しますが、清司にも痴呆とは別の人格崩壊の兆候が認められたのです。夫婦で認知症という現実はお伽噺ではないような気がします。

「胡霊・KOKO」10号 (福岡県)

「ホタルの導き」(桑村勝士)——桑村勝士は溪流釣りに惚れ込んでおり、渓谷の清流でポイントを探し、釣り糸をすばやく投げ、たとえばヤマメの食い付くのをじっと待つ、というような描写に優れ、釣人の心理と山間の風情とを調和させる筆さばきは卓越しています。釣仲間の孝太郎君に誘われてホタル釣りに出かけますが、闇に舞うホタルの描写は精妙であり、その場の雰囲気や伝わってきます。ホタルの美しい光とビー玉の輝きを重ねていて、そこには小学生のときのビー玉の苦しい思い出を織り込まれており——確かに静かな感動を覚えるものの、過去の出来事を素材にするのではなく、溪流釣りという基調の中で些細な事件が起こり、未来への時間軸で話が展開する、という挑戦意欲を心がけてほしいものです。

「南風」29号 (福岡県)

「マーサの足音」(紺野夏子)は室内の空気と匂

わないでしょうか。三郎とブンさんは濃い霧に包まれたまななのです。

「九州文学」15号・通巻538号 (福岡県)

「エイリアン 来迎団」(田部浩二)は一通のハガキで幕が上がります。濱田は杵築陶子の名前に覚えはなかつたが、すぐに川路陶子と気づき、四十年前に結婚を考えた女性です。彼女は歯科医の娘で、贅沢に育ち、家柄や資産のバランスが取れず、賢いのですが、彼女は介護施設に入っているように、訪ねてみると、認知症になっています。

素晴らしいところは濱田が陶子と銀座を散策する場面です。夜景を眺めながら食事をする、彼女の表情は明るくなり、三越から三原橋の交差点をぶらつき、歌舞伎座の前に着くと、彼女の意識は急変し——濱田をすでに亡くしている夫の杵築一と錯覚し、外形は濱田で中身は杵築一と信じていて、濱田としては彼女の狂った思考回路についていけない、ますます彼女の回線の狂いは増幅していきます。彼女は生身の人間ではなく、エイリアンと見做せば——その着想によって濱田は落ち着きを取り戻し、彼女の妄想を素直に受け止めます。銀座の人波を眺め、遠くの異星からの訪問客が混じっていて不思議ではない心境に誘われます。陶子をエイリアンに見立てたのはお手柄であり、彼の愛情の逆説的な表現のようです。

家族の悩みや施設の状況また行政の対応などという社会的視点には囚われておらず、さらに不可解な精神の情動をエイリアンの出現と見做して、そういう書き手の姿勢には不満や非難が向けられそうですが、良質な品性と高い精神性の表現は地上の視線を凌駕したものです。

視の感覚とが妖しく錯乱し、地上からわずかに浮き上がったところに異次元が現出し、そこに人生の謎に翻弄される女の情感が哀しく浮遊しているのようでうか。ロンドンか、どこかの外国の街が背景になつており、その曖昧さがまた不思議な奥行きをもたらしています。真弓はかつて老女が住んでいた石造りの屋敷を購入し、その老女はすでに亡くなっているのですが——浴室で湯を流すと、妙な音が響き、配管の不備による雑音であり、いつしか真弓の魂にその雑音は共鳴し、老女の声に見立てます。その声の主をマーサと名付け、黄泉の国のマーサとの会話はなぜかしら彼女を和ませ、危うい心情の象徴になっています。ひょんなことから日本人限定の高級娼婦になり、お客を管理するのはパトナーとして九年間も共に過ごす精神科医の結城です。真弓は四十歳になり、容貌の衰えを感じ、また娼婦としての自分自身さらに結城との人生に無気味な闇の訪れを意識します。結城は日本に帰る決心をし、その頃、真弓は白人の暴漢に襲われて妊娠してしまい、黄泉の国の使者のマーサは中絶を勧めますが、彼女は出産の覚悟を決め、マーサと決別します。結城は真弓の妊娠のことは知らないままに帰国の手筈をまとめ、彼女は霧の向こうに三人の生活を思い描きますが、結城との関係はやはり濃い闇に蔽われていて——地上の論理に馴染む結城と現実と幻視の狭間で立ち尽くす真弓を巧みに表出しており、そこに紺野夏子の優れた着眼点と高い精神性が現れているように見えます。読み手としても、この先はどうなるのか、暗澹たる気持ちから抜け出せません。

「九州文学」14号・通巻537号 (福岡県)

「季刊午前」45号 (福岡県)

「ヴォンク 駅から」(井本元義)はランボーと井本元義との強烈なコレスポンドダンスの成果であり、書き手の魂に宿るランボーの精神的軌跡とでもいふべきで、事実と幻想の織り込まれた多彩な蜃気楼は芳醇な香りを持ち、善悪の彼岸へと誘い——偶然も必然もランボーという宿命から派生する地上の現象にしかすぎず、その座標軸にこだわれれば芸術は知性と感情の玩具になってしまかず、モンマ説として、マルセイユの病院へは行きませんが、マルトルの裏町に姿を隠し、そこで「アピシニアの輝き」を書きつけた、というのですが、近くにこの書き手が翻訳して世間を惑わすとも思われ——とにかくランボーハウスが博多の裏町にでき、また新宿の路地裏に薄明りを灯し、ランボーの恋人と称する謎の女がときには貴婦人ときには乞食女になって呪文を唱え——アルチエールの影が幽霊のようにさまよっているのもひとつの現実でしょう。

「湧水」49号 (東京都)

「白髪姫」(飛田一歩)は名手の作品です。倉坪透は母親の美代が入院したので北陸の故郷に帰ると、病床の美代および付添いの父親の志太郎の世話をして二十五年ぶりの若島典子であり、透の高校の同級生で、二十五年ぶりの再会になり、彼女はすっかり白髪になつていて——典子は志太郎夫婦の隣に自宅を建て、親しくしており、というより娘のように老夫婦の家の片付けなどを手伝い、志太郎にとつては典子への依存心が大きくなるばかりです。高校時代、典子は透の追っかけであつて、さまざまなプレゼントを贈っていたが、透はまったく

く無視していて——典子が志太郎夫婦の家庭に深く入り込んでいる事実と直面する、反発心が湧き、しかし母親の美代と典子の心遣いに感謝しているようです。相性が合うというだけでなく、典子の妙な親和力が作用し、その不思議な態度が志太郎夫婦を穏やかな日常性の中で包み込んでおり、透には神秘的な温か味に感じられ、典子の余計なお節介に見えた言動への反感は消え、むしろ彼女の親和力に惹かれてゆきます。二日目の夜、志太郎と三人で焼きそばを楽しみ、彼女と二人になると、透は彼女の両脚の窪みに頭を乗せてうとうとしますが、そのときの夢か現かの描写は見事ですが、そこには文章の女神の微笑みを感じられます。しかも透の心に妖しげな余韻を刻み込んでいて、彼の眼に映る風景はやがて変容してゆくのではないのでしょうか。明確な輪郭線で描くのではなく、柔らかな筆使いで人物を造形しており、しかも幽かな抒情性を漂わせていて、靈妙な興行きを感じさせます。

飛田一歩が、細心の配慮の行き届いた短編ではなく、すこし長い小説を書けば——ストーリーの展開とともに、心理の緩また人間関係の複雑な闘争などが浮き彫りにされ、すばらしい作品になるような気がします。

【Q文学】2号（東京都）
「海辺の墓地」（玉井五一）は青春の墓碑銘ともいえるべき哀しくも美しい作品で、若い感性に溢れています。想いを寄せた人の舞いが失われた時間の中で甦り、その幻影は青春との決別でしょうか。

潮風の浜辺——女は両手を伸ばし、細い身体を

しなやかにスピンさせ、長い髪は自由を謳歌するようにならびき、スカートも青い海にはためき——彼女は戦争で朝鮮人の夫を失い、赤ん坊も遠くに旅立ち、故郷からも白眼視され、戦争の年代記を背負って——女の踊りは「ぼく」の心象年記でもあり、砂浜の女の姿が消えると、純白のブラウスが残っており、いや、大理石のような石であり、その硬く冷たい感触は「ぼく」の身体に入り込み——罪も善悪もない透明な世界が広がり、時間はなく、そのシニールな次元では戦争に悪徳として犯罪を浄化するような敬虔な祈りに満ちています。

【群書】79号（東京都）
十のアリア（七）「おお、わが故郷」（渡邊裕子）はオペラに関する連作のようですが、ジュリアーノと麗はオペラ歌手の夫婦であり、ミラノ・スカラ座の来日公演のとき、ジュリアーノは「アイダ」のラダメス役に抜擢され、それが評価され、夫婦でミラノ・スカラ座との契約が舞い込み、ところが、麗の妊娠がわかり、オペラ歌手を中断してジュリアーノとともにイタリアに渡ります。このような作品は同人誌には珍しく、日本とヨーロッパの文化の違いにも触れていて、しかも品性が高く洒落ています。

【季刊・遠近】43号（東京）
藤野秀樹の追悼号です。「石に還る」は「文芸思潮」主催の第二回銀華文学賞「奨励賞」を受賞しており——瀬戸内海の小島の風変わりな因習を素材にし、細部にも目の行き届いた堅実な作品です。

今号の推薦作は「花の星座」（小南武朗）「札

小説の書き方

作家を志す人々のために

五十嵐 勉

個人の内部にある思いや認識のエネルギーを、どのようにして多くの人が共感できる普遍的な姿形にするかという作業が「書く」ということです。この本が少しでもお役に立てれば幸いです。（前書より）

素材の見つけ方・選び方 モチーフについて テーマの捉え方 ストーリーの組み立て・構成 人物の設定 文章についてなど

自家版限定本 800円

ご注文・お問合せは直接文芸思潮までご連絡ください
tel03-5706-7847 asiawave@qk9.so-net.ne.jp

（東谷貞夫）

歌のわかれ 中野重治

出獄前後の中野重治が描いた昭和十四年の作品。金沢の旧制高校生から帝国大学生になつていく、いかにも大正時代末期の文学青年ふうの安吉の経験である。私とは時代も環境も人間像もずいぶん異なっている。しかし、読書経験とは自分が経験していかないことも含まれるのである。私の読書経験は、民俗学者が埃だらけの書棚から古い詩歌を発見したのに似ている。血なまぐさい抗争とか諷刺に至つた転向とかを、先祖のさかんな記憶を呼びおこすごとに、はてのない憂鬱ななかで実らぬ恋愛の雰囲気、永く続く先祖からの伝統的慣習のごとくに読んだ。このことは比喩的に言えば、生まれる前に失われていること、あるいは、見えない未来の記憶ではない。

その頂点では詩が主役である。たとえば安吉は恋人頼子の姿や形を一切語らず、ただ記憶中心にそのときの雰囲気だけを語っている。彼女がどのような社会的存在か人物像なのかを想像するしかないのだが、その恋愛の記憶を「汽車は停車場にとまるが、船は海の上にとまらない。おまえは、とまることなく遠ざかつて行つたのだ」と語る。個人の意志を高める近代的な恋愛というよりも、歌壇の恋の雰囲気、祭祀の一つに、忍び恋に近似のものではないか。また下宿先のお寺から雨降りの桃畑を眺めながら室生犀星の「雨は愛のやうなものだ、それがひもすがら降り注いでゐた（略）いつまでも水い問うち沈んでゐた、永い間雨をしみじみと眺めてゐた」（愛の詩）という詩を音読している。この詩の視覚の風景の奥底に、そうとう深く抑圧されている抒情がありはしないか。

岬 中上健次

逃れたい血のしがらみに閉じ込められた青年の苦悩を描いた中上健次の昭和五十年の初期作品である。彼の後半生の多くの長編とは叙述方法は大きく異なっているが、その骨格をなした精神はこのあたりに始まっている、といつてよい。たとえば最後に「妹と姦つた、妹と知つて、姦つた、彼はその後確信した。けもの、畜生。人にどうなせられてもかまわない。いや、人がどう喚いともかまわない。」「今日から、おれの体は獣のおいがする」と書いているが、この精神を「千年の愉楽」や「異族」ではむしろ出発点とし、路地という中上世界を確立していったのである。

この頃の中上は新しい小説のために書いているのではない、すべては新しい小説のためである。若いのではないか、と感じさせるものがあった。若い革命児の風貌で熱く溢れていたのである。同じ頃エッセーで「新しい小説をどうしたら書けるか」と問い、「あれもいい、これもいい」で、既成から頭を撫でられる安全よりも、「あれもこれもダメ」の否定によって、当の小説をこの身に引き受ける危険に、身を置くことである。キメの言葉を使うなら、小説家の若さとは否定の運動の謂である（「小説の新しさとは何か」と書いているが、まさしくその通りに、この「否定の運動」を

鹽壺の匙 車谷長吉

自分が小学校六年生のとき金貸し一家に育つた二十歳の叔父が自殺するのだが、青年の蒼白な孤独がなぜそこまで追い詰められねばならなかったのか、その過程を描いた車谷長吉の平成四年の私小説の作品。この作品のなかでは私小説作家としての覚悟を、「語ることは自分を崖から突き落とすことだ」とか、「語ることは実はそれがなうこと自体にアクセントをおいて私小説を構想していることを示唆している。後の作品『漂流物』（平成七年）では語ることは強請かたりの「騙」ことである、と断言している。そういった覚悟が小説を書くことは「一つの救い」であり、同時に「一つの悪である」、「凡て生前の遺稿として書いた。書くことはまた一つの狂気である」（「あとがき」）、とまで言わたのであろう。

この作品のポイントには深い空虚感のなかで眼を見開いて細かに観察して「こうとすると、「隠れ神」や「生霊」といった霊が出てくる」ところがある。たとえ眼に見えぬ空間であっても、何と見ようと試行錯誤すること、肉眼で見ると同じように、いや、それ以上に、風景が神秘的になつてきて深く洞察する機会に、つまり、霊に遭遇する環境になつていくのではないか。こういった宗教的傾向は彼の私小説だけでなく、現代の他の作家の私小説作品にも多く見られる。といふことは、短編小説の領域では私小説が現代でも依然として根強いことを示しているのである。（文芸評論家）



中上健次 全身に負つて時代を疾走し続けたのであった。無念にも若くして病魔に倒れ逝つてしまつたのだが、私は彼の文章が同時代を

●「山形文学」第100集（山形県）

「灰」（しん・りゅうう）——画家の沢村幹郎は個展の会場で山川安岐を見染め、オホーツク海へのグループ旅行に誘い、安岐をモデルにした「水島浜に立つ女」が文部大臣賞の榮譽に輝きます。二人の間に妖しい磁場が渦巻き、その激しいうねりの虜になり——足掛け八年の嵐のような交感にやがて亀裂が走りますが、安岐としては沢村への想いが濃密すぎるがゆえに出口の見えぬ闇に閉ざされています。安岐は結婚に逃避するものの沢村への愛が増幅し、その苦悩から逃れるために友人の鈴木里子と北海道に移り、女逃げ込み寺の住職の配慮で落ち着いた日常を取り戻しますが、機械機に向かつていてもいつも般若心経を唱えていて——現実とは遊離した険しい形相になり、酒量は増え、肝機能が麻痺して人生を閉じます。二十一冊の日記が残されておられ、沢村との八年間の軌跡であり、安岐の喜びと哀しみそして解脱できぬ宿命が綴られています。里子はオホーツク海の水島浜で安岐の日記を焼き捨て、その灰は一陣の風によって海の上に飛び散り、それが安岐への手向けなのです。

この作品は鈴木里子によって沢村画伯の妻への手紙として

に口ソクを立てた小皿、信子は哀しみに震える手で水に浮かべます。

●「全作家」83号（東京都）

「櫻の忌」（富崎喜代美）では——美咲子は教師でしたが、恋人に捨てられて退職し、列車に飛び込むところを助けられますが、左頬に醜い傷跡が残り、左足はほとんど動かせず、寝たままの状態であり——命を救ったのは同じ職場だった用務員の末治であって、彼は浅黒い顔で歪曲した背中に大きな瘤があり、蛇のような目をしていて、異様な怪物を連想させ、美咲子はその彼の世話を受けますが、クモの巣に囚われた蝶のようで、おぞましい迷宮の子羊のようです。末治は美咲子の肉体を貪り、心とは別に彼女の体は応えていたのかもしれない——妊娠に気付くと、彼女は脱出を企てます。末治は傷を負った犬やウサギなどの世話をしていますが、結局は助からず、そこに彼の暗い宿命が顕れていて、美咲子もその気配を感じ取っています。通帳や現金を物色しているところを見つかり、逃げる美咲子は庭の縁石に頭を打ち、忌わしい地獄から解放されると、末治は美咲子を背丈ほどの桜の木の下に埋め——二十数年の歳月が経ち、桜並木は華やかに彩っていますが、末治は美咲子の眠る桜の木の傍でトラックに轢かれます。

二人とも暗い奈落の不条理に翻弄されていて、主婦やサラリーマンの日常とは隔絶されているようであり、不条理

て書かれていて、手紙形式からはみ出した部分が多くあるものの、一人称と三人称の区別はあまり意味はないように思われ——里子は安岐という女の生きざまを訴えたかったのでしょうか。

●「婦人文芸」91号（東京都）

「川へ」（斎藤よし子）は過去と現在が綜錯し、ちよつとわかりにくい構成になっていますが、細部の組み立てには充分な配慮がなされていて、平板に流れる筋道ではなく、重層的な構造になっています。

信子はインドのペナレスを訪れ、聖なるガンジス川を眺め、多摩川に身を沈めた母への鎮魂の旅であり、多摩川とガンジス川は繋がっているという信子の秘かな想いなのです。信子の家は食べ物を扱っており、結核に罹った母は商売の邪魔になっていて、母は衰えてゆく身体を哀しみ、家業への迷惑に悩み、母の死後——父は一年ほどで再婚し、女手の必要な商売とはいえ、中学生の信子には辛い試練でした。母の死の真相は信子が結婚して子供を授かったときに知らされ、母の心の闇にこだわり、その秘密に近づきたいという気持は信子の生きる糧になっていて——母の年齢をようやく越えた信子はガンジス川の岸辺に佇み、化粧をして多摩川の流れを見凝める母の影がガンジス川の川面に揺れ——信子は母の深奥に辿り着けぬとわかっていても、みずからを納得させる唯一の儀式なのでしょう。花卉の中

な悲劇はメタフィジックな世界への暗示のように見えますが、この書き手にはそのような資質および志向とは縁遠く感じ取れます。語尾の「ます」とか「ました」という表現は迷宮に誘う怪しげな響きが宿っていて、あくまで技巧的な効果を狙っているのでしょう。最後の二つのパラグラフはちよつと過剰なサービスのような気がします。

「城跡の怪人」（小笠原幹夫）では神楽坂の夜の裏通りの風俗が点描され、さらに平将門の亡霊が徘徊し、無気味な怨霊の闇の絵巻が展開され、あるいは男女の生臭い人傷沙汰のおぞましい事件に巡り会える、という期待感を抱きました。人捜いもどきのチンドン屋そして土管で寝ている学生などが登場し、まったく肩すかしをくらったよう、書き手のイマジネーションの貧しさがわかりました。

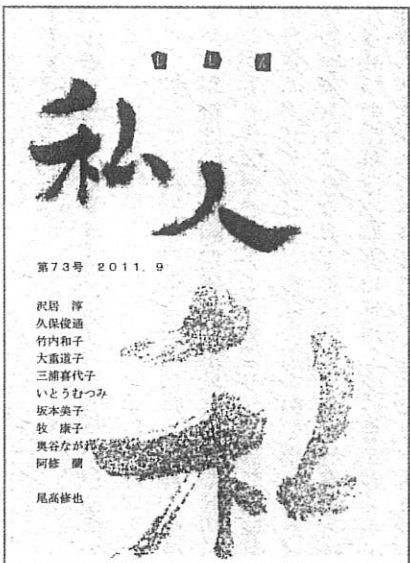
●「私人」73号（東京都）

「鬼門」（坂本美子）ではさばけた感覚と才覚が窺え、幾分か色彩感にも思まれています。田舎から出てきた加奈子は都会育ちで世渡りの上手な聖子と知り合い、娘の由紀も聖子に馴染み、聖子の好意に助けられたこともあり、聖子は社交的な性格を生かし、派手な暮らしぶり、最後は才覚に溺れて人生の階段を踏み外し、美しい容貌が魔法使いの老婆のように見苦しくなっています。堅実な加奈子は美容師として成功しますが、聖子との交遊よりも興味を惹くのは加奈子の田舎の生活風景であり——山深い村

では誰もが貧しい生活に甘んじていて、近親との婚姻は珍しくなく、育つにつれて頭が狂いはじめた子供はいつしか姿が見られなくなり、また川向うは差別を受けてきた集落であって——加奈子の佻しく暗い子供時代の影は東京の生活には反映されておらず、加奈子が意識的に避けている村の情景に視点を据えると、凄まじい闇が出現しそうに思います。

「五月の日曜日」(竹内和子)にはセンスの煌めきがあり、場面の変転も歯切れがよく、また姉妹の性格の違いも納得させる描き分けをしています。

「南の果てのシャングリラ」(阿修蘭)はストーリーの組



「狐野」(小松文木)は面白く仕上がっており、書き手の懐の深さを感じさせ、次はどのような趣向になるのか、楽しみにしているところです。

●「季刊遠近」44号 (東京都)

最近、東日本大震災を特集する同人誌が目立っていて、実力のある書き手では——山口馨は「渤海」62号の「水の言葉」で大震災で友人を失った老婦人の心情をテーマにしており、梶川洋一郎は「安芸文学」80号の冒頭でテレビに映る津波や福島第一原発の状況に触れています。

難波田節子はテクニシャンで、多様な料理法を心得ていて、狙ったテーマを上手にまとめており——「ノアの孤独」では、商社マンの村井はグルジアに出張し、久しぶりにアルメニアの通訳のマシーに会うつもりであり、仕事で片付くと、マシーの案内でアララト山を仰ぎ見ますが——グルジアの国の成り立ちやグルジアワインまたトルコとアルメニアの紛争の歴史さらにアララト山に漂着したとされるノアの箱舟など、その地域にまつわる話題が語られ、読みやすい筆遣いに感服するものの、どうも説明臭く、いささか虚しく感じます。大洪水が去って箱舟のノアは究極の孤独に苛まれるのですが、マシーもそのノアの見通しのつかぬ心情に涙を流し——マシーには東北の大津波の災害を受けた地域に日本人の婚約者がいて、お互いに離れた生活を余儀なくされているわけであり、村井は未来の閉ざされかかっ

み立てをもう少し洗練させると、もっと面白い物語になりそうで、フィリピンの下層民の貧困や差別とかにこだわらず、気ままな構想力の飛翔に酔えばいいのです。

●「断絶」109号 (東京都)

「相性」(武山博)は世界一周の船旅を素材にしており、観光地巡りにとどまらず、書き手の感性や観察力が表れていて、しかも小説とも旅行記とも識別できぬ文章の流れに文筆の冴えを感じます。百一日間で二十一カ国を訪れ、慌ただしく名所旧跡を巡りますが——北欧のフィヨルドやスエズ運河またジャマイカやエジプトのピラミッドなど、驚きと感動が待ち受けていて、多彩な印象に旅の心は軽妙に弾みますが、そこには視界に広がる風物と旅行者とのコレスポングスがあり、いわば相性ともいえるべきでしょうか。相性といっても、感覚的な好き嫌いではなく、旅行者の教養と知識の融和した精神の動きなのです。雄大な景色あるいは荘厳な寺院を見ても、その印象はそれぞれ違っているものの、みずからの感性に合うものが美しく輝き——記憶に深く刻まれるのは相性の良い遺跡や渓谷のようであり、この書き手のそういう視点は確かに貴重な指針になりそうです。

初めての地の名所や風俗の紹介だけでなく、同じツアーの観光客の動向もうまく取り入れており、豊かな色彩のパノラマになっていて、その熟練の技はなかなかのものです。

たマシーを励まします。ノアの箱舟に大津波を投影するのはともかく、被災者をマシーの婚約者に設定するのは安易すぎるようです。

●「まくた」273号 (神奈川県)

塚越淑行は難波田節子と同じように熟練の書き手で、小説技術は群を抜いています。精神の内部から湧き出るマグマの激しい噴出が希薄であり、そこが残念です。

「朝の川原」は父と母に捨てられて祖父母に育てられた男が主人公で、祖母が脳梗塞で寝たきりになると、妻は家を出てしまい、男は新聞配達をしながら祖母の面倒を見ていました。男は新聞配達はそのままつづけ——男は前向きな生活を送り、新聞配達はそのままつづけ——男は前向きな人生観ではなく、何事にも受け身であって、男の性分のよさうなところがあり、そこには両親および妻にも捨てられたという意識が歪んだ姿勢に反映しているようです。周囲の眼にはだらしなく映りますが、あくまで自分に素直でもあって、欲もなく、女や酒に関心を示すわけでもなく、暴れて世間の響きを買うようなこともせず——家出した妻が訪ねてきても、女の語るところを聴いているだけで、女心の言葉の裏の翳に気付かないままに女は事故で亡くなり——新聞販売店に配達要員として中年女が入ってきて、男のジヨギングに付き合ひ、販売店のおかみさんはその成り行きに興味を抱いていて、女は幾度か男の家に遊びにいき、や

がて住みつきます。風呂なし共同トイレの安アパートの風来坊とは違い、男には祖父の建てた家があり——見栄は張らず、贅沢もせず、変人と見做されていますが、男は意外に孤独に苛まれているのではなく、特異な空間が気に入っているのかもしれない、世間はそれがわからず、家に侵入してきた女も同類であり、男はやはり正体不明の人間のままで過ごしそうです。

「ハローウインの頃」(山之内朗子) は上品で艶のある文章であり、カナダ東部の風景から田舎の遠い想い出が甦り、旧家の情景がさわやかに描かれています。姉の菊子と妹の雪子は遊びにきた従兄の広夫との楽しい日々を共有し、雪子は広夫に気持を揺すぶられますが、旧家の流儀を超えず、また姉妹の性格の違いもうまく描き分けられており——仲の良い姉妹は家柄に相応しいお見合い結婚で充実した人生を送り、すでに夫を亡くした雪子は広夫の話題に触れるものの、巧みに抑制された筆遣いは旧家の暮らしぶりに調和しているようです。

●「Paedtal」11号 (神奈川県)

「厚い雲の下で」(大葉二良) は地球壊滅からその再生を暗示するスケールの大きな構想の物語であり、この書き手は芳醇な思想家ともいえそうですが——突然、天が裂け、雷鳴が轟き、烈風が吹き荒れ、紅蓮の炎は地上のすべてのものを焼き尽くし、天の怒りは新型核爆弾かもしれず——

労話ですが——蔵王連峰の南端の麓のこけし作りの町で、春菜はこけしの頭や胴体を作製する轆轤挽きの峰雄と出逢い、東京を離れてこけし作りの木工所に嫁ぎます。峰雄は結婚九年後にこけしの絵付けの巧みな未佳と駆け落ちし、一週間ほど戻ってくるものの、その一カ月後に——事情が変わったという書き置きを残して二人とも姿を消し、春菜は幼子の二人を連れて実家の鮎屋に帰り、兄の代になり、あるお客が掘り出し物を見つけたと自慢しながらこけしを見せ、春菜は轆轤線や絵付けの技法などから峰雄と未佳のこけしと確信し——箱根のホテルの民芸品売り場を訪ね、工房の場所を教えてもらい、十年ぶりに会う峰雄の表情を思い浮かべ、未佳に対する嫉妬や恨みの感情は暗く渦巻いていて——ようやく工房を見つけると、ランドセルの女の子がやってきて、その容貌に峰雄の面影を感じ取り、そこに作業用のエプロン姿の女が現われ、小柄でふつくらとした顔つきであり、母親になった未佳に間違いはなく——事情が変わったという書き置きは未佳の妊娠の意味だったと理解し、素直に納得はできないものの、家族には人違いであったと伝える気持になります。

白川ゆうきは表現が的確であり、人物造形もうまく、そういう小説技法は卓越していますが、旧来の枠を突破する意欲が希薄に思え、14号の「カプトムシが飛んだ」も繊細な計算が図られていて、地味な作風ですが、もつと注目さ

生き残ったのは私と娘の麗子そして廢墟をさまよう和子の三人だけとなり、携帯やインターネットは遮断されて他の連絡は取れず、壊れたスーパーから食料品を探し出し、ガソリンスタンドから燃料を調達し——いつしか三人は家族として暮らしますが、過去は消えて未来もなく、人間社会の気配も見いだせないままに数年が経ち、私は現在の不毛の境遇から脱出し、どこかに生存者がいるという信念の下で道なき荒野に突き進む決心をします。

●「たね」40号 (神奈川県)

「暗殺」(成井透) では伊藤博文を主人公とする日韓共同による映画製作の話が映画監督の山室学の下に持ち込まれ——劇作家や大学教授などの知恵を借りて構想を練りますが、伊藤博文の暗殺犯とされる安重根の立場に立つと、当時の日本の朝鮮政策の否定に繋がり、伊藤博文を重視すれば朝鮮侵略を正当化することになり——実際、安重根の撃た弾丸数と伊藤博文およびその側近の体内から確認された弾丸数には十発ほどの差異があつて、安重根の暗殺を否定する有力な見解もあり——山室学は事実関係をじっくり洗い直し、安重根の立場からの構想に傾いてゆきます。明治時代の中心人物であつた伊藤博文の暗殺事件の真相は現在の歴史解釈にも関係しているようです。

●「狐火」16号 (茨城県)

「こけし」(白川ゆうき) は駆け落ちした夫を探す妻の苦

れてもいいのではないのでしょうか。

●「シリウス」21号 (茨城県)

「白い街の黒い霧」(丹地甫) はニコラエフスク事件を扱つており、日本側の立場で描いていて、赤軍と日本の守備隊との戦闘は完全な敗北であり、雪の中の悲惨な状況に胸が打たれますが、ストーリーの巧みな展開に熟練の手腕が光っています。

「警報の事始め」(堤之智) では日本における気象観測および天気予報の歴史が述べられており、たとえば——ドイツのクニッピンゲは漁船や客船の海難事故を防ぐために海上の天気予測に専念し、各地の測候所からの電報情報を解析し、強風が予想されると、暴風警報を出すようになり、暴風といつても現在の台風の暴風の意味ではなく、強風に注意せよというレベルであつて——最初の暴風警報は明治十六年五月二十六日に発令され、その研究の発展が雨や晴れの天気予報になり、天気予報から暴風警報が生まれたのではなく、意外な気がしました。

●「南風」30号 (福岡県)

「死なない蛸」(紺野夏子) はあまり上手とは思えぬ書き出しですが、読み進むにつれて地域開発の状況とその流れに取り残される弱者の立場が鮮明になっていて——孝介とは病弱な父と足の不自由な母がいましたが、父の七回忌と母の三回忌を済ませ、二百坪の土地と建物があるものの、

孝介にははつきりとした今後の見通しはありません。向かいの家の幼馴染の順一との付き合いが気晴らしになっていて、しかし独り身の順一は精神を病んでおり、彼の動静に気をかけるのも負担になっていきます。一年ほど前に友野という若い不動産屋と知り合い、庭の雑草取りを頼みますが、すつきりした庭に父の集めた二十数体の石灯籠が現われ、庭は父と母の聖域であったことに思い当り、自分で掃除をしなかった事実の後悔の念を抱きます。順一と近くのひじり神社の境内を歩いていると、鬱蒼とした樹木がなくなり、付近には新しい住宅が建っていて、時代の変遷に気付きませんが、順一からみずからの足を食べて生き抜く蛸の話も聞いても軽く頷き返すだけでしたが、数週間も順一の顔を見ないので訪ねてみると、彼のベッドの上には——餌のない蛸は自分の足を食い、体全体を食いつくし、しかし蛸は死なず、姿はないのに水槽の岩陰で生きつづけていた、というようなコピーが散乱していて、孝介は異常な順一を病院に入院させます。久し振りに友野が顔を見せ、気のいい好青年と思いついていましたが、餓死寸前の土地持ちを狙うハイエナに思われ、孝介は闇の中で怯えるイメージに取り憑かれるものの、世間に対する意地を自覚します。

●「海」5号・通巻72号（福岡県）

「漂砂」（有森信二）——天井がぐるぐると回り、漆黒の闇に光と音が交錯し、光の束が輝き、アンドロメダ星雲の

親の墓参りをし、その住職の滋叡の配慮で通行手形を手し、剣術の修業の旅に出る決心です。誠太郎は旅支度を整えますが、そこには孤愁の影が漂っています。特別な意匠に凝らず、落ち着いた基調であり、書き手の器の大きさが読み取れます。

●「流水群」54号（鳥取県）

「密偵」（柴田宗徳）は幕末動乱期の京都周辺の村の情景を描いています。庄屋の平塚源次郎の屋敷に長州藩の密偵が逃げ込み、足の負傷で歩けなく、源次郎に匿われますが、奉行所の知るところとなり、密偵は捕えられ、源次郎は牢獄に入れられます。やがて大政奉還になり、源次郎は釈放され、王政復古から鳥羽伏見の戦いへと京都の状況は目まぐるしく変転し、都大路を長州藩の兵隊が通っていて、馬に跨った陣羽織の指揮官の一人が源次郎に助けられた密偵であり——平塚村やその周辺の農村は政局とは別の時間が流れており、京都との状況の違いが浮き彫りにされています。

●「安藝文学」80号（広島県）

文沢隆一の「日本語の空間」おぼえ書（その一）は人類の誕生から邪馬台国までの壮大な時間と空間の遊歩道であり——アフリカの原人がどのようにしてユーラシア大陸に辿り着いたのか、あるいは樺太とシベリアが陸続きの時代ではシベリアのモンゴロイドが日本に渡ってどのような

ような光景に変化し、その瞬間にすべての者が消え——星も月も地も、さらに人も光も闇も時さえも消滅し、茫漠とした空隙のみが残され——神経を病んだ大学教授は高熱にうなされながら六歳か七歳頃の幻影を甦らせませす。長男は農業か漁業の親の仕事を引き継ぐのが昔からの因習ですが、その離れ島を捨てて教授のポストにまで出世したものの、高血圧に起因する精神の異常な状態に陥ります。離れ島から逃げだし、年老いた両親を見捨てた報復という暗い悔悟に取り憑かれ、病んだ意識はますます迷路をさまよっているようです。教授の業績や社会的評価は虚しい蜃気楼となり、大学の冷たい視線に翻弄され——教授のメタフィジックな闇を深く抉っています。

この書き手の多彩な発想は驚くべきものです。

●「佐賀文学」28号（佐賀県）

「一陽來復」（慧口孟思）は浪人の大串誠太郎が新しい道を目指す話であり——佐賀藩は江戸幕府の初期に童造寺家に代わって鍋島家の支配になり、誠太郎の祖父および父はあくまで童造寺家に忠義を尽くして、そのあおりで貧乏生活を余儀なくされていましたが、剣術はしっかりと修業しており——誠太郎は家屋敷を売り、神社の境内で寝泊まりしていると、盗賊が奪った金銭をクスノキのそばに埋めるのを目撃し、それを奪う気持ちに揺れますが、父母の教えに反するやましい心と思いとどまらず。誠太郎は両



変転を遂げたのか、そして大和朝廷の成立の背景はどうなっていたのか——文沢隆一は数多くの資料を読み漁り、みずからの精神世界での発酵と成熟のプロセスを経て文章として具体化させています。資料に押し潰されず、余計な引用に依存せず、すべてが自分の言葉で語られており、そこに文筆の冴えを感じます。思想家といつか哲学者といつか、そういう風格が漂っています。

●「四国作家」43号（香川県）

「一枚の赤紙」（坂井幸二）は日本兵のミンダナオ島のジャングルでの過酷な逃亡記ですが、冷静な視線が維持され、感情に流されぬ堅実な内容になっています。松下浅吉は二度目の赤紙で、ミンダナオ島に派遣されますが、制海権や

制空権はアメリカに握られ、上陸したアメリカ軍の掃討作戦に逃げまどい——民家を見つけると食べ物を探し、ジャングルではヘビやカエルなどを生のまま口に入れ、そのような悲惨な逃亡生活に瘦せ衰え、気の狂った仲間はずから命を絶ち、捕虜になると、墓場を掘り返して腐敗した肉を棺桶に移す作業などをやらされ、ようやく一年後に日本に送還されます。生と死の狭間の生霊が情動を抑えて書かれていて、戦争や正義また平和などについての考察を避けているところに書き手の無念の思慮が滲んでいるようです。

「青い花」(堀川佳) は泣き母を想う心が哀しくも抒情的な色彩に融け込み、哀切な余韻を残しています。

●「海峡」26号(愛媛県)

「越智で崩じた斉明天皇」(京あすか) は古田史学の九州王朝説を背景にした歴史小説です。九州北部では何百年も王朝がつづいていて、朝鮮半島および中国との交流は盛んであり——七世紀になると、畿内では飛鳥王朝が発展してきて、九州王朝との覇権争いの兆候が表れ、その緊張感を緩和するために飛鳥の宝皇女は筑紫朝の舒明天皇に嫁ぎ、その十年後に舒明天皇は崩御し、宝皇女が斉明天皇になります。その頃、百済から援軍を求めた使者が到来し、唐や百済の侵略的姿勢が脅威になっていたので、斉明天皇は九州王朝だけでは対応できないので飛鳥朝の軍事支援を

求めて飛鳥の地を訪れます。宮殿の高御座には大海人皇子が座っていて、斉明天皇にとつて三十数年ぶりの我が子との再会です。大海人皇子はしかし斉明天皇の要請を断りま

す。斉明天皇は吉備や伊予で軍勢を集め、百済救済に向かいますが、唐と百済の連合軍に敗北し、それが白村江の戦いであつて——中大兄皇子は舒明天皇と斉明天皇の子供であり、大海人皇子の異父弟に当たるわけですが、中大兄皇子は九州軍団の敗走を見て近江の国に逃げ帰り、やがて天智天皇になりますが、九州王朝の軍勢が百済救済に海を渡つたとき、大海人皇子は手薄になった九州を攻め立て、九州王朝は急速に崩壊します。斉明天皇は伊予の越智の国で大海人皇子の策略を知り、敗れた九州王朝の供養のために木彫りに熱中するものの、失意のうちに越智の国で亡くなります。天智天皇は数年で崩御し、大海人皇子は天智天皇の後継者の大友皇子を討ち、それが壬申の乱であり、九州が戦場になったという説もあつて——大海人皇子は天武天皇となります。

古田史学は従来の通説とは大きく異なっていて、これに基づいて小説を書くとなると、登場人物の時代や場所を組み立て直す必要があり、従来の歴史と古田史学との詳細な比較検討に相当な努力をしなければならず——京あすかの「越智で崩じた斉明天皇」は異色の作品になっています。「転生」(藤井聡子) は奇妙な雰囲気を漂わせており——

慶太は利発であつても孤独に沈んでいて、未来の現象や過去の出来事を見通す特異な透視力があり——才能の問題ではなく、人知を超えた宿命のようなものであつて、論理的に説明しようとする努力は世間に毒された安っぽい発想にしかすぎず、謎は謎のままがいいのではないでしょう。

●「八月の群れ」53号(大阪府)

「隅田・花川戸界限」(大森康宏) は浅草周辺の風俗や人情などの織り込まれた面白い読み物で、この書き手は小説という枠など気にせず自在に筆を走らせば、そこに情緒の豊かな人間模様は浮き上がってきそうです。

清次は吾妻橋の中ほどに佇み、隅田川の匂いとそよ風に心地よさを感じ、東側の川沿いの染井吉野の花道をぶらつき、茶店の縁台に座り、冷えたビールで喉を潤し、さらに鯉のたたきと熱燗を頼み、ピンクの花びらの舞う桜並木の風情に十年前の浅草の景色をだぶらせていると、女に声をかけられ——浴衣がけの女は井筒屋の民子であつて、清次が鳶の頭として活躍していた頃によく利用していた料理屋の芸者であり——この導入部には下町の情緒がにじみ、ひとつの絵画になつていようです。

清次は二十五歳のときに鳶の花田組を継ぎますが、二回りほど年長の小政が若い清次を支え、小政は気性の激しい連中に睨みを利かせ、いわば花田組のまとめ役であり——清次は小政の忠義心は痛いほどわかり、四十歳頃に小政に

花田組を譲り、千葉の外房での小料理屋に転身し、久し振りに浅草や向島の空気に触れ、テキ屋の上州屋との険しい採め事などが脳裏を掠めているのかもしれないが——小政は相変わらず精神的に動いていて、テキ屋の上州屋とは厳しい緊張関係のままであり、小政は清次の意見を取り入れて花田組から「鳶・花田」に看板を代え、テキ屋とは一線を画します。

清次は外房に帰り、三社祭りの前日に浅草に戻つてきて——小料理屋を手伝う里江を伴つており、彼女とともに浅草界隈の賑わいを愉しみ、そのときに里江のお腹に自分の子供が宿つていることを知り——清次は「鳶・花田」の連中と御輿を担ぐ自分自身を想い浮かべます。

「谷嵐」(堂本育司) では将来を期待されている柔道部員の安藤俊介がチンピラとのいざこざに巻き込まれ、柔道を離れて格闘技に挑戦します。拳法の技法や足関節技の修練を積み、メキメキ上達し、必殺技は「谷嵐」で、恩師の栗原より伝授された大技です。デビュー戦では予想を覆す勝利の美酒に酔います。

このストーリーの中で木村政彦の戦歴が語られていて——昭和十二年から二十五年の引退まで無敵を誇り、プロレスに転向すると、力道山との熾烈な勝負に挑み、そこでは興行界という魔物に翻弄されるところがあつて——また姿三四郎のモデルは講道館の四天王のひとりの西郷四郎で

あると語られていて、その他にも柔道に関する昔のエピソードなどがふんだんに取り入れられています。

この書き手の筆力や構想力には躍動感が溢れ、エンターテインメント小説の活路は開けてゆきそうです。

●「ばさーじゅ」24号（大阪府）

「河原院」（橋本みのる）では融の大臣の贅を尽くして設営した河原院が素材になっていて、広大な庭には陸奥の塩釜の浦の風景が再現され、池の奥に松島の島々も点在しており——融の大臣は遊蕩児また浪費家とも陰口を叩かれていましたが、一瞬の輝きに身を任すという滅亡の美意識に殉じたのかもしれない——宇多法王は融の大臣の孫から河原院を贈呈され、荒れた屋敷を美しく造営し、そこに寵愛する褒子（よしこ）と移り住むと、融の大臣の亡霊が現われ、やがて漁夫の姿になって塩釜の浦の鳥影に消えてゆきます。王朝時代を偲ばせる幽玄な趣きの散文であり、情趣に満ちて澄み切った象徴性が感じ取れ、散文による象徴詩といっても赦されそうです。

「誕生」（佐藤駿司）——高台のサナトリウムを出た「僕」は道案内の老人と霧がかかって見通しの悪い山道を下りますが、どこに向かっているのかはわからず——白亜のサナトリウムは何なのか、「僕」はなぜサナトリウムに入っていたのか、そこを出るのはどういう理由なのか、道案内の老人は何者なのか——すべてが不透明な謎に包まれていて、

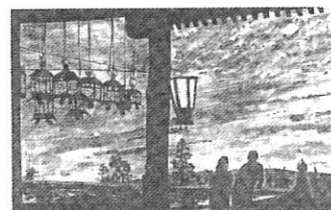
サラリーマンの井上真紀男は出勤途中で息苦しくなり、道路や建物が歪んで見え、コンビニの駐車場に車を止めますが、全身の力は抜け、意識は朦朧とし——心の奥底のパンドラの箱が開けられ、記憶と想念の混在した幻聴と幻覚に捉えられ、どこからともなく死への誘惑の暗い囁きが忍び寄ってきます。

妻の瑠香の声がして振り返っても妻の姿はなく——横断歩道では身体が利かず、トラックに轢かれそうになり——アパートのテラスで外の景色を眺めて手摺に近寄ると、瑠香が慌てて室内に引き摺り込み、飛び降りる気配を察したからであって——心療内科に入院すると、車椅子の老婆から死神に取り憑かれているといわれ——瑠香に案内された病院のベッドには自殺騒ぎで運び込まれた中学生の頃の自分自身が横たわっていて——無意識の下で蠢いていた奇妙な現象に慄然とします。

闇が消え、眩しい光——ベッドの真紀男の手を妻の瑠香がしつかり握っており——真紀男はコンビニの駐車場から病院に搬送され、二週間の間、生死の境をさまよっていて、幻聴や幻覚は真紀男の意識の中の事象であり——読み手をうまく錯覚させる書き手の策略が成功しており、その筋書きに文学的魅惑の香りが漂っています。

この書き手は新しい地平の開拓に挑戦していますが、次の作品では辛い壁にぶち当たるのではないのでしょうか。

ばさーじゅ
passage



第24号

いや、「僕」もサナトリウムも幻想であり、どこにも存在せぬ非在のものであって——自由の難しさ、存在の不安とそこからの叩き、あるいは論理を排除する不条理の翳など、すべては辿り着く場所のないことを暗示しており——川の流れと同じようにすべてはたえず変転し、形のない意識の戯れの形象が「僕」であり、サナトリウムであり、道案内の老人であるのかもしれない——メタフィジックな世界に昇華してはじめてこの世の真相に近づけそうです。

●「じゅん文学」69号（愛知県）

「デッド・タイム」（若草田ひずる）の文章にはリズムがあり、爽やかな感性の舞によって惹き込まれ、そこには書き手の未知なるものへの挑戦意欲が漲っています。

「逝くとき」（山田緋紗野）は繊細な心遣いの織り込まれた品格のある文章であり——余命わずかな癌患者の夫を看病する妻の視線で描かれており、患者と医師また家族や看護婦などの秘かな思惑をも冷静に捉えていて、死にゆく者の姿に抑制された筆致で的確な輪郭を与えています。

今回の推薦作は次の通りです。

- 「厚い雲の下」（大葉二良 [Pagada] 11号）
 - 「死なない蛸」（紺野夏子 [南風] 30号）
 - 「漂砂」（有森信二 [海] 5号・通巻72号）
 - 「日本語の空間」おぼえ書（その一）（文沢隆一 [安芸文学] 80号）
 - 「隅田・花川戸界限」（大森康宏 [八月の群れ] 53号）
- 準推薦作は次の通りです。

- 「灰」（しんりゅうう [山形文学] 第100集、「川へ」（斎藤よし子 [婦人文芸] 91号）、「櫻の忌」（宮崎喜代美 [全作家] 83号）、「こけし」（白川ゆうき [狐火] 16号）、「越智で崩じた斉明天皇」（京あすか [海峡] 26号）、「誕生」（佐藤駿司 [ばさーじゅ] 24号）、「谷風」（堂本育司 [八月の群れ] 53号）、「河原院」（橋本みのる [ばさーじゅ] 24号）、「デッド・タイム」（若草田ひずる [じゅん文学] 69号）、「相性」（武山博 [断絶] 109号）

（全国同人雑誌振興会／東谷貞夫）

●「じゆん文学」70号(愛知県)

「見返り仏」(若草田ひさる) は死者を見送るカラツバの葬儀儀式をテーマにしています。垂直に伸びる構想力の躍動があり、巧妙な構想のバランスもよく、平面的でなく立体的な彫込みがあり、しかも場面の転換に切れ味があります。このようなテーマでは重苦しい言い回しあるいは観念的な陰影などが随所で用いられそうですが、肩を張らず誇張せずの恰かな文体によってむしろ乾いた感覚の穏やかな表現になっていて、呪文や魔術とはほど遠い捌けた基調に貫かれています。



鹿児島県の大隅半島の山間部にある神沢集落でははるかに前より葬儀はカラツバの儀式で執り行われています。カラスの翼から抜き取った風切羽を水洗いの後に天日干しにし、妙妙に手入れする

と、黒く潤い、それをカラツバとします。カラツバで死者の頭から足元まで撫で清め、厳かな気持ちで胸元に置くと、死者の口許から頰にかけて仄かな微笑みが浮かびます。そのかすかな表情の変容を見返り仏といい、成仏の象徴とされます。またかつては神沢集落の誰もが魔除けとしてカラツバを和紙に包んで身につけてもいたのです。

井之岳エツは八十八歳の米寿で、夫の俊夫の死後、カラツバの儀式を継承し、神沢集落の死者の霊を守っていました。台湾育ちのエツは、幼い頃から疫病や戦争による死体が野原に捨てられて異臭を放つ悲惨な状況を見ていて、俊夫に嫁いだときはカラスを殺してカラツバを作る作業に馴染めなくて食べ物は喉を通らず、しかし俊夫の真摯な姿勢に感服し、さらに死者を成仏させるという崇高な使命に目覚めます。現在ではカラツバの儀式は時代の流れから取り残され、しかも土葬は嫌われ、忌わしい儀式あるは邪宗の類と見做されて、神沢集落の衰退とともにエツは偏見と中傷の荒波に晒されます。神沢集落の自治会長からはカラツバの儀式の廃止を求めるといふ抗議を突き付けられ、エツは本能的にしかも無意識に現代の世相に反発しますが、そのエツの心を侮辱するように海上自衛隊のジェット機の金属性の爆音が集落に響き渡ります。身体を衰えエツの意欲をそぎ、暗い影に蔽われたようになっていきます。

娘の民子は神沢集落の外に出てエツの秘伝とは無縁ですが、母親を心配して久し振りに帰ってくる、田畑は雑草に埋もれ、屋根の崩れた廃屋が目につき、昔日の面影を失った神沢集落の姿を痛感

●「弦」90号(愛知県)

「夜うるろ(こ売り)」(大西真紀)はスケールの大きな構想ですが、欲張りすぎというか、筋書きに難があります。しかし大風呂敷を広げる気迫は評価すべきでしょう。

「三浦絞り」(安藤敏夫)は律儀な作風であり、歴史上の織物や陶器などの素材を掘り下げてゆくとところにひとつの方向が見えます。

「六甲山ホテル」(樽木祭)や「ヴァージンロード」(長沼宏之)はひたむきな姿勢が窺えます。これが一貫すれば個性として結実しそうです。

●「弦」90号(愛知県)

「汗血馬の国」(白井康)は中央アジアの大宛国の汗血馬を巡っての大宛国と前漢との闘争の物語

です。叙事的で清潔な文体は芯が強く装飾を排除して、戦争に向かう緊張感が叙述の中に滲んでいます。前漢の武帝は張翥の報告書によって一日千里を走る汗血馬の存在に興味を抱き、その汗血馬を入手するために大宛国に使者を派遣したところ、大宛国の王の母寡はその使者を皆殺しにします。怒った武帝は大軍を立てて大宛国に攻め寄せますが、大宛国の張翥の策略で破れます。再び何万という遠征軍を差し向けます。軍勢ではるかに劣る大宛国は再び危機に陥りますが、またもや張翥の巧妙な知恵で、和議条件として王の母寡の首を差し出し、さらに二十頭の汗血馬を与えて、窮地を脱します。張翥は国を守るという信念に殉じる覚悟を決め、その信念が卓越した策略を生みます。政治を疎かにする母寡を殺して武帝の軍に首を差し出します。戦乱による人民の犠牲と国上の荒廃を憂う気持ちも勝ち、それが国を救ったわけです。感情や思想などの激しいうねりを避けた簡潔な表現は逆に緊迫した臨場感を伝えています。

●「季刊作家」75号(愛知県)



「運雛」(長谷川泰隆) は現実と非現実の交錯する精神の間が描かれています。守は不思議な女子高生と出逢い、彼女に導かれるように神社の裏手の杉林を抜けると、牡丹雪のカーテンが消え、目の前に本牧のショッピングモールの建物が見えます。かつては映画館や娯楽施設があつて、妻や娘と遊んだことがあり、その記憶が甦ります。(いまは廃れてスーパーだけになっています)。守の祖父の兄は返子開成中学に通っていて、明治四十三年一月のポート遭難事件で亡くなっており、守という名前です。その恋人は咲で、謎の女子高生の名前も咲です。守は祖父の兄のイメージに自分を重ねながら不可解な幻想の中を浮遊し、妻や娘あるいは友人とも連絡が取れなくなり、現実とは離れた時空間をさまよいます。世の中の繋がりと断絶したようであっても、これが無意識に望んでいた状況であるのかも、と不思議な気持ちにとらわれます。現実と非現実の間の遊泳感に逆リリアリティがあり、江の島沖の海難事故の着想は品のいい情趣になっています。

●「文芸中部」88号(愛知県)

「えにし(の果て)」(堀井清) 世の中には陰湿で悪質なウイリスのようなものが確かに存在し、繁華街や路地裏また住宅街などに浮遊していて、それに取り憑かれると、正道が歩めずに暗い宿命の餌食になるようです。

全国同人雑誌振興会

しながらもエツを入院させます。エツにとつてカラツバの幻が最良の薬になるのでしようか。

●「劇」6号(愛知県)

「初乃さんの庭」(朝岡明美)は隣同士の家族の触れ合いの中に温かな人間味がしつとりと滲んできて、初乃さんの庭のモチの木にひよどり止まり、赤い実を啄んでいて、そこに千沙子が回覧板を届けに来ると、初乃さんは唇に人差し指を当てて二羽のひよどりを眺め、この導入部は穏やかな日常の断面を描き、親しい人間関係をおのずから表しています。初乃さんは先に先立たれた老妇人であり、千沙子は二十歳代の後半で都会生活に疲れて戻ってきており、初乃さんは千沙子の苦しい胸の中を推測しながらもいつも優しく接して、彼女に小さな雑誌社を紹介し、彼女は都会への未練を断ち切ります。事件もドラマもない地味な筋書きですが、書き手のさりげない温かな視線が生きているようです。

春日俊一は交通事故で老婆を死亡させると、期待されていたサラリーマン生活を捨て、人格が崩壊したように酒や競馬に溺れはじめ、かつての会社の部下で心配して訪ねてきて、心を閉ざし、現実からますます遠ざかっていきます。俊一の父親の和夫は喫茶店経営に失敗し、すべての資産を失い、安アパートに夫婦で暮らしています。和夫は生きる意欲から見棄てられ、深い濃霧の中に佇んでいますが、宙ぶらりんの見通しの立たぬ生活に沈んでいます。父親と二人の兄弟は不可解なウイリスに毒され、もはや立ち直れず、いつそ深い闇に呑み込まれます。俊一は心臓発作でこの世に別れを告げますが、いわば自殺のようなものであり、彼一自身の心の闇に呑み込まれた形になります。この書き手には鋭い表現はないものの、ゆつたりとした暗い色調の中に人生の表裏が顯れています。

「狙撃」(本興寺更)は細部の計算がしつかりしており、無駄のない洗練された文章には熟練の技が感じ取れます。

足輕の小弥太は家老より暗殺命令を受け、銃を手渡されると、身辺を整理し、秘かに想いを寄せた女とも辛い思いで別れます。覚悟を固めて行列の駕籠に乗った藩主の弟を狙うのですが、わざと外し、深い山を越えて隣国に逃げます。その一年後、命令した家老は偽者であり、藩主の弟が兄の藩主を陥れた策略であることを知り、小弥太は現在の藩主つまり策謀した弟を狙う決意を固め、前回と同じ狙撃地点で引き金を引きます。引き締まった時代小説です。



●「湧水」50号（東京都）

「嘴」（坂東聡子）はまとまった好短編です。可愛がっていたセキセイインコが逃げ出した小学五年生の明子は、学校の朝の会で見つけたら連絡して欲しいと訴えます。母親の敏子は市の広報紙にインコの特徴を書いて掲載してもらったところ、見つけて刺つているという連絡があつて喜んだものの、イタスラであることがわかります。敏子は気落ちして空の鳥籠を片付けます。よくできていますが、ちよつと丁寧過ぎる感じがところどころあるので、もう少し軽く捌いてもよかつたかもしれません。

「砂漠の旅人」（冬樹美緒）はモロッコのロイズカラの砂漠を訪れた話ですが、いささか細部の説明にこだわらず、旅の弾んだ気持の躍動に欠け、さらに優子の家庭のことなど、話題を詰め込み過ぎてストーリーの流れが重くなつていきます。

「村の医者」（飛田一歩）は部会から離れた片田舎の人間模様が古臭い因習とどかな風景を背景に、中年の山好きが福島県の浄土平などを単独で歩き、小屋の明月荘での月見酒の情趣を愉しみにして、山小屋で中学生の団体に遭遇し、静かな夜のひとときを語ります。構成は巧みで、山歩きを経験による熟成された山の香りが伝わってくるようです。

●「埋火」50号（東京都）

「埋火」は吉満昌夫の個人作品集です。吉満昌夫は自分流の生き方に徹しており、書くことも食事や睡眠と同じレベルのことと考えているようです。重心が低く骨太の筆遣いはこの世の実相を抉っています。長年の修練によって、身近な題材に手を触れるだけでも作品になるといふ技術と準備、リアリティを損なわずともリアリティが表れています。

「一本屋の街で love again」（坂木ゆくら）は自由な発想で気ままに書けば意外な地平が現れるという好例のひとつかもしれません。想定以外の気まぐれの思いつきが随所に見られ、ちよつと脱線気味に突っ走ったのが、たまたま書き手の意図と偶然の要素がうまく融合して、すばらしい作品が仕上がったという印象です。

「名月荘の一夜」（杉本増生）は研えた筆遣いであり、中年の山好きが福島県の浄土平などを単独で歩き、小屋の明月荘での月見酒の情趣を愉しみにして、山小屋で中学生の団体に遭遇し、静かな夜のひとときを語ります。構成は巧みで、山歩きを経験による熟成された山の香りが伝わってくるようです。

●「未踏」65号（東京都）

「未踏」は新しい試みをしているわけではありませんが、ペンを持てば自然に文章が流れ、気負いも飾り気もない箱庭のような穏やかな風景が生まれ、そこには生活とか人生とかが素朴に融け込んでいて、澄んだ眼の底深い静謐さともいえるものが宿っています。

「緑側」（明田好弘）は新しい試みをしているわけではありませんが、ペンを持てば自然に文章が流れ、気負いも飾り気もない箱庭のような穏やかな風景が生まれ、そこには生活とか人生とかが素朴に融け込んでいて、澄んだ眼の底深い静謐さともいえるものが宿っています。

「ふふふ」（蛇石孝郎）というエッセイは読み手の頭の中板に仄仄とした呪文を投げかけているようで、奇怪でありながらも興行のある優れた作品です。

●「飛行」34号（東京都）

「飛行」は松井は古びた家の縁側の柱に凭れて垣根に囲まれた庭の景色を眺めるのがお気に入りであり、さるすべりや柿の木などには昔の思い出が漂っています。松井は妻の美子を亡くし、娘の慶子は小学五年生です。近くのアパートに住む政子は松井の家の世話をしており、政子の息子の幸一は松井の家庭に馴染んでいます。松井と政子そして慶子と幸一の四人の相性がうまく調和して、やがて二つの人間の家族が一つになりつつあります。

六十歳代半ばの松井は古びた家の縁側の柱に凭れて垣根に囲まれた庭の景色を眺めるのがお気に入りであり、さるすべりや柿の木などには昔の思い出が漂っています。松井は妻の美子を亡くし、娘の慶子は小学五年生です。近くのアパートに住む政子は松井の家の世話をしており、政子の息子の幸一は松井の家庭に馴染んでいます。松井と政子そして慶子と幸一の四人の相性がうまく調和して、やがて二つの人間の家族が一つになりつつあります。

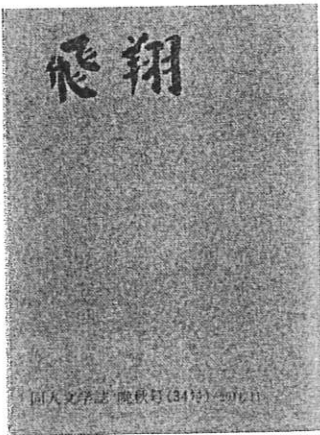
「目覚めと憂鬱の夜想曲」（三仏生蒼生）は存在

●「目覚めと憂鬱の夜想曲」（三仏生蒼生）

「目覚めと憂鬱の夜想曲」は存在

「目覚めと憂鬱の夜想曲」は存在

「目覚めと憂鬱の夜想曲」は存在



の真しきあるいはこの世の不条理を訴えているのか、厄介な謎々のようにも感じられます。

●「なんじゃもんじゃ」(秋鹿号・通巻12号(千葉県))

「蜂の子」(飯) (大鳥たか子) は爽やかな切れ味で農村地帯の子供達の遊びの断面を描いています。蜂を追って山に駆け込み、大きな杉の木の根元の蜂の巣を見つけると、煙で蜂をいぶりだし、何層もの巣を掘り出してその中の幼虫を食用にするのですが——冷智で正確な表現は子供達の息遣いが伝わってくるようであり、森や田畑のどこかな風景も鮮やかに浮かび上がってきて、また蜂の子ご飯を食べる子供達の表情は現実感に溢れています。この書き手の文体は間違いなく明確な輪郭線で捉えられた対象の自身をも表しているようです。



●「海」6号・通巻73号(福岡県)

「虚空疾走」(有森信二) は不可解な精神状態を虚空での疾走に見立てています。——厄年の飲んだくれ男が主人公です。昭夫は酒に魅入られて妻と子供に逃げられ、どこかの暖簾も濡れなくなっていて、いまでは酒場・下田でしか酒にありつけま

せん。それは女将のお吉さんの情けであり、その支払いが女将の息子の酒屋の手伝いでまかなってあります。

そんな昭夫があるとき踏切で飛び込み自殺をする若い女を助け、風呂なしのぼろアパートで面倒を見始めます。由加は農協の金を愛人に貢いで逃亡して、昭夫はすべての事情を呑み込み、奇妙な二人暮らしがはじまります。助けた由加は険しい形相で死ぬことに執着し、鉄で昭夫に切りかかるほどでしたが、やがて落ち着き、肌の白い美人で男心を狂わす媚態をにじませます。昭夫は女との現実に関われ、まともな生活に戻っていきま

す。深酒を飲み、早くアパートに帰り、由加も簡単な料理を作って待っています。彼女の存在が彼の意識を支配するようになり、昭夫はいつか由加が姿をくらますことに怯えます。下田の女将は昭夫の変身ぶりに驚くもので、一波乱を予感があります。昭夫は長年の酒漬けで胃や血液に異常があります、いつ倒れても不思議では無く、生命保険の受取人を逃けた妻から由加に変更しますが、やはり由加は姿を消し、昭夫は死に物狂いで彼女を探し、線路脇の石の地蔵を由加と錯覚し、抱きかかえて連れ戻そうとします。その錯乱状態に警察がやってきて、お吉さんのとりなしで収まり、郵便受けには名義変更された保険証書が届いています。

ここまでいいのですが、最後の落し所に迫力があります。由加の幻しか見えぬ昭夫がアパートで彼女に話しかけ、二人の幻の生活が続き、しかし幻覚に生きる昭夫は瘦せ細って石の地蔵に抱きついたまま血を吐き、彼女との幻想の旅路を辿り続ける——むしろそのような結末の方が虚空疾

です。

「帰郷」(神崎たけし)の引き締まった文章は流れもよく、熟練の技が冴えています。さらに田舎に生まれ育った人の心の振幅や思考の幅を的確に捉えていて、独自の地元意識による朴訥とした人情が漂っています。

洋一は事業に失敗し、妻とは別れ、生まれ故郷に十五年ぶりに戻ります。昔風の気質であり、奥の親戚は洋一を温かく迎えてくれます。仏壇の隅から伯父の耕一のハガキが見つかり、ビルマで戦

死したはずの耕一がタイで生きていたことが、祖母はそれを勘づきながらも黙っていました。叔母の春子と洋一は耕一の遺骨を届けに来た戦友に会いにゆくと、すでに亡くなっています。息子が夫婦の温かいもてなしを受けました。しばらくしてチェンマイの居酒屋の主人の父親はビルマから脱出した日本人であり、絵が上手という情報が届き、耕一である条件を満たしています。春子叔母をはじめ親族はタイへの捜査旅行を計画します。その頃、洋一の別れた妻がやってきて、洋一の生まれの風景および人間関係が耕一に関する事実の究明に触れつつ巧妙に描かれていますが、別れた妻が戻ってくることによってその優れたストーリーが台なしになってしまった観があります。まとまりをつけようとする弊の偏狭さに囚われている印象です。

●「ガランス」19号(福岡県)

「共犯者」(宇内帰一)はミステリアータッチの作品であり、堅実な構想の下で緻密な計算がなされ、巧妙な伏線が随所に張り巡らされていて、立

走というイメージに相応しいかもしれせん。昭夫は悪人になりきれず、またお吉さんや保険会社の友人などもちょっと善人過ぎるようで、昭夫をもっと突き放す視点が必要に思われます。

●「照葉樹」11号(福岡県)

「変成自伝史」(西村弘之)では、東京から大阪への転動を契機にしてジョギングや山登りを楽しみ、さらにマラソンに挑戦するという新しい生き方の記録が綴られています。大阪周辺の山歩きそしてホルルマラソンなど、五十歳からの変身であり、海外マラソンに出場すると、ドイツやギリシヤなどの観光地を巡り、自由な生き方を満喫していますが、文章が律儀すぎて、事実の叙述に気を取られ、色彩や香りに乏しくなっています。正確な記述がむしろ欠点になっているようです。初めて作品という点ですが、次作では肩の力が抜けて面白いエピソードが挿入されそうです。書き手の気ままな旅行絵巻が期待されます。

●「錯綜」(水木悳)は書店の出世競争がテーマになっていますが、この書き手には窮屈すぎる印象です。男に騙され捨てられたなつみか憧れの圭吾のためにメンチカツの材料を仕入れ、スーパーの袋を提げたままの姿で警察の前に立つ場面には凄味があり、日常の感覚を失ったなつみの眼には圭吾の幻しか見えないのでしょう。

●「九州文学」16号・通巻539号

「あの土手の上の月」(吉岡紋)は内田百閒の作品のイメージが基調になっています。矢島終子は公演が終わって外に出ると、大きな黄色い月の光を映して歩道も建物も黄色っぽく染まり、路面電車の停留所に向かっているところに、男に声をか



体的な構成になっています。

橋本良雄のところに捜査一課の唐木田刑事が訪れます。十六年前に良雄の両親が実家近くで殺された事件に連れて、死刑の時効がなくなったこと、およびその事件の継続捜査の担当者であることとを伝えます。事件当時、良雄は教団教祖の逃亡資金の無心のために実家に戻っていて、容疑者の一人として過酷な取り調べを受けています。良雄は事件が動き始めたと直感しますが、実際、その一週間前に大型バイクに轢かれた被害者の血液のDNA配列が現場の犯人の残留血液のものと一致し、福岡第一銀行の博多支店長である羽島邦彦の容疑が浮上ります。その当時の羽島の東京での行動を洗い直すと、容疑が深まり、逮捕寸前になります。ところが、事件の急展開を感じた良雄は仏壇の抽斗から母親の古い手紙を取り出し、弁護士同伴で唐木田に面会します。ユイマ真光教に取り憑かれた良雄を六郷橋の近くで待ち伏せして殺すという母親の悲壮な決意の文面です。羽島は顔形や体格などが良雄に似ていて、偶然に六郷橋を通

やかに舞っているという情景を創り出した方がよかったです。

サラが石垣島に飛び立つと、過去の情景がサラの行動と意識にオーバラップされ、幾多の場面の転調は菌切れがよく、チチとの思い出してサラに関わるすべての事象が石垣島に収斂して、そういう流れには書き手の巧みな計算の効果が表れているように。

●「とぼす」51号(大阪府)

「クリスティヌ」(長瀬葉子)は一五〇枚ほどの力作であり、おほかで上品な筆運びによる気品ある物語です。一三世紀初頭のフランス南部の農村が舞台になっていて、葡萄畑やオリブ畑また麦畑に野菜畑など、季節ごとに变化する牧歌的な風景が広がり、村人は素朴で温厚で、日曜のミサには子供達を含めて司教の説教に真摯に頭を垂れていますが、平和な田園地帯に異端審問という暗い影が秘かに忍び寄ってきます。若者のペルトランやその彼を慕うクリスティヌさらに彼女の親友のジャンネットやクリスティヌに想いを寄せると、ミサの後、若者達は教会の前の広場でお喋りやダンスを愉しみ、気持ちを通じ合うと、その二人は夕暮れに丘を下り、森の中に消えてゆきます。

しかしクリスティヌはいつも仲間から外れていて、半年前に村から姿を消したペルトランが忘れられませんが、ピエールはそれの彼女が気に入りませんが、彼女にとってはそれも余計なお節介に感じられず、ペルトランはカトリック教に敵対する「善きキリスト教徒」に帰依し、過酷な修行に打ち込

んでおり、カトリック教の欺瞞に目覚めた農民は救いを求めて秘かに善きキリスト教徒を信じています。クリスティヌはインターネットの案内でこし離れたベジエの町のペルトランに会いにゆきますが、厳しい修行に身を委ねるペルトランに対する気持が深まるにつれて彼が遠のいてゆくのを意識します。クリスティヌはダンエル司祭の意向を受けてペルトランの改教のためにふたたびベジエの町を訪れるものの、彼の決意は微動だにしません。やがてローマ教皇の異端制圧部隊が城壁に囲まれたベジエの町を襲い、異端者とカトリック教の信者との区別なく無差別の殺戮の嵐が荒れ狂い、町中は地獄絵巻となり、教会も市場も破壊され、さらに市民までもが残酷な犠牲になります。

異端制圧の悪魔のような黒煙が空を蔽い、クリスティヌは気も狂わんばかりにベジエの燃え盛る城壁を目指しますが、怯え嘆く群衆の壁に邪魔をされ、彼女の魂にはペルトランの面影のみが鮮明に刻まれてゆきます。

●「文学者見沢」84号(北海道)

「家族写真(四)」(梅井英介)は四回目の連載で、今回が最終回になります。独立した小説としても読めそうです。

倉澤直行はお客の減少ゆえに父親から受け継いだ写真館を閉めるつもりです。妻の多恵子はそれに気づいていいます。玄關脇の小部屋は絨毯が敷かれ、丸テーブルと肘掛椅子が備えてあり、撮影前のお客の寛く場であって、聞き上手な先代や直行はお客の昔話や体験談を引き出して、多恵子にとって店主の聖域になっていて、一度も入ったことがありません。彼女は小奇麗に着飾り、パー

同行してもらいますが、見合い相手の酒匂は気にする様子を見せずに気さくに振舞います。相性が合わないのでは話は打ち切りになり、その数年後の市内のお祭りのとき、応援団として協力してくれた同級生の一人と酒匂が仲睦まじくしているところを見て嘖然とします。滑稽味もあれば深刻さもある、洒落た趣きの仕上がりのようです。

●「墓」(高村志栄)や「墓に入らぬ故」(多河由利子)なども印象に残ります。

●「素粒」9号(富山県)

「エバー・グリーン」(若栗清子)はセンスがよくて色彩感も豊かな文章です。実家の花屋が倒産し、中田翠は大学を辞め、借金を背負った父との二人暮らしになります。フラワー教室に勤めていますが、たまたまパソコンでキジやヒヨドリなどの写真の載っているブログを見つけ、開設者は三十歳代の独身男性のようで、大学時代に半年ほど淡く付き合っていた学生のイメージに重なります。しかし突然のブログの閉鎖の告知とともに八郎溺そしてモスタワに旅立つということが記されています。翠は慌てます。「私も八郎溺にパードウォッチングに出かけます」とコメントを書き、ハンドルネームをエバー・グリーンにすると、その返事によって学生時代の彼であることがわかります。ブログを通して十数年前の恋人に出逢うなどはお伽噺であり、幾分か底の浅さが気になるものの、過去と現在を巧みにオーバラップさせる構成はうまく仕上がっていて、豊かな感性の煌めきを感じます。

●「はにや」14号(福島県)

「はにや」は埴谷雄高の作品と彼に対する批評を

取り上げ、埴谷雄高の全体像を描くのが目的のようです。水澤葉子の個人誌的な色彩が強く、極めて異色な雑誌です。この号で木村俊介の「変人・埴谷雄高の肖像」が紹介されていて、埴谷雄高の生活や文学に関わりのあった二七名のインタビューが取められています。小説家だけでなく、画家や写真家さらに珈琲店の店主など、異なった立場や視点から語られ、戦後文学の軌跡にも重なって、埴谷雄高の知られざる表情が楽しめます。

●「仙台文学」79号(宮城県)

「美貌の刺客」(牛島富美二)は戊辰戦争当時の仙台が舞台になっている歴史小説です。新政府は東北地方の旧幕府勢力を壊滅させるために仙台に奥州鎮撫総督府を置き、薩摩の大山格之助や長州の世良修蔵などが実権を握っており、長州の桂太郎は中隊長として参加しています。はつこの父親は仙台藩士の蟹江太郎介で、はつは蟹江が京都御所の警備に派遣されたおりの子供で、京都で育ちます。長州藩は蛤御門の変で御所を襲い、京都は火の海となり、はつと母親は騒乱状態の中を逃げまどい母親はその混乱に巻き込まれて命を落とします。はつにとつて長州は母の仇となります。仙台に戻った蟹江は仙台藩の執政の暗殺に失敗して処刑されます。はつがあとから仙台に来ると、父親は大悪人と見做されて、墓の在りかもわからず、飲み屋の酌婦で糊口を凌ぎます。はつの美しい容姿が高級料亭の梅林亭の主人の目に止まり雇われます。そこは新政府軍がよく利用していて、世良修蔵の座敷に呼ばれたとき世良の暗殺を考えます。しかし機会に恵まれず、代わりに桂太郎に狙いを定め、花見のときに桂太郎を庭先に誘い

マもかけ、お客としてその小部屋の肘掛椅子に座ります。彼女はみずからの人生を振り返り、夫の直行は初めて妻の権太での悲惨な生活に触れて驚きます。彼女の父親が権太に渡った経緯、ソ連軍の侵略によって地獄絵巻になった生活、さらに日本への引き揚げ後の親戚の世話になる辛い状況などを多恵子は悲痛な思いで語ります。直行は肩を震わす妻に白いハンカチを手渡し、二階の撮影室で写真を撮りますが、これが最後の家族写真と秘かに眩き、そこにはひとつの歴史の終わりが示されていることを暗示します。

●「雪嶺文学」46号(石川県)

「珠姫の春」(宮地八衣)は加賀藩の前田利光に嫁いだ十三歳の珠姫が主人公です。珠姫は徳川家の娘で、金沢城の本丸に寄居しています。城下の町人や村の農民のことなどは人伝に耳にするくらいですが、利発な姫は村の桜祭りに興味を抱き、乳姉妹の琴と舞に相談し、村娘に変装して大膽方で動くしおの村に出かけます。初めての田舎道に疲れたものの、神社の境内の露木の賑わいに心を躍らせます。利光はお庭番からの報告で珠姫の秘かな行動を把握していて、不測の事態に備えて珠姫に気付かれないように万全の警備を固めるストリーです。

余計な装飾を取り除いて言葉のエキスのみを用いた簡潔な文体であり、圧縮された無駄のない表現は見事です。書き手の伶俐な筆遣いが冴えています。修練して身につくものではないでしょう。「婚活時代」(吉村まど)は才覚の感じられる爽やかな印象です。井水亜矢は三十路半ばでいつもお見合いに失敗しており、高校の同級生の二人に

出し、母の形見の帯に隠した短刀に手をかけます。が、付き人に取り押さえられ、結局、桂太郎の長州隊が羽州庄内制圧に出発するときに処刑され、はつは十九歳の人生に幕を下ろします。

推薦作

- 「見返り仏」(若草田ひずる)「じゅん文学」70号
 - 「えにし」(堀井清)「文芸中部」88号
 - 「虚空疾走」(有森信二)「海」6号、通巻73号
 - 「共犯者」(宇内帰一)「ガランズ」19号
 - 「ひと夏の潮風」(紺野理々)「飛行船」10号
 - 「クリスティヌ」(長瀬葉子)「とぼす」51号
- 推進推薦作
- 「ふふ」(蛇石孝郎)「飛翔」34号
 - 「本屋の街で love again」(吹木ゆくる)「旅かばん」4号
 - 「ひょうろく將軍」(永井順一)「AMAZON」450号
 - 「えくほのかわいいあなた」(石原恵子)「銀座線」17号
 - 「帰郷」(神崎たけし)「九州文学」16号、通巻539号
 - 「捨ててこそー玩具喪志」(杉本増生)「半獣神」92号
 - 「縁側」(明田好弘)「未踏」65号
 - 「珠姫の春」(宮地八衣)「雪嶺文学」46号
 - 「蜂の子」(飯)「大島たか子」「なんじゃもんじゃ」秋麗号・通巻12号
 - 「海を渡る蝶」(木村誠子)「あるかいど」45号
- (全国同人雑誌振興会/東谷貞夫)

全国同人雑誌振興会



「残された者」(北海道) 15号

「残された者」(こしはきこ)はサハリンのチエ...

くまれれば生も軽くなる。死への思いの豊かさ...

●「雪嶺文学」(石川豊) 46号

発行人天野流民氏の巻頭エッセイ「折る」は、落ち...

小説の「娯楽時代」(吉村まど)は素直にくんぐん...

か」という持つてまわった言い方などよりも、フオー...

●「じゅん文学」(愛知恵) 69号・70号

69号には医療ものが二つある。「白い虚像」(藤澤茂...



雪嶺文学

自分や周囲をくぐくん筆にしていけば、かなりのフマ...

●「安藝文学」(広島県) 77号・78号・79号

「原爆・おほえ書き」(文沢隆一)が三回にわたって...

つてくる問題として、存在すべきだろう。これを読む...

ラン235の抽出のしかたについても、「電磁分離法」だ...

「入り日」(脇三壽枝)の文章は味わいがある。老年...

安藝文学 78号

れた。こういう作品の終わり方はむずかしいが、含みの魅力を保ちつつしっかり終わる技量を身につけたら、相当な書き手と思われる。また植村圭吾という老紳士の影の魅力に引かれて読み進めながら、終わってきるともう一つ大きな名作の造形でこないのは、隠し過ぎか、もともとその老紳士の造形が筆者の中で未完成だったのか、どちらかで、物足りなさが残る。タイトルもあっさりしすぎか。いずれにしても力量を感じる作品だった。優秀作の力を認めつつ、今回は準優秀作にとどめた。

「はたちのま立ち記」(梶川洋一郎)は警察署長の赴任を軸に、警察を内部から描いた作品で、この設定自身に興味を覚える。なかなか警察を内部から書くという作品にはお目にかからないので、こういう面からも同人誌の役割は大きいものがある。小説自身の芸術性や文学性からは遠ざかる結果になっていても、警察の世界という生活者としてのありようはよくわかり、またそこから見えてくる時代の変化、世相の変遷には説得力がある。その立場から発せられる強い警告には耳を傾けるべきだろう。「事件、事故はずっと前から延々と続いている。しかし、それを見守る市民のなかに、義侠心、思いやり、惻隱の情などほとんど見当たらない」「近頃は世のなか、ガタが来ている。地震でもないのに、天井の梁がギンギンと不気味に軋んでいる。……世間には心ある人も多しはすだがうねりにはならない」「足元がへドもメタンガスだぶくぶくじや、自分でも情けなく、惨めになりますわい。……もそつといたわりあいは出来んでしようかいのう」などは耳に残り、警鐘としての役割を果たしている。タイトルはテーマと合わず、読みにくく憶えにくい点もマイナスになっている。

78号「百日紅」(福永タミ子)は安定した筆致で、神元時代の毛利氏の変遷が女性と後継の問題を軸に鮮やかに描かれている。これは女性でないと持てない視点で、その良い視座を十全に生かして、見事に毛利という形を崩壊させることが先に立つ。しかしどんなに見事に問題をとり出し、明らかにしたとしても、人間一人一人の生活や生き方や死という現実が伴っていないとき、ノンフィクションでは別出されなければならない。事件に関わっていくフィクションの立場がある。この問題と人間描写と両方を兼ね備えているところに山崎豊子のような作家の存立基盤があるが、人間そのものをもっと切り込んで描く純文学の立場からそれを実現するのは、もともとこの領域には問題に人間が呑み込まれてしまう傾向があるため、よほど強固な姿勢がないとできない。波佐間氏は果敢にこれに挑み、カネミ油症事件の文学化に心血を注いできた。ここには油症が滅ぶ家族がい、しかも未来に希望を託し、祈る家族が読み手に社会にも、架橋されている。切実なものが響いてくる。一つの到達点として、優秀作と見る。

● 今回の優秀作は
 「見返り仏」(若草田ひずる) / 「じゅん文学」 70号
 「黒い赤ちゃん」(波佐間義之) / 「九州文学」 539号
 の二作。

また歴史小説優秀作、エンターテインメント優秀作としてそれぞれ
 「百日紅」(福永タミ子) / 「安藝文学」 78号
 「婚活時代」(吉村まど) / 「雪嶺文学」 46号 を推薦しておきたい。

● 準優秀作は「残された者」(こしばきこう) / 「ざいん」 15号 だが、これは書き直されると見て評価を待つべきかもしれない。「入り日」(脇三壽枝) / 「安藝文学」 77号、「はたちのま立ち記」(梶川洋一郎) / 「安藝文学」 77号、「秘密の場所」(中野弘恵) / 「安藝文学」 79号、また評伝部門として「森蔵 コタンに死す」(秩父) / 「秩父」その後「蘭藍子」(蘭藍子) / 「安藝文学」 79号) を挙げたい。(全国同人雑誌振興会 五十嵐勉)

氏の一時代を描ききっている。秀吉の朝鮮遠征の時代から、関ヶ原と小早川秀秋の裏切りの遠因までも汲み取りつつ、萩へ移っていった変遷が、手に取るようにわかり、線という控え目な、しかし心根のしつかりした女性の行為をクロージアアップさせることによって、そこに小説としての点睛を入れた。この視点がなければ短編としては成立しなかったと思われる。歴史小説の優秀作である。「安藝文学」にはこうした領域での力量ある作家が多くいて、層の厚さを感じる。

79号「秘密の場所」(中野弘恵)は、流産した赤子の霊との交わりの世界を描いた不思議な作品で、生命を繋げる女性の一つの力の断崖面には、こういう現象が拡大されておかしくない。この世界は確かに存在するだろうし、水子供養の信仰はこうした領域に根ざすものだろう。現代に新たな装いで取り出してきた提示力は注視すべきで、世界そのものが羊水のなか浮かんできているような奇妙な感性に包まれるのは、一つの思いを書ききっている筆力によるものである。ヒカルという夫の抽象性も、この小説では逆に生きていくかもしれない。準優秀作としたい。

「森蔵 コタンに死す」(秩父)その後「蘭藍子」は記録文学の労作。プロローグが「です・ます体」で、あとが常体の文章のちぐはぐや、個人の動機や取材過程を生んだ執念のようなものは伝わってくる。事件史や追記と見れば、詳細や緻密さは物足りなさは残るかもしれないが、森蔵がその生き方によって残していった最も重要なものは蘇ってくる。特に秩父事件を起こす前の農民の凄惨な飢餓状況は迫ってくるし、また高利貸しを含めて圧迫する側むごさも抉られている。そして同じ状況を北海道のアイヌの、虐げられ、追い詰められていく弱者に見て、その共感のうちに生き抜いていく森蔵の一貫性は浮かび上がってくる。森蔵が生きていく方として残し伝えたかた最も重要な部分を取り出し、現代に提示している点では、真摯な記録文として

作家集団「塊」プロ作家による作品添削講評

文芸誌新人賞作家があなたの作品を添削・講評の通信指導をします
 懇切丁寧・的確な指導であなたの作品をレベルアップ!

飯田章 (群像新人賞)・八覚正大 (新潮新人賞)・大高雅博 (群像新人長編小説賞)・小沢美智恵 (蓮如賞)・五十嵐勉 (群像新人長編小説賞/インターネット文芸新人賞) 「文芸思潮」の読者には特別料金で指導いたします。

詩 1篇	3枚以内 3000円
エッセイ 1篇	5枚以内 4000円
	10枚以内 5000円
小説 1篇	20枚まで 7000円
	50枚まで 10000円
	100枚まで 15000円
	200枚まで 20000円

作家集団「塊」事務局
 〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13
 TEL 03-5706-7847 FAX 03-5706-7848
 asiawave@qk9.so-net.ne.jp

全国同人雑誌振興会

小説の書き方

作家を志す人々のために

五十嵐 勉

個人の内部にある思いや認識のエネルギーを、どのようにして多くの人が共感できる普遍的な姿形にするかという作業が「書く」ということです。「書く」という大きなエネルギーをお持ちの方々に、この本が少しでもお役に立てれば幸いです。(前書より)

素材の見つけ方・選び方、モチーフについて/テーマの捉え方/ストーリーの組み立て・構成/人物の設定/文章についてなど

自家版限定本 800円

ご注文・お問合せは直接文芸思潮までご連絡ください

tel 03-5706-7847

読売新聞インターネット文芸新人賞

緑の手紙 五十嵐勉

カンボジア難民ボ・シティはなぜ発狂したか。フィリピン戦線の生き残りの父と戦線を訪ね、カンボジア難民の告白と重ねながら平和日本の矛盾を告発する問題作

アジア文化社 1700円



成立している。北海道のアイヌがどのようにして追い詰められていったのか、弱い民族の現実もつづきにわかり、消されていく人間の声の無様な姿も歴史の底から鮮やかに蘇ってくる点で、この作品は光を持っていく。人はまた、犠牲者の影を一生背負って生きていく存在であることも示している。さらに推し進めて、粗い部分に磨きをかけ、書き加えるべきところは書き加えて、秩父事件が残した一つの遺産として、長く残されていくことを期待している。準優秀作。

●九州文学 (福岡県) 539号
 「黒い赤ちゃん」(波佐間義之) はカネミ油症事件を題材とする氏の一貫した小説群の一つだが、タイトルが表すように、この作品はスバリと対象に迫っている。三年前に発表した「どくだみ」よりも、訴える肉声はこの作品の方が強い。同人誌のなかには社会派の小説が意外に少ないが、この作品は社会の悪をはつきり弾劾する明確な立場を打ち出している。現代においては公害のような、犯罪者を絞りきれない社会悪を描くのは、困難を伴う。組織の悪や時代風潮の悪を登場人物の内面の動きの中に連動させて捉えることが技法的にも難しいからである。ノンフィクションという事実を積み重ねる手法の方がこうした問題には有効であり、社会や悪の総体も捉えやすく、訴える力も強めやすい。問題の解決は社会に帰属する以上、社会や組織

●「月水金」36号（神奈川県）

「板橋遊民伝」（沢崎元美）は板橋区の東武東上線沿いにある常磐台三丁目付近が舞台で、昭和三十年代の半ばから十五年ほどにわたっての庶民の生活振りを描いています。九人家族の坂東家は屋敷町から離れていて、その周辺に古い民家やアパートが建ち並び、文化的雰囲気のない地域です。近くに母親と二人の娘の三人家族がいて、日曜日ごとに母親の愛人が訪れます。また路地の奥の六畳一間のアパートに母親と三人の幼い子供が住んでいます。新たに赤ん坊が生まれます。坂東家の家庭の有り様は近所の庶民



の暮らし振りに繋がり、それがまた地域の生活や人情を浮かび上がらせています。坂東家の人間模様や家庭事情を通じて社会の真相を描くという大きな構想が流れているのです。坂東家の芳江の一日は朝の五時半に起きて一升五合の飯を炊くことから始まりです。

次男の旅人の成長が物語の軸になり、家族の変遷や時代の移り変わりを反映させています。芳江の夫の母の連れ合いが亡くなり、夫の甚平も結核で旅立ちます。長男の寛は牧師になるつもりであり、長女の薫は結婚して遠くに住み、次男の旅人は大学生になって下宿生活を選びます。年寄りもは亡くなり、子供達は成長し、芳江の元からひとりまたひとり精神的に離れてゆきます。

この書き手は社会の底辺の庶民を描き、同時に筆先は個人や家庭を越えた社会の動向をも捉えていて、時代を映すという雄大なバルザック的な方向性が感じ取れます。

●「萌」Kenshi 24号（神奈川県）

「花時 砂を噛む」（斎藤信也）は抜け荷の犯人探しの筋書きですが、書き手の平易でまろやかな筆遣いは読み手の興味を素直に惹きつけ、大名の関わる抜け荷の物語がはじまります。同心の前野は抜け荷の受け取り証文を入手し、抜け荷の調査をはじめますが、先輩で世話になっていた与力の高橋が殺された抜け荷事件と同じ臭いを嗅ぎ取ります。陸奥の芝田藩が怪しく、捜査が進むと、芝田藩からの呼び

出しを受けます。江戸家老の進藤忠座衛門が登場し、進藤は前野や与力の高橋とは同じ道場の仲間でした。昔の仲間を前にして覚悟を決めた進藤は抜け荷の真相を語ります。日枝神社のお祭りの日、家老の進藤は乱心してひと騒ぎを起し、前野の剣によって命を落とします。書き手は人物造形よりも筋書きの展開を優先しています。

●「濁水」52号（東京都）

「風呂場の二人」（関幸子）では、還暦前のキクは耳が聞こえなくなった認知症の症状の九十歳代の父親の世話をしています。しかも夫は愛人を作った家を出るという事態を感じ取っていました。別れ話が出ると、烈しい悶着が生じます。父親の甚之助は庭いじりをしており、突然の雨で濡れ鼠になり、正彦は甚之助を風呂呂に入れ、和やかな雰囲気です。キクは正彦の気持が変化するのではと淡い期待を抱きます。しかし正彦は最後の儀式のつもりであって、キクはそのことに気づいていません。

甚之助が台風の日になる険しい家庭状況ですが、書き手はその嵐から距離を置いて、正彦や甚之助そしてキクの性格を冷静に描き分けており、とくに切実な悩みを表情に出さないキクをうまく造形しています。

「万華鏡を捨てる」（飛田一步）は睦子の少女趣味と孤独な少女との交流が巧みに描かれています。隣の女の子の聖

良は小学三年生で、母親が長く入院していて、父親との二人暮らしを余儀なくされ、表情には翳を漂わせています。睦子は散歩の途中で聖良に出会いますが、雨が降ってきて、睦子の家で聖良を着替えさせます。そのとき、聖良はアルバムの着飾った少女の写真に興味を示し、睦子は少女用の可愛い服を畳に並べると、聖良は目を輝かし、指を丸めて望遠鏡を作り、そこから煌びやかな色彩の服を眺め、万華鏡を覗くように感激します。着たことのない可憐な服を身につけて笑顔を見せます。

睦子がクリスマス用のイルミネーションを飾りつけていると、聖良は明るい表情でスキップしながら帰ってきます。母親が退院するという事です。睦子が新しい少女服を着ることを誘うと、興味を示さず、イルミネーションにも関心を払いません。母親が戻ってくることで聖良の気持が弾み、心の影も消えてしまします。可愛い服を着て喜んだのは母親から離れていたがゆえの心の空隙に生じた蜃気楼だったのです。

睦子の少女趣味と聖良の孤独な癖との対比は書き手の表現力の賜物ですが、たえず新しいテーマを求める姿勢にはちょっと首を傾げます。

●「全作家」86号（東京都）

「茜荘外伝」（沢崎元美）は細部を描いて全体像を暗示しています。これは書き手の特質であり、簡単には真似ので

47号

きない長所になっています。「月水金」36号の「板橋遊民伝」の続編であり、その中心人物の旅人の列伝とでもいうべき作品です。

旅人は同じ大学の町屋幸次郎の口利きで町屋興産の経営する洋風レストランのウェイターになり、その二階建ての薄汚い茜荘に入ります。階段下の穴倉のような三畳間ですが、住人には子持ちのフイリピン女やロシア女の売春婦あるいは同じレストランの見習いコックのマモルやトルコ風呂の女などがいて、幸次郎の息のかかった連中です。

旅人はトルコ風呂の女に深入りし、幸次郎への借金は膨れ上がりますが、その頃、ロシア女のジーナ・ナホトカが売春容疑で検挙され、幸次郎も売春斡旋で逮捕され、そこには覚醒剤が絡んでいます。覚醒剤容疑で茜荘は警察の手入れを受け、その直前に見習いコックのマモルやトルコ風呂の女は姿を消します。茜荘は社会の脱落者の巢食う世界であり、常識の通じぬ闇に蔽われていて、しかし底辺に蠢くエネルギーには善悪を越えた凄味が秘められています。やはり底辺の社会風俗を通じて社会全体の実相が浮かび上がってきています。この書き手にはいささか乱暴な言葉使いました多少の脱線がありますが、それ以上に作品の基調は魅力的です。

「落し物」(平維茂) は女子大の学生寮の不思議な現象を描いています。最新設備の学生寮ですが、管理人や警備員

が待ち構えている、という状況を感じ流されずに冷徹に描いていて、そこには深い傷跡に耐える被災地の人々の未来への脈動が伝わっています。人間は最後が難しい、というのが基調低音になっており、その哀しげな調べは世間の思惑を越えています。「老人と猫」および「荒野に立つ」の二作品も見事な筆捌きであり、小説という通常概念を突破した凄味が漲っています。

●「Q文学」3号 (東京都)

「風よ吹け」(曳地瑠璃) は死および存在についての考察が基調になっています。殺したいほどのZそして優しく寄り添ってくれたNは「私」の意識の振幅を示す両端であり、その間で私は悩み喜び、さらにこの世の不条理に憤ります。意識の迷宮をさすらっているのですが、そこには私の人生の挫折が投影されています。パリはカルテラタンの広場で処刑される意識に囚われますが、思想的なまた人生上の敗北の残照のようです。現実に対しての無力感私の魂を蝕んでゆきます。隣のベッドの老婦人はやがて魂の抜けた肉体になり、それは私の望む選択肢のひとつのように感じられます。ひたすら人生の終焉を待つしかない老婦人を見ていると、私の思想的な遍歴あるいは若き日の闘争が苦しい想いで甦ってきます。次の作品では新しい地平が切り開けるのか、書き手の試練になります。

●「麦笛」14号 (宮城県)

は定着せず、管理会社はその原因が掴めません。古川悟は妻とともに管理人になり、しばらくすると、妻の佳子は管理人業務に難色を示します。古川は頻繁に鳴る下水槽のアラームが気になり、下水槽を調べると、奇怪な形の生き物を見つけ、管理会社の人はいさし平然としています。異形の物体は棄てられた胎児か何かであり、それが不可解な生き物に変質しているのです。下水槽に閉じ込められた妖しい怨念が管理人や警備員の意識を狂わせています。性風俗への風刺になっていて、その着想は光っています。

●「たきおん」69号 (東京都)

「五島列島夢の旅」(山森裕) は五島列島の福江島に渡り、キリスト教の教会を巡ってその受難の歴史に想いを馳せ、また遣唐使の命懸けの船旅を語ります。さらにバルセロナの「サグラダ・ファミリア」の教会に触れ、教会建築の現状についての解説を披露します。この書き手の知識や認識は広く深く、じっくり味わう価値はあります。

●「埋火」51号 (東京都)

「埋火」は吉満昌夫の個人作品集です。文章レベルは非常に高く、密度もあり、小説と身辺雑記にこだわらず、書き手の内面から滲み出る想いがよく表れています。「海霧」は大津波に襲われた三陸沿岸部の荒廃した風景を捉え、母や姉あるいは妻や子供を失った人々の心の暗部を照射しています。復興への努力が逆に気持と身体を蝕み、深い地獄

「明日の家族」(佐川房子) は「かたち」を大切にするあまり、慎重な筆捌きが自在な心の動きを抑制しすぎています。すこし羽目を外す冒険を心がけると、登場人物の表情や性格が豊かに変化してくるでしょう。

大学生の彩子の視点から描かれています。父は転勤を契機に女をつくり、夫婦関係はぎくしゃくし、弟の勇太は父に反感を抱きます。彩子は家庭の亀裂を深刻に受け止め、叔母に相談し、また知り合いの親父の飲み屋に顔を出します。結局、父と勇太の葛藤は収まる気配が見え、落ち着いた家庭が戻ってきます。後ろめたい父の気持あるいは崩れかけた家庭を支えた母の配慮と忍耐など、端正な文章で描かれています。もうすこしさざ波の立つ険しい状況があればもっと奥行きのある作品になったでしょう。

「風のろし」(三上昇) は風を上げることが友情の象徴になっています。定年を待たずに退職した私は図書館で本を読んだりしてのんびり過ごしています。会社の同僚で親しい友人でもあったSは咽頭癌になり、高台の私の家から見える病院に入院しています。Sは病院から私の家を探しており、連絡を受けた私は屋上の塔屋で長い雪かき棒を振り回しますが、確認できず、次に夜になってからライトを点けるものの、Sには見えません。お見舞いをおねて病室を訪ね、私の家の方向を教えると、今度はライトの点滅が確認できた嬉しそうな連絡が入ります。Sにとって私の家

の屋上のライトが生きていることの確証になっているのでしょうか。抗瘤剤の投与と放射線治療のお蔭でSの癌は奇跡的に消滅し、そのお祝いに風を上げることになります。昔の風に新聞紙の足をつけ、屋上から上げると、Sから携帯が入り、見えましたという感激の音が響きます。風を上げるといって着想は意表をつけて味わい深いところがあります。

●「山形文学」101集（山形県）

「つれあい」（高橋菊子）は寝たきりの夫を世捨て人のように看護する妻に焦点を当てていますが、その妻と夫は死んで生まれた子供への幻の中で生きており、胸に迫るものがあります。

杉山浩平は一流商社の部長を務め、その後は系列会社の社長になり、恵まれた人生を歩んでいます。妻の恵美は足に障害があり、ひとりでは外出できず、浩平はしかしあまり心配りをしません。妻の不満は鬱積し、家庭はぎくしゃくした雰囲気です。浩平は商社の同期会の常連ですが、小川敏子の話題になると、誰もが首を傾げ、彼女の生活の情報は途絶えたままです。浩平は同期の芳江と一緒に敏子のアパートを訪ねると、彼女は年老いてやつれていて、機敏な面影は失っています。

敏子には健三という夫がいて、意識は朦朧として寝た切り状態です。健三は寿司職人でしたが、時代の波に乗れず、好きな絵画教室から足が遠のき、同じ絵画仲間の佑子から有り金持って出ていったらと唆されています。梢はついに旅に出る決心をし、男鹿半島の先端の温泉でゆつたり湯に浸かります。女将さんの津軽三味線を愉しんでいると、若い頃にお見合いをした杢沢誠に出会います。旅の解放感もあって、その翌日は彼の車で近郊の名所をめぐりますが、杢沢は佑子とも親しそうで、さらに梢の家庭事情をも知っている気配です。佑子から男鹿半島に向かっているという連絡が入ります。共通の友人を迎えるために茶目つ気を出して杢沢と梢は腕を組んで佑子を迎えます。梢の気持の翼が広がり、洒落た趣きになっています。

克則は腹いせに冷蔵庫の食料は台所に投げ出し、布団や置物などは手当たり次第に壁にぶつけています。克則は梢に辛く当たっても、知り合いや近所の人には常識的な穏やかさを示しているはずで、認知症患者は無意識に身内と他者に識別ができ、その不可解な心理は小説の素材になりそうです。

●「風紋」7号（富山県）

「河原の騒動」（谷村紀子）は年老いたひとり暮らしの女の侘しさが三途の川の夢を誘います。龍子は定年退職すると、体調が崩れ、夜中に胸が締め付けられ、気が遠のくことがあります。

会社の後輩の美樹は夫の愛人とのトラブルで亡くなり、

取り残されます。仕事を失った健三は酒に溺れ、暴力を振るい、やがて痴呆の兆候が現れます。呆けた健三は頭の弱い少女を部屋に連れ込み、お互いの顔に白粉や口紅を塗って遊びます。健三の心の底に死産だった女の子の幻が棲みついていたので、健三にとつて夜空の星は死んだ子供の生まれ変わりであり、幻視の中のおぼろげな意識がすべてになっています。敏子は健三に寄り添い、商社の仲間とは疎遠になり、世間とのつながりも希薄になっています。浩平は敏子の厳しい現状を見て夫婦のきずなというものを考え直します。浩平は妻の恵美に対する言葉使いや接し方を反省します。思いやりが欠けていたのです。ちよっと話し方を柔らかくするだけで恵美の表情が微妙に変容することに気づきます。

浩平の家庭と敏子の家庭との対比がこの作品に奥行きを与えています。敏子と健三に焦点を絞りますと、暗く重苦しい雰囲気になります。浩平という人物が巧みに脇役を演じ、その役割によって敏子の心の深みがいつそう浮かび上がるという効用が認められます。

●「ほんがら」30号（山形県）

「自由時間」（船山智恵）では初期の認知症で悪態をつく夫からしばしの自由時間に逃れる妻が描かれています。克則は回路が狂うと、結婚は間違いだつたと梢を責め、物を放り投げ、梢はいつもその嵐が過ぎ去るのに耐えています。

その美樹が川向こうで龍子を呼んでいて、彼女の周囲には白い三角布を頭に付けた老若男女が群れ騒いでいます。よく観察すると、龍子の叔母のキクの姿があり、龍子の父親も現れ、三途の川の兩岸は亡霊で賑わっており、龍子はなぜか親しみを感じるので、

気がつけば龍子は病院のベッドにいます。ユーモアの味付けで面白く仕上がっています。

●「櫻坂」13集（石川県）

「明日はきつとある」（多河由利子）は戦国時代の山里の悲劇を描いています。加賀の山里の内山村に安妙寺があり、その和尚は慈悲深く、もつと山奥の平家の落人集落で生まれた知恵遅れの子供達を養っています。みなし児のお美和は和尚に拾われ、今は十二歳ですが、利発で心優しく、知恵遅れの子供達の世話をしています。上杉謙信の軍勢が加賀に攻め込み、内山村や安妙寺は戦乱に巻き込まれ、和尚は行方不明となり、お美和と五人の子供達は穴倉に隠れて無事でしたが、食料がなく、また住む場所もありません。お美和は子供達の生まれた落人部落に連れてゆくことにします。必死の思いで険しい山道を歩きますが、子供の一人が亡くなり、ようやく探し当てた村は別の村です。大きな村に移され、支配者の地頭の尋問を受け、お美和は受け入れ先のないことを悟り、しかも子供達は処分されそうな気配です。宿泊地のお寺を夜半に抜け出し、内山村の安妙寺

に逃げ帰りますが、川岸でお寺の住職が待っていて、草履や食料などを手渡し、どうかご無事で、と手を合わせます。文章に密度があり、感情のうねりを抑えた的確な表現です。お美和の表情や動きを描いて彼女の内面をうかがわせています。

多河由利子は「雪嶺文学」45号に「志多鳥屋」という奇抜な発想の作品を載せています。辛く苦しい記憶を取り除き、明るく楽しい思い出に入れ替え、新たな人生を歩むという趣旨です。この書き手の抽斗には多彩なネタが収められていると思われます。

「夢二と幾久栄——竹久夢二 十九歳の恋情——」（剣町柳一郎）は夢二の十九歳のときの淡き恋心に焦点を当てています。夢二は明治十七年に岡山で生まれ、上京し、早稲田実業に入りますが、明治三十九年の秋、早稲田鶴巻町の絵はがき屋「つるや」で金沢出身の岸他万喜に出会い、その翌年に結婚します。その経緯は詳しく調べられています。が、明治三十六年頃の夢二については詳しい資料がないのかもしれない。金沢の士族であった小竹家に荷物を運び、それがきっかけとなって小竹家に入ります。母親の小竹春生と娘の幾久栄の二人暮らしで、夢二は春生をおば様と呼び、五歳年上の幾久栄を姉様と呼んでいて、その彼女に恋心を抱いた気配です。神田工藤館で撮った夢二の十九歳のときの写真

会社の業績がよいので、雅人のやつかみから税務署に脱税のことを密告した気配です。それ以降、雅人とは疎遠になります。

隆志は病気で商社を辞めたとき、妻の直子の世話になっていて、夫婦で寄り添って生きてきたわけです。一方、雅人は妻の玲子の実家の資産を利用しての上がっていて、夫婦で共に歩く姿勢などありません。直子は十年ぶりに玲子の電話を受け、雅人の危篤状態を知りますが、病室の雅人は生きた物体にしかすぎず、隆志はお見舞いを見合わせ、その二日後に雅人は亡くなります。

この書き手は小説の作り方がわかっており、奥深い計算の下で筋書きを組み立てていて、構想通りに仕上がっているのは見事です。



全国同人雑誌振興会

が残っており、その裏面に夢二の青雲の志が記されていて、姉様へとなっています。幾久栄は金沢の山崎駿二と結婚し、その後、京城に渡り、京城滞在は三十三年の長きになり、終戦の引き揚げ時に家財道具などすべてを焼き捨てていて、夢二に関わるものもあつたと推測されます。岸他万喜は幾久栄の三歳下になり、金沢で暮らしていた時期は重なりますが、いまのところ二人の関係を示す資料は見つかっていません。

剣町柳一郎は小竹幾久栄の資料を詳細に調べ上げ、その係累をも追跡調査していています。内容には説得力があり、文章には風格が漂っています。

●「きなり」74号（愛知県）

「紫陽花」（石川好子）は引き締まって歯切れのいい文体です。情緒的でなく、乾いた感覚に貫かれています。緻密な構図の中に対照的な二組の夫婦が描かれています。野村隆志は病氣療養中に釣りを覚え、またたく間に腕を上げ、津山雅人に教えていて、家族同士の付き合いになります。雅人は会計事務所を構えますが、上昇志向が強く、先輩の税理士や税務署とはうまく付き合うものの、小さな顧客や友人を見下しています。隆志は家電の販売店をはじめ、パブル景気に乗って業績は順調です。もちろん顧問税理士は雅人です。突然、税務署の立ち入り検査があり、雅人とは連絡が取れず、隆志は雅人への不信感を抱きます。隆志の

●「宮文学」36号（愛知県）

「路地裏」（内田耕治）は書き手の回想記なのか、私という主語が使われています。私は十八歳のときまで路地裏に住んでいて、その当時の住人や人間模様が描かれています。記憶の脱落また思い違いに戸惑いながらも昔の薄汚れた光景を蘇らせます。ひとり暮らしの金貸しのおばあさんが甥に殺され、あるいは私は元芸者の女の孫になることなどが想い出され、空襲を受けた市街地はどのように復興されたのかははっきりとは覚えていません。実際、鮮明な輪郭が急にぼやけ、時間と場所の関係に困惑し、事実と虚像が妙に重なったりし、記憶の不可思議さを実感します。記憶は意識の奥底に潜む魔術師のようで、路地裏の風景はその魔術に翻弄されているのかもしれませんが。この書き手の文章には洗練とした息遣いを感じられ、いささか支離滅裂なところがありますが、逆にそこに魅力が潜んでいます。

●「じゅん文学」72号（愛知県）

「青空を切る」（若草田ひずる）は穏やかな趣きがあり、うまくまとまっていますが、野性味に欠け、内在的な想念が発揮されておらず、完成度よりもスケールの大きな構想に挑戦して欲しいものです。

修一は仕事帰りの電車の中で紙飛行機を折っている父親と男の子を見て、すでに亡くなった父親に紙飛行機を折ってもらったことを思い出します。妹の美津子は軽くない気

管支炎ですが、父親から紙飛行機を教えられています。修一は公園で紙飛行機を飛ばす老人に出会い、老人の手を離れた紙飛行機は青空高く上昇し、視界から消えますが、それは視界没といわれ、願いが成就するのです。老人は特攻隊の後方部隊におり、大空に消えた兵士のお蔭で今の平和があるとも語り、青空の彼方を見凝めます。その後、老人の姿は見かけません。美津子が入院すると、修一は紙飛行機を作り、願いが叶うように一緒に飛ばします。中庭で飛ばすものの、なかなかうまくゆかず、そのとき修一は誰かの気配を感じ、振り返りますが、誰の姿もなく、父親だったような気がします。

「ロンリーハート」(米倉高子)は盲人の特殊感覚を素材にしています。海路は目が見えませんが、両親は五歳までそのことに気づかず、それだけ海路の特殊能力が優れていたのでしょうか。情感を切り捨てて乾いた筆致に貫かれていて、その冷徹な姿勢は賞賛に値します。

海路は世間の基準では異様な能力の持ち主であり、すべてを見通していて、周囲からは気色悪い存在として避けられています。斎藤達夫と良子の夫婦は世間との断絶に苦しみ、失意と絶望に打ちひしがれます。優秀な公務員だった達夫は酒に溺れ、良子は神経を病み、正常な感覚を失っているようです。良子はやがて薬に手を出し、誘拐され、身代金を要求されますが、青年に成長していた海路はプロの

いかさまトランプ師との対決に勝ち、良子を助け出します。いかさま師にとつては海路の透視力が理解できず、弾丸が海路の頭部を掠めます。病院のベッドで意識不明の状態から回復すると、ロンリーハートの歌を口ずさみ、クールな笑いを浮かべます。斎藤夫婦には異形の化け物であり、海路はこの世に生きていながらもこの世の存在ではなく、その孤独の魔宮をさまよう宿命から逃れられません。

書き手の視点にぶれはなく、また筋書きと構成は整っていて、次作はどうなるか、大いに期待できそうです。

●「弦」91号(愛知県)

「青い服の女」(長沼宏之)はちよつと地味な作風で、潤いや洗練さに幾分か難がありますが、絵画の道に乗てざるをえなかった画学生の哀しい胸中が扱られています。

リビングに飾ってある若い女性の絵を見て、誰が描いたのと姪が尋ねると、ふき子は小倉多美子の表情を想い浮かべます。多美子は父の親戚筋に当たり、病弱であつて、両親が亡くなると、ふき子の家で暮らしています。ふき子とは三十歳ほど離れています。相性がよいのか、何かにつけてふき子の相談相手になってくれます。多美子が亡くなり、遺品を整理していると、何枚かの写真を見つけ、多美子の油絵のようです。興味を抱いたふき子は多美子がよく訪れていた伯父の民宿や京都の美術学校に足を運び、彼女の足跡を調べます。多美子は才能に恵まれていましたが、



第91号 弦

友人に構図とモチーフなどを模倣され、それが大きな公募展の特選となり、その後で発表した多美子の作品は盗作の汚名を着せられ、彼女は絵筆を折ります。その友人はやがてみずからの命を断ちます。ふき子は沈黙を守りつづけた多美子の別の顔に慄然とします。

「古都白川小雪坂」(市川しのぶ)は白川の小雪坂での出逢いを軸にした華麗な筆捌きの物語です。京友禅のデザイナリーの大輔は道幅の細い小雪坂で擦れ違った女に惹かれまです。その女は着物姿に謎めいた色香を漂わせています。やがて肌を合わせ、小雪と呼びますが、どういう生き方なのか、霧のかかったままです。妻のまゆは和装小物の店を出して、その共同経営者は小物作りに卓越した技倆を示し、お客の評判は極めて高いのですが、急に仕事を辞める

ことになります。大輔が小雪に会えなくなると悟った時期に一致します。

小雪はあくまで神秘的な翳に蔽われていて、大輔との秘められた関係は小雪の魔性ともいべき魅力を半減させています。小雪が大輔とまゆの二人を幻想の渦に巻き込み、そこには妖しい調べが奏でられていて、二人は世の中の座標軸から逸脱してゆく、という筋書きの方が面白く思われます。大輔とまゆは車の事故で琵琶湖に沈みますが、そこに小雪の霊が介在しているもよく、小雪はやはり非在の女として描かれる方が京都の謎めいた奥行きを暗示するのではないのでしょうか。

魔性と神秘性に素顔を隠した女を積極的に取り上げれば、この書き手の資質がもつと煌びやかに発揮できそうです。

●「文芸中部」90号(愛知県)

「魔女と過ごした夏」(朝岡明美)には、幻想的ではなく、またメルヘン的でもなく、むしろメタフィジックな趣きがあります。飾り気のある言葉を使うのではなく、あくまで平明で自然な文章によって現実から微妙にずれた人物像を形づくっています。

二年ほど前に妻を亡くした榎山孝昭は東京を離れて生まれ育った海辺の町に戻っています。毎朝、山の中のお寺の墓参りをしており、その後は駅前のお茶店で幼馴染の佐々木信吉と駄弁るのが日課になっていて、二人とも七十歳代

の半ばです。曇り空の朝、榎山は墓地の柵に凭れて海を眺めていた上品な老婦人を見かけます。「雲の切れ目から陽が射すと、海の上は宝石が散りばめられたように美しく輝きます」と榎山に語り、彼は信じなかつたのですが、しばらくして海面にダイヤモンドの煌めきが広がります。榎山は立ち去る老婦人の後姿を眺めるとき、不思議な感覚を覚えます。老婦人は藤堂佳澄であり、地元の有力な建設会社の先代の奥さんで、資産家の藤堂家に頭を下げられて嫁いできた高貴な家柄のお嬢さんです。突堤の付け根のところ

でつばの広い帽子にロングスカートの老婦人を見かけたりします。ある日、榎山が墓地を訪れると、老婦人が柵にしがみついている、柵の外に出て笹百合を手折るつもりが足を滑らせた気配です。柵の中に導くと、かすり傷をしており、彼は山荘まで付き合います。佳澄の言葉の響きや立ち居振る舞いには家の者も戸惑うところがあり、たとえば山の虹を見てその端を見つめるために町に下りてくるという発想は浮世離れしています。榎山の気持は秘かに揺れます。九月の早朝、墓地の崖の下に倒れている佳澄が発見され、病院に運ばれたときにはすでに手遅れでした。墓地の柵の外に群生している笹百合を取ろうとして足を滑らしたので、榎山には、転落というより空に飛び立とうとして落下したように感じられます。幼馴染の信吉は人柄がよくて佳澄とも付き合っていて、佳澄の言動を不思議がっていますが、

榎山の非現実的な感触とは違っています。

長い人生にあつても、いささか異質なメタフィジックな世界を浮遊する佳澄の意識の在り方はやはり気にかかります。名品でしょうか。

●「樹林」6月号・通巻569号（大阪府）

「ミッシング・リング」（内藤万博）は生殖能力を失った人類の未来を想定しています。人類は生殖能力を失い、人口が激減し、そこで遺伝子操作による人口増加計画が試みられます。旧来の人間を旧種人類とし、遺伝子操作で生れた人間を新種人類と分類します。新種人類は多産で頑強でしかも頭脳明晰であり、あらゆる分野で旧種人類を凌ぐ勢いです。旧種人類は脅威を感じ取り、新種人類の管理局を創設し、結婚や居住地を制限し、違反者は抹殺されます。クレイグ・コンラッドは新種人類管理局に勤めていて、新種人類の反乱に出勤し、そのときクレイグの父は新種人類で母は旧種人類であることを知らされず、突然変異で生まれたクレイグにはどちらの人類の女をも妊娠させる能力があり、クレイグが両人種の橋渡し役になると、旧種人類と新種人類との闘争は棚上げされる可能性が出てきます。クレイグの遺伝子がミッシング・リングとして人類を救済できるのでしょうか。

この書き手は冷徹に情感を排除していて、しかも明確な構想力を発揮しており、その揺るぎない基調は読み手を納

得させています。

●「あらう」3号（香川県）

「百万円の詫び状」（水口道子）の書き手は文章センスがよく、淀みなく流れています。上手な筆遣いゆえにいささか走りすぎ、やや密度が薄くなっています。

倫子は四十歳になつても小説を書いていて、隣近所から胡散臭く見られていましたが、地元の文学賞に輝くと、世間の目が変わってきます。一流の地元企業の会長から自叙伝の執筆を依頼されます。別居している妻と娘との繕いを戻す材料にするつもりで、倫子は会長の意向に沿って仕上げ、執筆料は百万円です。

倫子には幼馴染の絵美子がいて、絵美子の父は会長の口車に乗って事業をはじめますが、結局は失敗し、家庭は崩壊し、絵美子は気が触れます。彼女は父に対してと同じように会長を恨んでいます。倫子は自叙伝でそのことを暗示するつもりでしたが、会長の意向を優先して切り捨てます。料亭の女将さんから「小説屋さん」と呼ばれ、悪い気がせず、ひとり微笑みます。絵美子の間にこだわると、作品としてのバランスを失い、むしろセンスのいい筆力で駆け抜けたのは正解だったでしょう。

●「飛行船」11号（徳島県）

「水のほとり」（竹内菊世）の林田洋子は父の宗一の実家のあった徳島の田舎を訪れます。宗一は田舎を捨てて満州

に渡りますが、敗戦によってすべての資産を失います。実家の居候になり、肩身が狭く、他所者として冷たくされています。農民としては家と土地を守ることが第一であり、土地に縛られて自由がないというのは第三者の見方です。血筋であるがゆえに陰湿な対立や葛藤が生じ、都会生活者に異様に見えても、田舎では日常のひとつの断片にしかすぎません。書き手はそこをきっちり認識しています。崩れた家屋や荒れ果てた田畑には農民の意思を越えた時代の流れが刻印されています。吉野川は農民の喜怒哀楽に関係なく流れつづけています。

「瞑想海峡」（斎藤澄子）は戦前から戦後の混乱時にかけての徳島の海岸に近い田舎町が舞台になっています。桶屋の春蔵のところに家出した娘の子供が帰ってきます。素直



な性格の女の子ですが、妻のアツノは邪険に扱い、隣の八百屋の玉垣洋吉に懐き、戸籍を作るとき美来という名前になります。洋吉の長男の陽介は美来を気に入り、赤紙が来て、出征前夜に祝言を挙げますが、陽介の戦死という連絡が届き、美来は桶屋に戻らずに洋吉と一緒に暮らし、やがて籍を入れます。陽介の戦死は誤報であって、復員してきた陽介を前に洋吉は取り乱し、美来は二人の間で悩みます。険しい関係の中で美来は妖しい魅力を増やせ、やがて身籠り、陽介の籍に戻りますが、どちらの子供か曖昧になっています。美来の苦しい胸の内がわかるのは海峡に激しい渦巻きだけかもしれません。

この書き手は話の作り方がうまく、脇役として近所の職人や音程の狂った三味線弾きを登場させ、またアツノの強欲な生き方も巧みな点描になっています。美来は素直な性格で、裏がなく、それが逆に浮世に蹂躪される美来の闇をいつそう濃密にしています。

●「復刊日曜作家」終刊号（福岡県）

「競馬場」（浅川太郎）は六十年ほど前にできた公営競馬場にまつわる人間模様が描かれています。北九州市の八幡西区に八幡競馬場が建設されるとき、高校生の義一は春休みや夏休みに土木作業のアルバイトをします。義一は炭鉱長屋に住んでいて、中学の同級生の多くは見習工になり、あるいは食堂に勤め、家計を助けています。ユーゾーは中

学の同級生ですが、ちょっと不良っぽく、女湯を覗き、また金貸しをナイフで刺す事件を起こします。貧しい生活に苛立ち、なんとか現状を突破したいと焦っている気配です。義一は大阪に出稼ぎに出るユーゾーに誘われて競馬場にゆき、ユーゾーは予想屋の後をつけて予想屋と同じ馬券を買います。馬券は見事に的中し、ユーゾーの頬に涙が伝わります。うれし涙ではなく生まれ育った土地を離れる別れの儀式です。

●「南風」31号（福岡県）

「コーヒーブレイク」（宮脇永子）では、駅ビルの喫茶店に職業も年齢も異なる何人かが集まり、そこが憩いの場になっている風景が描かれています。製菓会社のプロパーや暴力団関係者あるいは元大学教授などであり、西洋人形の制作を趣味にしているあぐりもその仲間です。元気な顔を見ると、お互いに心が安らぎ、個人的な領域に立ち入らず、そのような曖昧な関係がむしろ魅力になっています。やがて転勤や家庭の事情でひとりまたひとり離れてゆき、日常の何げない風景が消えてゆきます。あぐりは心臓発作で倒れます。

喫茶店で偶然知り合った人々の脆い断面を肩肘張らずに表出していて、書き手の視点は穏やかであるもののその筆力には機敏な牙えがあります。

●「佐賀文学」29号（佐賀県）

「二重奏」（松尾升子）の崇史は上昇志向が強く、地味な人生の父親を見下すところがありますが、長男の祐一を通してその父親像を修正する筋書きです。中学生の祐一はひとり暮らしの祖父の家によく遊びに行っています。祖父が庭の草取りをするとき、土を撫ぜるような手つきであり、祐一はその優しい手つきに感心し、また女の子は土と同じで女の子の土の上に男の人生は広がる、という主旨の話を聞いています。深夜の病室で意識の回復せぬ父親を眺めながら、崇史は祐一の話を受止めます。父親はひたすら自分に合った人生を歩んでいて、平凡な日常の繰り返しの中で家族の調和と秩序を創り上げることに徹していたのだと、崇史は父親の秘められた想いに触れた気がします。長男の祐一が崇史と父親の仲介役をしており、そこにこの書き手の巧妙な意匠が感じ取れます。

●「文学岩見沢」85号（北海道）

「肥前名護屋城趾に立つ」（多田美佳子）では、書き手の自在な思考の流れと爽やかな感性との融合が見られ、書き手の気持の躍動が澁刺として伝わってきます。肥前名護屋城は豊臣秀吉が築き、朝鮮出兵の拠点になります。玄界灘

から入り込んだ名護屋湾を見下ろしています。寒村に突如として天守閣のある大きな城ができ、二十万の武士が集まったよう、徳川家康や伊達政宗また前田利家などの陣屋跡が残っています。

千利休は名護屋城の完成する前年に切腹していて、書き手は利休切腹についての推理を展開します。大徳寺の山門の楼に置かれた利休像や茶道具で暴利をむさぼったことなど、一般に流布されている理由を排除します。千利休の関心は秀吉から徳川家康に移っており、秀吉にとっては裏切りに等しい心変わりであり、そこに切腹の真因を求めています。

朝鮮から連れてこられた陶工の技術が日本の陶磁器を育て、茶道で重宝がられる萩焼や唐津焼は朝鮮出兵がなければ生まれなかったとも考えられます。古田織部の陣屋跡から朝鮮陶器の破片が多く見つかっていて、緑がかつた神秘的な趣きのある織部焼の創案者らしい面目がうかがえます。さらに重要文化財になっている「堅手茶碗 銘「長崎」」の酷い歪みを見て、陶工の失敗作と見做すところなど、自在な判断が光っています。

「その場所で」（寺田文恵）は落ち着いた基調に田舎町の庶民の生活スケッチが織り込まれています。農協には漬物部会やパン部会などがあり、住民の知恵を寄せ集めて地域の活性化に励んでいます。農家の後継者問題では農業の見

習いを募集していますが、雨風や雪の自然現象を相手にする仕事であり、都会の人には馴染めそうにありません。農村地帯の現状をさりげなく浮き彫りにしています。

●「サボテン通り」12号（北海道）

「望遠鏡」（吉田典子）は言葉の流れが爽やかに澄んでいて、溪谷の谷川のせせらぎのようであり、行間には多彩な煌めきを感じられます。しかも会話文にも品があり、機敏で透明な基調はすばらしいものです。

つむぎは三十路を越え、大型文具店に勤めています。気まぐれに函館港の近くのレストランで食事のつもりでしたが、遊覧船に乗りたくなり、そこでテレビで見かけた小谷というお笑い芸人に出会います。売れてはいないのでほとんどの人は気づきません。相性がいいのか、話が弾み、函館湾の岬を見て亡くなった女友達のことを話します。恋に破れての自殺です。この辺りの言葉の遣り取りは巧みな流れになっていきます。函館湾を見渡すドライブに出ると、小谷はロスで知り合ったトムのことを語ります。トムも暗い人生にみずから幕を下ろしています。お互いに二度と逢うことはないという暗黙の了解ができていて、それゆえ安心して暗くわだかまった過去を語り合えたのでしょうか。遊覧船が見え、小谷は望遠鏡で眺めると、トムが乗っていると驚きの声を上げ、つむぎが覗くと、蝶ネクタイの黒人が手を振っています。湾の一望できる食堂でラーメンを食べ、

別れ際、小谷は望遠鏡をつむぎに手渡します。なかなか洒落ています。

地の文も話し言葉も輝いていて、二つの自殺という深刻な話題は透明な基調に融け込み、つぐみと小谷との爽やかな関係における湾内風景のひとつに昇華されています。

「ラジャー」（長沢とし子）では言葉のリズムと響きが精妙な調べを奏で、想像力の煌びやかな乱舞によって現実と幻想の交錯した世界が表出されています。リアリティがどうかの問題は下司の視点の低さを表して、不可思議なオーロラのような色彩の時空に遊べないのは不幸のひとつでしょう。

大助はどもりで、普通に言葉が喋れず、人付き合いかから離れ、黙っていても仕事のできる新聞配達をしています。

母親が脳溢血で倒れて寝たきりとなり、二十年近く、朝夕の配達の間母親の世話をしています。商店街では酒屋に蕎麦屋などが潰れ、歯抜けのようになっていて、大助はその侘しい風景に自分自身を重ねています。話し相手は床屋のよっちゃんだけで、六十歳代半ばの独り暮らしです。

三軒長屋の市営住宅の隣室によっちゃんの妹の咲子の転居でブラジル奥地の先住民らしい男と女が移ってきて、スーパーで会うと、食料などをねだられますが、胸の大きなマリーという女に大助は首つたけになります。白いキャンパスに妖しい色彩が踊りはじめたようです。マリーと抱き合っていると、ブラジルの森林の上空を飛び、赤茶けた沼地に降り、そこで毒蛇を交えてのマリーとのセックスは大助を激しく陶酔させ、無限の天空に舞い上ります。大助の夢幻の日々とともに母親の葬儀費用は少なくなつてゆきませす。母親は大助の行動を怪しみますが、もはや止まりませぬ。突然、ブラジルの二人は姿を消し、強制送還されます。部屋は散らかっていて、大助がプレゼントした赤いブラジャーとパンティも投げ出されています。咲子とブラジャーの処理を話していると、大助はどもりに喋れ、最初にブラジャーと声を出せばすんなりと言葉がつづきます。人前でブラジャーというわけにはいかず、「ラジャー」という言い方に修正します。「ラジャー」のお蔭で大助はもはやどもらずに喋れるようになります。ブラジル奥地の妖

サボテン通り

12

編集長	吉田典子
編集委員	吉田典子、長沢とし子、つぐみ、小谷、大助、咲子
発行所	札幌市中央区南一条西五丁目1番1号
発行日	毎月15日
定価	100円
送料	別
印刷	札幌印刷
発行	1980

しげな精霊が見守っているのでしょ。

気まぐれの発想と精妙な計算による言葉とが未分化になつていて、そこからの奇妙な表現の妙味を駆使している気配であり、この書き手の特異な感性の脈打つ思考回路は神秘的な迷路に導き、ブラジルの奥地あるいはアマゾン川の上流であつても不思議ではありません。

推薦作

- 「板橋遊民伝」（沢崎元美／「月水金」36号）
- 「魔女と過ごした夏」（朝岡明美／「文芸中部」90号）
- 「古都白川小雪坂」（市川しのぶ／「弦」91号）
- 「ラジャー」（長沢とし子／「サボテン通り」12号）

準推薦作

- 「茜荘外伝」（沢崎元美／「全作家」86号）
- 「望遠鏡」（吉田典子／「サボテン通り」12号）
- 「肥前名護屋城趾に立つ」（多田美佳子／「文学岩見沢」85号）
- 「海霧」（吉満昌夫／「埋火」51号）
- 「瞑想海峡」（斎藤澄子／「飛行船」11号）
- 「紫陽花」（石川好子／「きなり」74号）
- 「明日はきつとある」（多河由利子／「櫻坂」13集）
- 「青空を切る」（若草田ひずる／「じゅん文学」72号）

（全国同人雑誌振興会／東谷貞夫）

九州福岡の同人雑誌懇談会

●八月七日火曜日午後二時から西鉄イン福岡ホテルで、訪福した五十嵐勉本誌編集長・全国同人雑誌振興会会長代理を囲んで、福岡の同人雑誌の懇談会が開かれた。「九州文学」編集長・波佐間義之氏の司会で「南風」和田信子氏、紺野夏子氏、「海」有森信二氏、「胡壺KOKO」ひわきゆりこ氏、「照葉樹」水木怜氏、「季刊午前」井本元義氏、潮田征一郎氏、「KORN」納富泰子氏、「九州文学」阿賀佐圭子氏、林田佳莉氏、田中圭介氏、八重瀬けい氏などが参加された、和やかな懇談会となった。

まず五十嵐編集長が「文芸思潮」の動機と目的を話し、さらに現在の同人雑誌の状況や今後の方向性について、「文学界」で同人雑誌評がなくなつて以来の同人雑誌評の変化に触れつつ、同人雑誌評の重要性や「まほろば賞」が果たす役割やその



目的およびこれまでの経過を話した。インターネットによる同人誌の変化にも触れつつ、現在の活字メディアが置かれている変革期の危機についても私見を述べ、今後同人雑誌など各書き手の比重が大きくなっていくだろうと見通しを述べた。同人雑誌の書き手のエネルギーが何よりも重要であり、それをいかにしてすくいあげ、全体の興隆に繋げていくか、その仕組みを構築していくべきと主張した。

老齢化の問題も取り上げられ、司会から各参加者に現状と方策などを求め、若い層の率直な意見を交えつつ活発な意見が交わされた。福岡の同人雑誌の状況、各誌の取り組みや事情など、それぞれの抱えた問題などが胸襟を開いて語られ、ヒントになる意見も多く出された。

参加者から、「これまで九州

47号

でこのように同人雑誌が集まつて、横の繋がりで集まつたり、話し合つたりすることはなかった。いい機会ができてよかった」との感想も出た。

二次会ではさらに和やかな懇談となり、駆けつけた「九州文学」の箱馬八郎氏を交えて、過去の同人雑誌や創作活動に触れながら、ざつぱらんにそれぞれの思いが交わされ、盛り上がった酒宴となった。

(全国同人雑誌振興会)

●また広島では「安芸文学」主幹の岩崎清一郎氏と、五十嵐勉が懇談した。岩崎氏は、現在の全国的な同人雑誌評について、あまりいい批評がないのと、「三田文学」の同人誌評のように、会話や対談の形では批評しきれないし、よい批評にならないと述べ、また「季刊文科」につ



いては広島では書店に並べられていず、手に入りにくいとも述べられた。やはり同人雑誌評が重要であることと、現在の商業文芸誌にいい小説作品がなく、魅力のある作品が乏しいことも指摘された。岩崎氏は積極的に全国同人雑誌振興会の団体会員になってくださった。

●長崎では「長崎文学」の向井十郎氏と懇談し、現在の実質的な編集長を務めておられる野沢薫子氏を紹介していただいた。野沢氏から長崎の同人雑誌および文芸協会の現状などを話していただき、問題点や今後の方向などについて、情報交換を行なった。長崎図書館の優れた保存力も紹介していただき、吉村昭や遠藤周作などもよく長崎図書館に来ていたことも話され、有益な情報となった。地方の創作エネルギーをやはりよい方向に展開していこうという新しい繋がりの可能性が感じられた。

(五十嵐勉記)

写真/阿賀佐圭子

●「季刊午前」47号(福岡県)

「晋山女房」(古木信子)の文体は上品で潤いがあり、しかも情景の変転も巧みであって、その流れのいい展開は読み手の心を惹きつけます。

亜美は小さな経済界紙の記者であり、大雨のためにゴルフ場の取材は中止になり、一年前に取材した貞道のかつての仕事場に向かいます。貞道は尺八作りの名人で、演奏もして、アマリーカ人の尺八奏者が貞道の尺八を購入し、それが話題になっていました。貞道は阿蘇高森に仕事場を置かれており、亜美は尺八に賭ける孤絶の情に気が取り合っていました。取替の後、メールなどで連絡を取り合っていました。半年前、錆びた鉄の門の写真を送ってきたと、貞道の消息が運ばれます。雨の中、大家の台志さんの家に立ち寄り、



台志さんは貞道を死んだ息子のように思っていて、ずっと気にかけていました。晋山の寺の住職は病気で、寺の仕事は後添えの坊守さんがしており、貞道とは郷里が同じであり、貞道は坊守さんを追ってこの土地に来た気配がうかがえます。寺が火事になり、住職と坊守さんが亡くなり、その後には貞道は姿を消しています。貞道が最後に送ってきた写真を見せると、台志さんは石の塔にまつわる話をします。鉄の扉の奥に石の塔があり、そこは来世と現世を結ぶ場所であり、家族が会いに行くとき、亡くなった人は塔の上に現れ、お別れの言葉を交わす、ということ。石の塔までの道順を確かめて亜美は車を走らせます。雨は止んでいて、鉄糸網の張り巡らされている門扉をうまく抜けると、芝生が広がり、石の塔は見当たらず、ずつと先に行かないや甘酒の茶店が見えます。店先に尺八が飾ってあります。亜美ははじめて坊守さんに会い、そのとき作務衣姿の貞道が奥から顔を出します。二人は仲の良い夫婦になっていた。亜美が幻想から覚めると、目の前に心配そうな台志さんがいます。亜美は門柱に車をぶつけ、救急車で病院に運ばれていたのです。貞道と坊守さんの茶店は亜美の幻想だったのですが、亜美の仄かな嫉妬の投影でもあるようです。普通の書き手ならば、車のぶつかる場面を描きますが、この書き手は精妙に読み手を尺八の飾った茶店に誘っていて、その美しい策略は見事に成功しています。

●第二期「照葉樹」2号・通巻13号(福岡県)

「中年バックバッカー独り旅、ペルー編」(西村弘之)ではペルーのマチュピチュやティティカカ湖またナスカ平原などを回り、言葉が通じな

れた感性和恵まれた才能がうかがえます。永く同人誌に關わってきたベテランの書き手は顔をしかめそう。

●弱小プロダクションの山吹ユカリは西郷隆盛の

大生を描く連続テレビドラマ「兎孫のために美田を買わず」への出演が決まり、主演女優とともにサツマ県知事を表敬訪問すると、西南戦争当時の銃弾をいただきます。ユカリは隆盛の流された島の娘を演じ、非常に好評でコマリシャルの依頼が舞い込みます。銃弾はネットワークに加工され、ユカリの運の象徴になったようです。さらに阿蘇山の大草原の野外ステージでロック歌手として注目されます。ユカリの身体は多彩な照明を浴びて奔放に躍動し、その彼女の描写には煌びやかな輝きがあります。しかし大手プロダクションの要請により社長兼マネージャーの高須はユカリを手放します。その後、高須のプロジェクトは低迷し、解散しますが、芸能界の人脈を活用して居酒屋を開きます。開店祝いに国会議員になった元サツマ県知事や大手広告会社の友人などが駆けつけ、ユカリの姿もあります。ユカリはスキヤングルの顔食になっていて、芸能界遊泳術に馴染まない様子です。しばらくしてユカリの引退が報道されます。高須は芸能界の暗部から脱出するユカリに拍手を送ります。芸能界を扱っていますが、爽やかな基調であり、この書き手の小説技量は卓越しています。

●「明尊の三士人」(興膳克彦)では北九州での工

業専門学校の設立の経緯が描かれています。明治期の産業は繊維や紡績からはじまりますが、富国強兵の国策の浸透によって機械や鉄鋼などが盛ん

くても、勘と度胸で未知の土地を爽やかに遊泳します。この書き手は経験豊富なことに文章の流れがよくなり、自分流の視点で描いていて、確かに書くことが進化しています。

「干潟に埋もれた鳥のように」(水木愼)では野心に燃える男に捨てられた若い女の鬱憤が爆発します。美咲は妊娠したものの、車にぶつけられ、流産します。愛人の梶田は大手不動産会社の若社長になり、絶望した美咲は自殺するところをおしほり配達員の淳一に助けられ、情性で一緒に住んでいても、やはり梶田が忘れられません。数年ぶりに梶田に会い、気が昂ぶります。梶田は巧みに美咲を操り、死期が迫った義父の相手にしようかと企みます。また真切られて怒り狂った美咲は梶田を轢き殺しかけますが、淳一が阻止します。

●「周炎」49号(福岡県)

「北イタリア美術巡礼」(響安翠)はローマのボルゲーゼ美術館からはじまります。十七世紀のシビオーネ・ボルゲーゼ枢機卿の別荘が美術館です。パロック芸術の巨匠であるベルニーニ、そしてラファエロ、さらにカラヴァッジオの作品など、ルネッサンス期やパロック時代の崇高な精神に感動します。ツアーでは、著名な前院や美術館



になり、その動力源は石炭です。日清戦争と日露戦争を契機に石炭業界は飛躍的に伸びます。筑豊地域は石炭で活況になり、安川敬一郎は時流の恩恵を受けた実業家です。安川敬一郎は私財を投じて工業専門学校の設立を計画します。明治三十九年、安川は東京大学の総長を辞任したばかりの山川健次郎に相談すると、山川は安川の意気込みに感動します。義兄の辰野金吾を誘い、辰野は日本銀行本店の設計者であり、東京駅の設計も手掛けています。明治四十二年四月、北九州に明治工業専門学校が開校し、採掘や冶金また機械などの学科が設置され、山川健次郎が総裁になり、工業技術者の養成機関として発展します。

この作品は明治の時代背景を取り入れ、重厚な仕上がりです。その当時の政治事件や社会問題にも触れていて、時代の息吹が感じられます。

●「長崎文学」69・70号(長崎県)

69号「超熱帯魚 ムー」(江口宣)は空を飛ぶ魚の奇怪な物語です。水が沸騰すると、鱗が虹のように煌めき、空中を遊泳します。ムーという名

を巡り、最後はトリノのウエナリア宮殿になっていきます。二週間の充実した美術旅行ですが、ホテルでの夕食などのメニューを添えており、意外な効果があります。

「神はまだ絶望されていない」(川村道行)は奇妙な雰囲気作品です。主人公の僕は市役所で仕事をしています。老人の音が聞こえます。周囲に人影はありませんが、僕の隣の奥に市庁舎の隣の公園のベンチに座っている老人の映像が映りま

す。老人の許に駆けつけると、茶色の紙袋を薬局に届けるように頼まれ、薬局では今度は液体の入った容器の紙袋を渡され、老人に届けます。レストランで妻に話すと、妻はわかっているような素振りを見せ、僕は妻と老人の繋がりを意識します。日曜日、ふたたび老人が僕の家に現れ、自宅に誘われ、緑の箱をもらって帰ります。緑の箱は妻が黙って手にしたようです。数ヶ月後、老人の家にいくと、屋敷は取り壊されて更地になっています。年末に宅急便が届き、女の子用の衣服が入っています。戸を叩いてはいる妻は当然のことのような顔を見せます。生まれたのはやはり女の子でした。老人と妻として緑の箱、不思議な繋がりがあ

●「九州文学」19号・通巻542号(福岡県)

「銀色のロゼッタ」(おおくぼ恭)は新人俳優の芸能界へのデビューおよび芸能界の裏事情に焦点を当てています。豊かなホキヤブラリーを駆使し、流麗な展開になっていて、この書き手の優

全国同人雑誌振興会

前は氷河期の終わり頃、一万数千年前に太平洋に沈んだと伝えられているムー大陸に困っています。インドやビルマの古代資料に登場しており、インドのヒンズー教の古い寺院で発見された地陶によると、南シナ海に大陸が沈んでいます。熱帯魚のムーは、六十四年に一回、生き残った仲間が集まり、幻の海底都市でお祭りが開かれます。小学生の主人公、あいざわしんごがムー研究室の察原教授の潜水艇でその祭りの調査に向かうと、ムーは魚に変質した人間だったのです。古代伝説や海底遺跡など、もっと面白く始めると、ステールの大きな怪奇物語になったでしょう。

70号の「お布施はいかほどに」(野沢薫子)は、群馬県の片田舎に浅井純子は姑と長男の義樹の三人で暮らしています。夫は中学の教師でしたが、セクハラをテッチ上げられ、その心労で亡くなっています。世間の目は急に冷たくなり、気軽に話しかけられない雰囲気です。激しい雨の日、軒下に雨宿りの男の影に気づきます。バスはなくなり、近くに旅館もなく、人柄はよきそ様な僧侶なのでカレッジに泊まってもらいます。翌朝、僧侶は雨宿りにたまったゴミを掃き出し、屋根の雨溜りをお経を唱え、さらに黒染めの衣で純子の夫の位牌にお経を唱えます。隣の爺さんは様子を探りに顔をだし、立派な説教に感心し、自分の家でお経を頼みます。その評判を聞いて、お寺のない町なんです。先祖の供養の依頼がひっきりなしにやってきます。

浅井家に世話になっていますが、庭の手入れにも気を配り、姑も気に入っています。山口県のお寺で修行しているとき、住職の息子を悪の道から

助け出そうとしてヤクザと大立ち回りをし、その後各地を放浪し、それも修行のひとつとして心得ています。丘の上のゴルフ場に通じる道の石垣が崩れそうなので、ゴルフ場や役所に駆け合いますが、相手にされません。雨水の圧力で石垣が崩れ、激しい濁流が民家を襲い、何人かの犠牲者が出ます。僧侶は公民館の遺体安置所に向向き、お経を唱えますが、その姿を刑事が観察しています。翌日、山口県からの手配書が回っていたので、僧侶は警察に連行されます。純子の家には多くのお布施が手つかずのまま残されたままで

この書き手は文章がうまく、筋書きもしっかりしているものの、表現としての興行きに不満を感じます。僧侶の正義感は強いのですが、癖のない表情であり、特異な性格が表れておらず、そこが残念です。

●「米子文学」62号(鳥取県)
「墓穴」(野坂喜美)は戦後の混乱期の田舎の状況に触れています。語り手の私は八十歳を越えていて、お彼岸は雨だったので、その翌日に墓参りに行きます。菩提寺の石段のところで、私の父の同級生の伊三郎の孫に出会います。孫といっても五十歳は過ぎており、若い頃は相当な問題児でしたが、今は落ち着いて家庭を築いています。祖父の面影を宿しており、父の七回忌と祖父の二十五回忌をするという話です。

私の父と親しかった伊三郎は気性が激しく、すぐに喧嘩腰になり、ケンカサブという綽名がついています。確かに直情径行ですが、さっぱりした性格で、村人から頼られていたところがありました。

八月の群れ

編集者 藤野野矢 発行所 全国同人雑誌評会
編集者 藤野野矢 発行所 全国同人雑誌評会
VOL. 55

医療業界さらに地元の有力者への根回しは完璧のようです。島本はその事務処理が終わると、二年間の奮闘を胸に刻み込み、辞表を提出します。島本は二十五年ぶりに川下りのある町を訪れ、その目的のひとつは世話になった「秀美」のママを見舞うことです。

安原院長や島本事務局長などは利潤を求める田川理事長の経営方針に振り回されていますが、個人的な感情や社会的善悪の判断などは抑制されていて、すっきりとした仕上げになっています。病院も営利事業であるという田川理事長の視点が冷徹に表れており、読み応えのある作品です。

●「あべの文学」15号(大阪府)
「竜宮への道」(かしま泰)では、高級老人ホームの入居者が湖に浮かぶ竜宮城に消えるという風刺的なまたは不条理な雰囲気漂っています。

老人ホームは湖畔にあり、湖に浮かぶ島には高い崖の上にくすんだ赤い屋根の家があり、その壁は白く、その背後に尖塔が聳えています。主人公の彼は入居して間がありませんが、島の景色が

す。戦後の混乱期に村長になり、思い切った判断で難局を切り抜けたようです。敵も味方も多く、村長選で勝ち目がないとわかると、村議に鞍替えします。ところが、八十歳を前に自殺して。墓地の近くの線路で胡坐を組み、背後から直進してくる蒸気機関車に轢かれたのです。墓地には座棺が埋められるような大きな穴が掘られていて、ケンカサブの心意気が感じられます。実際、借金や警察沙汰などはなく、自殺の原因はわかりません。跨線橋に上がり、ケンカサブの胡坐を組んでいた現場を眺め、私にとって忘れられぬ昔の点描になっています。

この書き手の枯れた感覚の紡ぐ人間模様は胸に滲みわたります。

●「海峡」28号(愛媛県)
「虚と実の途上で」(三玉尚)は最先端設備の病院の治療よりも町の人情のわかる老医師のアドバイスの方が迷える患者の心に触れる、という事例です。生真面目なサラリーマンの牧瀬忠は社宅を出て横浜の丘陵地帯の公団住宅に引っ越しします。自然環境はいいのですが、通勤に時間がかかり、体調を崩します。大病院の診察を受け、薬を処方してもらおうものの、狂った身体は治りません。下町の老医師に出会います。日常の行動に変化をつけ、気持をリラクセスさせるようにアドバイスを受けます。体調は戻り、いままです。社宅の旋に縛られていた自分自身に気がつき、公団の近くの野原や農家の畑の風景を素直に楽しめるようになります。

「日出づる処の天子」(京あすか)は古田史学の観点に基づく作品で、文章の基調はしっかりと

気に入り、毎日、岸辺に下りて湖面の向こうの赤い家を描いています。ヨーロッパ的な風景なのですが、ホームの老人達は彼のキャンパスを覗いて、竜宮城を描かれているのです。と口を揃えます。小高い崖の上の家は竜宮城と呼ばれているようです。談話室で見かけた老人やご婦人が姿を消すと、竜宮城に行つたということになり、職員や入居者は冷静に対応しています。老人ホームは現実社会とは遮断されている気配です。湖に突き出した岬に大型の掘削機があり、その辺りに竜宮城に通じる道がある、という噂ですが、赤い屋根の家には誰が住んでいるのかもわかりません。主人公の彼は掘削機の周辺で砂の中に呑み込まれてしまっています。掘削機と秘密の通路とは似合わず、強い風が吹くと、神隠しのように姿が消える、という方が相応しく思われます。

老人の終幕あるいは人間にまつわる不条理など、さまざまな問題意識が提示されています。しかしテーマの成熟度がどことなく不足している印象です。発想に輝くものがあるので、文章表現に磨きをかければすばらしい作品が生まれるでしょう。

●「あるかいど」47号(大阪府)
「言い乳房」(多紀祥子)は余計な描写、またくどい状況説明は排除されていて、いささか抑制された文章ですが密度の濃い内容になっています。

江梨子は宴会場での窃盗容疑で留置され、看守係の宗田吾朗と知り合います。暑い夜、江梨子は上着を脱ぎ、下着を外すと、左胸の乳房はなく、右胸の乳房は青くこぼれるような印象です。宗田はたじろぎます。定年前に退職した宗田は焼き鳥

全国同人雑誌評会



黄色い潜水艦

は女の表情や服装などの描写が必要になりません。

ひらがなの「おんな」の場合、抽象的な存在が暗示され、非在としての「おんな」が顕れます。書き手はその識別の効用を微妙に計算しています。おんなは省吾の意識の深層に棲みつき、町を歩いてもおんなの気配を感じ、自宅の二階からおんなの後姿を見かけたり、馴染みの喫茶店にも現れます。おんなは黄泉の国の使者かもしれないせえ。玄圃の致軒先の家に白い花の咲いた木があり、その芳醇な香りにもおんなの影が融け込んでいます。その花の木の一枚を手にすると、日没後に墓石に残された白い騎を想わせます。繊細な感性が哀しくやせせない通奏低音を仄かに響かせ、省吾の意識と肉体は浮世から離れてその旋律に同化してゆくようです。

●「猿のあしあと」4号（和歌山県）
「夢のように遠い夏（永栄啓伸）の場合、「ほく」という一人称が弱屈になっていて、その昏が崩れて中味が溢れ出る、という気配です。一人称では他者の言動を柔軟に描けず、他者との対立また葛

れ、母が受け継ぎますが、誠実な社員鈴木を専務にし、護は簡単な仕事を続けさせます。名古屋に嫁いだ判発な姉の貞佐子とは対照的です。護の行く末を心配しながら母は亡くなり、葬儀は貞佐子と鈴木社長が取り仕切り、護はお客さんのような立場です。遺囑前になっていますが、見通しは立っていません。

●「黒馬」39号（長野県）
「あいつ」（西村春枝）は田舎生活の孤独の影の漂う老婦人を描いています。定年退職した私は老朽化した家屋敷に手を入れ、梅や柿また栗などの

藤から生まれる精神的躍動を十分に活用できません。他者が自由に動いて独自の考え方を開示できない表現手法に迫られています。この書き手には部会的な情趣のある思想的で雄大な構構が期待できます。

●「中野べん」19号（愛知県）
「マルグリット」（西澤しのぶ）は十七世紀の半ばのフランス中南部のクレルモン町の姉妹の物語です。ジャックリース・ペリエは八歳、その妹のマルグリットは六歳で、どちらも亜麻色の髪可愛い姉妹ですが、妹のマルゴは左目を傷つけ、ひどくなります。薬草で洗っても症状はますます悪化し、醜く腫れ上がり、町に出ると、化け物といつて石を投げつけられます。叔父の紹介でパリの名医の診断を受けますが、やはり薬草治療に賭けるしかありません。サンジャック門の近くのポール・ロワイアル修道院の寄宿舍に入ります。薬草治療も効果はなく、顔は潰れ、体力は消耗し、マルゴは見棄てられた状態です。心清らかなマルゴは自分自身の信念で神を待ちます。マルゴの十歳の誕生日の前、聖遺物を崇敬する儀式があり、マルゴも白い衣裳で参列します。いつもマルゴを氣

木は腸に寄せ、五十坪ほどの畑を作り、野菜を育てます。農家の城倉さんは私の畑仕事に何かと氣を使ってくれ、近所の千代さんは近辺の情報を教えてくれます。どこかの天柄な飼い猫が私の庭を気に入り、いつしかその猫の言葉がわかるようになります。城倉さんの奥さんが脳溢血で倒れ、リハビリ施設に入りますが、奥さんは流動食を拒み、やがて亡くなります。大柄な猫によると、奥さんは畑にいるときには通りがかりの人に嫁の悪口を言っているようです。また嫁との確執に疲れ、助からないのなら静かに死にたいという心境になったとことです。城倉さんに会ったとき、オレとはうまくいっていたと苦笑いを洩らし、そこには城倉さんの人柄が滲んでいます。大柄な猫は私の秘かな気持の投影でもあり、六十歳半ばの私に生きる手応えをもたらします。猫との温か味のあるシンフォニーが奏でられています。

●「岩漿」20号（静岡県）
「ともしび」（岩越孝治）は大きな構想の読み応えのある作品です。柴田圭介は異通りの強請りやたかりを生業にし、雑居ビルの一室で寝泊まりしています。激しい雨の夜、ずぶ濡れの老人がビルの前に立っていて、二十何年前に母親と自分を捨てた父親の哀れな姿です。幾枚かの紙幣を握らずと、頭を下げて離れてゆきます。何度かこういうことがつづき、ひどく雨の降る深夜、建物に入り口でぐったり倒れている老人を見つけ、救い取ります。その死に顔は静謐で優しく、無惨な人生を超えた美しさを宿しています。

同じ仲間の稲垣は五年前に強請り相手の女にラ

「詩歴」（池戸亮太）は上品な趣きが見出せ、世間の理屈や善悪の判断などは谷川の流れる淡い叙情性に融け込んでいる、という印象です。幼馴染の時の想い出あるいは村木置き場での鬼ごっこ遊びなど、書きすぎないとここで筆を抑えておこり、そのセンスはなかなかのもので、詩情の香りの秘められた舞臺で主人公の精神的成長の軌跡が描かれています。

●「黄色い潜水艦」56号（奈良県）
「白い騎」（大野律子）はあの世とこの世の境界に在る逢宮を暗示しています。省吾は定年を過ぎ、妻蘭貞輔のアルバイトをしており、娘は独立し、妻は実家の年老いた母の面倒を見ていて、独り暮らしです。定年の前後でしょうか、省吾はおんなの影に惹きまわれ、おんなは省吾の家の二階に音も立てずに上がり込み、彼はおんなを抱いてしまっています。幻想と現実が交錯し、深い音の彼方の出来事のようにです。

この書き手は「女」とは表記せず、漢字を使え

にかけている寄寓者の世話屋のフラウワイーさんが聖遺物の中の金泥の太陽を取り上げ、マルゴの目にそっと押しあてます。一瞬の動作で、マルゴの痛みはなくなり、医者がやってきましたが、マルゴの顔を眺め、愕然とするだけです。

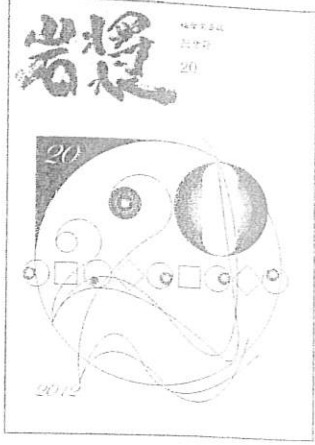
書き手の文章に気品があり、その基調は涼としいはパリの医療事情などを遠い背景にしてマルゴの神への信念が伝わってきます。

●「渤海」64号（富山県）
「水の言葉―かたわらで―」（山口馨）では世間の価値観から外れた人物が上手く造形されています。護は家庭や社会に馴染まず、変人と見做されています。知能が低いわけではなく、外部世界との接触を避けているので、思考の幅は広がらず、また感情の表現も乏しくなっています。損得にも鈍感です。

メンテナンスを会社を経営する父は護に自動車免許を取らせ、会社の仕事を手伝わせます。社会の空気に触れさせようとする配慮です。その父が倒



渤海



が、手渡された手帳とメモリーをその場で処分し
ます。そのとき圭介は乞食のような父親の死に顔
の美しさを告げると、夕紀の瞳から哀しく光るも
のがこぼれます。圭介の父親の無垢な死に顔と身
代わりになった夕紀の心の秘密が共鳴し、その真
しい調べはメタフィジックな世界に仄かに響いて
います。

この書き手の精神には灼熱のマグマが潜んでい
て、社会の規範や善悪の彼方を見凝めています。
確かに粗削りな表現が目につき、洗練さも欠けて
いますが、いわば小説の枠を突破する勢いがあり、
その脈動感に魅力です。

●「まくた」276号(神奈川県)
「みちゆき」(平井文子)は戦後の混乱期が過ぎ
た頃の大阪の天下茶屋の情景が描かれています。
秋子は二階建て長屋に住んでいて、彼女の視線を
通して十歳頃からの数年間のその地域の移り変わ
りおよび庶民の生活模様などが浮かび上がってき
ます。近くの年寄りが亡くなり、遊び友達だった
同級生が突然に旅立ち、また困われ女が駆け落ち
し、そういう経験を積みながら彼女は世間という
ものに触れてゆきます。さらに父親の影響で歌舞
伎や浄瑠璃に親しみ、現実から離れた世界に想像
力を羽ばたかせたりします。平屋建ての汚れた
長屋が多い中で二階建ては恵まれています。悪臭の
漂う路地のバラックでは親子四人が六畳一間で暮
らしていても不思議ではありません。金欠に喘ぐ
落語家や漫才師などの芸人が果食う長屋もあつた
ようです。

この書き手は下町の粗雑な雰囲気をおよそと
きれいに描きすぎている、吹き溜まりの下町の奥行
する人が眠っています。真理子は白いバスローブ
を肩から滑らせ、世の中の約束事に囚われぬ白い
肌を見せ、みずからの削り上げた眩く神秘的な髪
気抜に融け込んでゆきます。

●「飛火」42号(東京都)
「僕に向けた仕事」(菅谷裕)は接客用の女性ロ
ボットを題材にして、飾り気のない素直な文
章の良質な作品になっています。柴田は五十歳前
になつても食うや食わすの生活で、友人から仕事
を紹介されます。上品な身なりの柴田は会員制の
高級クラブ「王宮」のレストランの窓際の席で美
しい女性と食事をしています。柴田はサクラで女
性は精密なロボットであり、舗道を歩く人が二人
の食事風景に興味を抱いて会員になつてもえられ
ば、という趣向です。保管庫には数多くのロボッ
トがあり、柴田は早苗という名前のロボットが気
に入ります。週に一回、レストランの窓際で楽し
く過ごします。親しくなると、早苗の方から柴田
の趣味や出身地を質問します。早苗は店の外で会
いたいと誘い、柴田にとって衝撃的です。約束の
喫茶店に現れたのは顔も声も早苗にそっくりな女
性です。横山真由美はロボット技術者で自分をモ
デルに早苗を製作しており、早苗にぞっこんのお
客がいるという話を聞き、管理室の映像を再現し
て窓際の二人を観察していたのです。彼女は柴田
に惹かれ、早苗を操作して会う約束を取り付けた
わけです。柴田は明日への希望にわくわくします。

●「仙台文学」80号(宮城県)
「安倍清騒動」(松窓三二見聞録)「宇津志勇三」
は仙台城下町での民衆の打ち壊し騒動を素材にし
ています。天明三年(一七八三年)の仙台藩は深
きに欠けていますが、秋子の精神的成長の軌跡は
充分にうかがえます。

●「時空」37号(神奈川県)
「紫煙」(福島弘子)では、わずかな状況の変化
で変容する中年女の友情や嫉妬また敬意などが炙
り出されています。愛美は五十歳に手の届くこ
ろですが、勤めながら歩行の困難な母親の介護を
しています。偶然に立ち寄った喫茶店で花江と節
子に出会い、お喋りがいい気晴らしになります。
花江は六十歳を越えていて、節子は五十歳の前
半です。花江に石倉という男友達がいて、愛美が
その彼の再婚相手として打診されると、ちよつと
派手な装いの節子が出て来たり、花江は節子と
石倉との仲を取り持つはめになります。久しぶり
に喫茶店を覗くと、花江は不機嫌な顔で節子の身
勝手な行動を非難します。節子と石倉の交際が順
調なのが面白くないようです。愛美は花江が石倉
に惹かれていてることを感じ取ります。花江と節子
の修復できない亀裂を思い浮かべ、また節子と石
倉の仲のもつれるさまが仄かに脳裏を掠めます。

●「サボテン通り」11号(北海道)
「日常」(森野いつき)は移りゆく日常風景を何
気なく描いていますが、巧妙な伏線が張られてい
て、非日常の世界に誘い込みます。育子は夫と娘
の三人家族であり、卓郎は明るい性格で照美は素
直に育っています。洗濯日和だった、という冒頭
の一行は円満な家庭の象徴です。裏手のアパート
の二階に化粧のない地味な女が住んでいて、育
子よりも十歳ほど若そうですが、どこかで会って
いるような気がします。育子はデッサン教室に通

●「一文筆街」299号(東京都)
「ベスト」(ピフオー エンドー)「長月遊」は不倫
の結末を美しい幻想に昇華しています。真理子の
父親は悪科のマンションを処分するつもりです。
真理子はそれぞれの季節ごとに愛人の1とこの遊瀬
に使っています。愛人関係はすでに十七年もつづ
いていて、時間とともに彼女は孤独の影を引き摺
ります。いささか生活感が希薄ですが、彼女の人生
は1の存在が軸になっており、不安と緊張が彼女
の心の奥底で濃密になってきています。愛の賞
味期限といつても言葉の遊びで、賞味期限を過ぎ
てから美味しくなるものもある、というのは彼女
の本音でしょう。無秩序、無節操、自堕落として
遊蕩などが彼女の精神に滲み込んでいて、その突発的
な発現が彼女の人格であり、人間性でもあって、
そこに彼女の不可思議な魅力が秘められていま
す。現在、真理子は1からの連絡をすべて断って
います。
真理子は父親の手放す前に豊科のマンションで
過ごします。窓辺から女神像を眺めると、二人の
愛の痕跡の残る部屋の打りが窓を突き抜け、風い
だ湖面に青白い光の輪になって浮かんでいます。
遠い湖底から伸びた白静の水がベッドになり、愛

空 時
第37号

編集長	福島弘子
発行所	神奈川県
発行日	毎月
発行部数	100部
定価	100円
送料	別
購読料	別
購読先	〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1
購読先	〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1

48号

全国同人雑誌編纂人会

第10回 銀華文学賞 作品募集

銀華文学賞は、人生経験豊かな壮年・熟年・シルバー世代の文芸創作活動に光を当て、その小説作品を賞揚し、文学創作エネルギーを顕彰するものです。埋もれた才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、広く社会に知らしめ、真に価値ある作品を世に残すことによって、日本文学の興隆に寄与することを目的とします。

10周年の今年どうぞ奮って銀華文学賞にご応募ください。お待ちしております。

●●募集要項

募集内容 ● オリジナルの短編小説作品。これまで同人雑誌などに発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数応募者は失格とする）。

応募資格 ● 2013年6月30日現在において45歳以上の者

応募規定

400字詰原稿用紙50枚以内（20枚くらいのもので可 / 原稿用紙使用の場合は必ずA4の原稿用紙を使用のこと）。ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず右上を綴じること。応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取って応募のこと（コピーを応募するのが望ましい）。※ 応募審査料が1000円かかります。

別紙に①タイトル②本名およびペンネーム③年齢・生年月日（年齢・生年月日のないものは失格とする）④〒（ないものは失格）・住所⑤電話番号⑥職業・略歴⑦400字詰換算原稿枚数を記したものを添付。⑧応募部門（第10回銀華文学賞応募作品と明記）⑨応募審査料1000円を郵便為替で同封。外国からは12USドル。

応募者には結果を通知し、希望者は作品をインターネット・ホームページに掲載する。

応募先 ● 〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

文芸思潮「銀華文学賞」係

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

賞 ● 銀華文学賞 賞状・トロフィー・賞金20万円（受賞者複数2名の場合は10万円、3名の場合は7万円）・10周年記念特別記念品

河林満賞 賞状・トロフィー・賞金5万円

優秀賞 賞状・賞メダル・賞金3万円（4名以上の場合2万円）

奨励賞 賞状・賞メダル

選考委員 ● 作家集団「塊」メンバー

締切 ● 2013年6月30日（当日消印有効）

発表 ● 予選通過者は2013年11月末発売の「文芸思潮」53号に発表する。受賞者は2014年1月25日発売の「文芸思潮」54号に発表掲載。優秀作・奨励賞など優れた作品も順次「文芸思潮」およびインターネットに掲載する。

主催 ● 文芸思潮

※ 主催者から 真摯な文学創作に打ち込んでいる人々に光を当てたい。強烈な体験、斬新で強靱な視線、震えるような共感、心に迫る文章、魂を打つ言葉を期待しています。熟年世代・シルバー世代の底力を見せてください。10周年にふさわしい力作を楽しみにお待ちしております。

※ 恐縮ですが応募審査料1000円を御協力くださいますようお願い申し上げます。

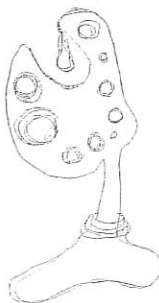
サボテン通り

11

色の模様のついた白いキャップ、カーキ色のパーカーにびつたりしたパンツ、さらに薄茶色のサンダラス。他人の視線が気になります。商店街の不動産屋の物件情報を眺めていると、二階の女に見つかり、青子は何か所かの空き部屋に案内されま

「谷川るいの場合」(吉田典子) では、筆力と感性さらにイマジネーションの共鳴によってどのような賢妻が表現されるのか、書き手の意匠が大胆に表出されています。谷川るいは結婚に設定されていますが、彼女の性格や考え方が結婚に似合っているかは問題ではありません。肉体を金銭に転換し、現実と乖離してゆく暗い時空に浮遊する女が創られているのです。帽子屋のショーウィンドーを眺めていた彼女は中年紳士に声をかけられ、佐久間という旅行者に違和感もなくついてゆき、ロシアの港町の女の話を惹きつけられます。

その女、カテリーナは高級レストランのテーブルの片隅に黒い手袋を置いています。目敵い紳士は彼女に微笑みますが、彼女は気にいらなければ相手にしません。高級娼婦であって、同じ男とは二度とベッドを共にせず、情の入り込む余地を排除しているからです。彼女には不思議な魅力があり、男達は近寄ってきて、娼婦としての見通しを立てます。カテリーナの気位が彼女を支えます。六十歳になっても、収入は少なくともなっています。昔の緑でレストランのオーナーシェフの店で



- 食事をしていると、彼女の十七歳のときの写真に出会います。彼女の母の愛人で、彼女の処女を奪ったカメラマンが撮ったものです。彼女はその写真を破り捨てますが、それはもはや存在しない女が映っているからです。彼女はカテリーナのイメージに導かれ、現実から遠く隔たった世界に住んでいて、眩い賢妻が彼女の周囲に煌めいていますが、世の中の人は誰も気がつきません。
- 推薦作**
- 「菅山女房」(吉木信子) 「季刊午前」47号
 - 「水の言葉ーかたわらでー」(山口馨) 「渤海」64号
 - 「日常」(森野いつき) 「サボテン通り」11号
 - 「谷川るいの場合」(吉田典子) 「サボテン通り」11号
 - 準推薦作
 - 「銀色のbullet」(銃弾) (おおくぼ系) 「九州文学」19号・通巻512号
 - 「白い騎」(天野律子) 「黄色い潜水艦」56号
 - 「彩雲」(伊東貴之) 「八月の群れ」55号
 - 「ともしび」(岩越孝治) 「百駱」20号
 - 「懐かしい月を抱いてー私の乳房再建」(藤原敦子) 「時空」37号
- (全国同人雑誌振興会 東谷貞夫)

●「じゅん文学」73号（愛知県）

「空地のまんなか」（猿渡由美子）は前作の「風の訪れ」とは趣きの異なる作風であり、現実と幻想との微妙な堺目を衝いていて、巧みに変貌しています。それぞれの家庭では、切実な家計や子供の教育あるいは人間関係などが険しい状況で蠢いています。いつ炸裂するかもしれぬ難問の最大公約数を抽出し、じっくり発酵させ、精妙な変容の味付けをすると、そこには小堺家の人々の日常が現れてくるのではないのでしょうか。

小堺家は智幸が戸主であり、妻の環とその母であるマリ



子そして長男の隼人の四人家族です。近くに真希とその娘の桜子が住んでいて、真希は環の前夫との間の娘です。智幸は環が離婚した後に婿として小堺家に入っています。マリ子は傘寿を前にしていたって元気で、マリ子と環それに真希とつづく親子の絆は堅固であり、智幸の入るスキはありません。智幸の勤めていた町工場は倒産し、真希の口利きで彼女と同じ衣料会社に入ります。倉庫の在庫管理ですが、倉庫は港近くの空地の真ん中に建っています。勤めはじめると、田中邦衛に似た幽霊に出くわします。幽霊か幻影かはわかりませんが、害を加えるわけでもなく、智幸は幽霊に話しかけていると、鬱屈した気分がガス抜きになり、また自分の意識においてなにか新しい芽生えを感じます。独り言を喋り、ちよっとおかしくなったのでは、という噂が流れますが、他の人には幽霊が見えないのです。智幸にとつての分身になっていて、身体に芯ができて不思議な磁場が形成されています。真希が心配して倉庫を覗き、環も顔を出し、マリ子は隼人と一緒にやってきます。女系家族の絆は智幸の求心力に惹きつけられ、智幸は田中邦衛に似た幽霊のお蔭でみずからの内面的な変容を遂げていたのです。家庭あるいは社会の暗喩とも解釈できるかもしれません。

「霸王樹」サボテン」（北原深雪）は艶のある流麗な基調であり、その清々しい響きには描写とか表現とかを超え

た魅力があります。理枝の九十三歳の父親が青森に出かけ、信州からの長旅ですが、母親のルーツの空気に触れたという想いです。母親は十歳のときに子守として信州の葡萄園で働き、辛苦を舐めつくし、歪な性格になり、周囲から嫌われていて、葬儀で涙を流したのは理枝の父親だけです。理枝の母親とは折り合いがつかず、父親は実家の葡萄園を離れてサボテン園を開き、母親は理枝の祖母を見返すために必死に働き、成功させます。理枝は母親と祖母との壮烈な確執を知り、また父親の青森行き理由がわかります。この書き手の文章は流麗に流れすぎるところがあります。起伏や曲折が浅く、そこが気になりますが、それを手直しすると、書き手の特質が失われる心配があり、難しいところでは。

●「文芸中部」91号（愛知県）

「それは石臼からはじまった」（朝岡明美）では、孤独な老婦人が道端やゴミ置き場に捨てられたガラクタを集めていて、その究極の病的な凄まじさが表現されています。本人は自分の好みで収集しているだけであり、隣近所の視線など気にしておらず、そこに友人のいない老婦人の魂の闇が顕れています。

小野木益子は税務署に務めていて、四十五歳で結婚しますが、相手は年下で二人の子供がいます。夫に女ができて離婚になり、住んでいた家は益子のものになります。預金

や退職金などを計算すると、老後の心配はなく、人生の設計図を描かずに気ままな生活です。ほとんどの家財道具は夫が持ち出しており、調理用具やテレビに冷蔵庫などはリサイクルショップで購入します。実家から貰った石臼は餅つきの楽しい思い出が刻まれていて、コレクションの第一号です。いつしか美しいものや必要なものを集めはじめ、次第にガラクタにも手を出します。十坪ほどの庭には、足の取れた椅子や壊れた旅行鞆また割れた花瓶にサドルのナイ自転車など、廃棄物の山になっています。石臼はガラクタに囲まれて探し出せません。弟が来て、庭の廃棄物を眺め、物欲に執着していると軽蔑します。益子にとつては物欲とは無縁の大切なコレクションであり、人生そのものなのです。世間の常識や近所の目は益子の視界から消えています。孤独といえば孤独、狂っているといえは確かに狂っています。平田という老人は木の根や流木を集め、壁掛けや花瓶敷きを作り、少しはお金になるようですが、益子は納得できず、純粋なコレクターという自負があります。猫を何十匹も飼っている年寄り婆さんがいて、猫屋敷と揶揄されていますが、その婆さんにも同調できません。

この書き手には何かを狙っているという気負いはなく、あくまで自然体であり、その地味ながらも卓越した技術には熟成された趣きがあります。

「地上十センチの水」（北川朱実）はホームレスという切

り口で社会の実相を抉っています。川島夫妻のひとり息子の順一が所在不明になり、ホームレスをしているという噂を掴み、人材派遣会社を通してホームレス経験者の話を聴きます。西山は半年ほど公園などで過ごし、親しくなった山さんに植物園の面白さを教わり、話の流れで川島夫妻を植物園に誘います。ヒマラヤスギやメタセコイヤまたスズカケノキなどの巨木の茂った枝の下で夜を過ごし、樹木の葉のざわめきは家庭や仕事だけが人生ではないということを示唆しています。川島夫妻にとっては画期的体験であり、仕事の重圧で姿を消した順一に対する見方に変化が見られます。横道にそれた人の存在が視野に入ってきたようです。

ストーリーの流れが巧みで、ホームレスのリアリテイは希薄ですが、面白く仕上がっています。利潤を追求する企業の重圧に敗れた順一の行方、社会の秩序から抜け落ちたホームレスの生活、そういう現実問題を超越したような植物園の巨木は人間社会を嘲笑っているかのように天に伸びています。家庭や仕事あるいは旅行に飲み会またスマホやネットなどは都会の幻影の象徴かもしれず、損得と利便性にこだわる社会の裏でそのような幻影が妖怪となつて蠢いていても不思議ではありません。幻影小説としても読めそうです。

●「峠」62号（愛知県）

て登場しています。

三河と尾張の中間に両国寺があり、女の駆け込み寺であつて、不幸な女の怨念や憤怒が渦巻いていて、人間の犠牲になつた生類も世を恨む悪霊となつて徘徊しています。両国寺の地下水脈は衣母城に繋がっており、衣母城の井戸の底には両国寺の怨念や悪霊が闇に蠢いていて、闇のエネルギーは臨界点に達しています。臨界点を突破すると、猛烈な波動が生じ、山は動き、川は逆流し、大地は壊滅します。災難除けの呪文が唱えられますが、凄まじい波動によって衣母城は崩れ落ち、家屋は倒れ、橋は落下し、村や町は廃墟になつてしまします。何百年も蓄積された闇の怨念に勝つて、天地異変が濃尾地方を襲つたのです。

濃尾地震を素材にした好奇心をそそる物語であり、この書き手の自在な想像力の翼はさらなる面白い幻想を創出してゆくでしょう。

●「季刊作家」78号（愛知県）

「時計の針が止まるとき」（佐藤たまき）では、川上孝介は東京の公園で浮浪者が可愛がついてたナツという猫に信州の木地師の里で出会い、その飼ひ主の屈折した人生が浮かび上がってきます。浮浪者は信造という腕のいい木地師でしたが、妻子を棄てて女と駆け落ちし、その後の消息は不明のまま、半年前にナツを連れて故郷に帰ってきます。捨てた娘に見守られて息を引き取ります。孝介は女との待

「孝子」（そのなごみ）は孝子という不思議な魅力を備えた女の人生を語ります。十歳代で子供がいて、世間の評判は悪いのですが、孝子には陳腐な常識を撥ね返す透明なバリアーに守られています。女手ひとつで三人の子供を育て、四十八歳で不慮の死を遂げますが、孝子の存在は周囲の人々に幸いをもたらしているようです。孝子の人格や考え方とは無関係な事柄であり、神秘的な事象でしょうか。書き手は描写とか表現などを気にせず、気負いのない姿勢は筋書きの妙をはずさず生み出しています。

「水鳥駅みどりのファンタジー」（原あやめ）は明治時代の半ばにタイムスリップして濃尾地震の秘密に迫るファンタジーです。僕と友人の鶴田は列車で各地を回るのが趣味で、今回はローカル線の旅を計画し、濃尾地震の震源地である岐阜の根尾谷断層に立ち寄り予定ですが、鶴田は都合で遅れるので、僕一人で水鳥駅から歩いてすぐの地震断層観察館を見学します。駅に降りると、昔の田舎の風景が広がっていて、観察館の建物は見えません。僕は何年か前に来たことがあり、異なつた景色に途惑うばかりです。そのとき、ハンサムな英国風の中年紳士に声をかけられ、トーカー映画に誘われます。林を抜けると、鹿鳴館時代を偲ばれる二階建ての瀟洒な洋館があり、地下の応接間で衣母城こもにまつわる映画が上映されます。明治二十四年の濃尾地震の真相に迫っていて、僕は夢の世界を浮遊するように小学生とし

ち合わせの場所に急いでいて、トンネルに差しかかると、ライトによってトンネルの闇の中に男の影が浮かび、その影は信造であり、アルミ缶を積んだ乳母車を曳いています。ナツに会いたければあの公園に来るがいい、そのとき時間は止まっている、と康介は話しかけます。

この書き手は堅実な文章で、輪郭線ははっきりしていますが、幻想風の状況の描写は苦手のようです。トンネルで信造の幻影が現れる場面では、もう少し曖昧で柔らかな雰囲気であればいっそう哀しげな情趣が生きていたでしょう。

●「遊民」6号（愛知県）

「杉浦民平さんの人と文学」（別所興一）は渥美半島出身で、東京帝国大学を卒業した杉浦民平を描いており、彼は大学を出ても就職口が見つからず、イタリヤ・ルネッサンスの研究に励みます。戦時体制に背を向けて故郷に帰り、地元に着した思想を育みます。敗戦後は共産党に入党し、また渥美町の町会議員を務め、政治活動が中心になつたようです。やがて共産党を離脱し、町会議員も辞め、日本の中世や江戸期の文学に取り組みます。「小説渡辺華山」は代表作であり、毎日出版文化賞を受賞します。政治体験が反映されていて、権力の悪魔性および謀略のメカニズムの巻き込まれた華山像を創り上げています。杉浦民平は地元で執筆活動をつづけ、その言動は「自主独立の野人とし

て好評を博した反面、晩年まで地域に多くの敵を持ち、非難の的になることもあった」ようです。

「怪人・唐九郎伝説」IV（稲垣喜代志）は「永仁の壺」事件で骨董界や美術界を騒がせた加藤唐九郎に焦点を絞っています。「永仁二年」の銘のある壺は鎌倉時代の黄瀬戸と認定され、重要文化財に指定されますが、唐九郎の贋作であることがわかり、重要文化財の指定は取り消され、唐九郎も人間国宝を剥奪されます。永仁の壺に関してさまざま言説がいまなお取り沙汰されているようです。今回は、唐九郎の出生から小学生時代を述べています。祖母のときは孫の唐九郎に陶芸家の家系の復興を期待しています。幼い頃より窯場に入り、土を捏ねて遊んでいて、その無邪気な姿に祖母のときは名人になる夢を投影していたようです。

●「R&W」12号（愛知県）

「壁の音」（霧閑忍）は、女遊びに明け暮れる独り暮らしの男の狐独死を都市伝説のひとつに昇華しており、あるいは還暦を過ぎた気ままな男の生き方を痛烈に揶揄しているとも受け取れます。男がマンションのドアを開けると、異様な腐敗臭に襲われ、吐き気を催し、壁や天井にも腐った臭いがこびりついているようです。ちょっと遊び相手になった漁師の妻が魚を発泡スチロールの箱で送ってききましたが、何日も台所に放り出したままだったので、腐敗して悪

●「文芸シャトル」75号（愛知県）

「本能寺の変・殺人事件（上）」（堀本広）は本能寺の変にまつわる物語です。京都山科区の行者ヶ森で間瀬耕一の撲殺死体が発見されます。一年前に京都歴史研究会に入り、現在は本能寺の変に取り組んでいて、その資料を風呂敷に包んで持ち出していました。現場には風呂敷包みは残されていません。妻の澄子は兄の内田茂とともに真相の究明に向かって京都歴史研究会の会員を訪ねます。会員は独自の視点で本能寺の変を取り上げることになっていきます。織田信長を殺したのは明智光秀というのが定説になっています。信長に軽んじられていた朝廷が光秀を利用したという説があり、豊臣秀吉の陰謀説もあって、澄子と内田茂は本能寺の変の解釈の多彩なヴァリエーションに驚かされます。九人の会員と面談しましたが、まったく見通しは立っていません。残り一人の会員の目下から、耕一の事件に関して思い当ることがあるという連絡が入ります。この作品には、澄子と内田茂の事件究明の行動および本能寺の変の真相という二本の線があり、それがどこで交錯するのか、次回が期待できます。

●「小説7」11号（埼玉県）

「ローレライ」（長嶋絹絵）の書き手は確固たる小説観の持ち主です。狙った対象の輪郭線が明瞭であり、情感に感わされぬ乾いた感覚であって、哀しいとか苦しいとかの感

臭を発散させているのです。男自身も、墮落した悪臭を撒き散らしているのかもしれない。窓を開け、テレビをつけ、そして腐った魚を処分するためのビニール袋を探している。電気コードが足に絡みつきます。本棚に手をかけたとき、重い本棚が男の方に倒れ、その下敷きになって気を失います。意識を回復すると、身動きできない男は隣の部屋との壁をノックします。コツコツコツ、という響きに何の反応もなく、やはり男は壁を叩きつづけ、永久運動のようです。

テレビでは「都市伝説」という番組をしていて、男は見ただことのある顔に気づき、マンションの一階のコンビニの女が金髪に染めているのです。六ヶ月前、あまりにも悪臭で住人が騒ぎ、男の死体が発見され、ミイラ状態になっています。悪臭の元凶は腐敗した魚でした、という話をしていいます。俺のことではないか、と男は思いますが、声は出せず、ひたすら壁を叩きます。

男は本棚の下敷きになって首筋を強打し、即死して、男の身体から離脱した意識がテレビを見ていたので、死体が処理されてからも男は壁に合図を送りつづけており、浮遊する意識の仕業です。この書き手は気ままな発想に遊んでいて、隣近所の顔色を気にしない姿勢がよく、奇抜な物語を書きつづけると、文章表現にも神経が行き届き、この書き手の独自の世界が表れてくるでしょう。



傷的な言葉を排除しています。奔放な情念のうねりなどは避け、しかし冷淡な基調ではなく、書き手の独自の美意識と形式美が顕れています。

服飾デザイナーの東子（とうこ）は年下の画学生の立野健太と知り合います。立野はひたすら絵に没頭していますが、卒業しても居酒屋のアルバイトをしていて、見通しは立っていません。東子は自分のマンションに誘い、一緒に住みはじめます。絵画論を語り合わないのは賢明な配慮でしょう。個展を開くと、意外に注目され、彼女は仕事を辞め、マネージャー役になります。杳香という新しいモデルを見つけると、その絵が評判になります。杳香は大学生になったばかりで、アユのように艶やかな肌であり、立野の態度は微妙に変化し、東子との間に隙間風が生じます。やがて立野は

マンションを出てゆきますが、男と女の修羅場はまったく描かれていません。立野が荷作りしている様子は特別に意匠を凝らしているわけではなく、そのありふれた描写には東子の凄まじい内面の葛藤が隠されていて、読み手にそのように感じ取らせるところは書き手の技術でしょうか。

立野が去って三カ月後、東子は海老名に移った彼の住まいを訪れ、彼を相模川を遡上した若アユに魅せられた男に見立てます。杳香をモデルにして新しい境地を切り開いている気配です。帰り道、天然アユありますという貼紙の食堂を見つけ、写メールで立野に送ります。海老名駅でローレライの着信音が鳴り、ローレライは立野がダウンロードしたものであり、東子の心の奥底の暗い渦巻きはどのように変容してゆくのでしょうか。二人の情念の荒波は表情や動作で暗示されていて、その技術はあえて茨の道を突き進んでいます。

●「海」86号(三重県)

「どうのみね(紺谷猛)」は三十枚に満たない作品ですが、巧みな意匠によるすばらしい仕上げになっていて、熟練の職人芸でしょうか。成瀬由紀子は製薬会社に勤める夫と二人の子供がいて、近くの薬局でアルバイトをしており、経済的に恵まれています。このところ夫の様子がいつもと違っていて、浮気をしている気配はないのですが、どうも隠し事があるようです。由紀子は夫の言動に神経質になり

ます。由紀子は気分転換に奈良の多武峰たぶのみねの談山神社に出かけます。二ヶ月ほど経つと、夫の周囲から妙な雰囲気が消え、由紀子は穏やかな日常に戻ります。夫は部下の女性の結婚式に出席しますが、その女性を祝福する気配は見えません。夫の妙な素振りはその原因があると由紀子は見抜きます。夫はしかしなかなか気分は晴れないようですが、由紀子とはつくにその迷いから覚めています。

夫の妖しげな気配を感じた由紀子の心の動きを精妙に描いており、夫に問い詰めると、詰まらぬ夫婦喧嘩になっているはずで、それを避けたところにこの書き手の深い配慮がうかがえます。

「養老」(遠藤昭己)は端正な文章であり、細かいアクセントをつけて上手く構成されています。二十年振りに会う男と女の意識の落差がしみじみと伝わってきます。

藤川幸恵は四十歳を過ぎ、田舎で母との二人暮らしです。昔の上司の黒崎から養老の滝への案内を頼まれます。二十年振りの再会ですが、プロポーズされた経緯があります。黒崎は十歳ほど年上で、小学生の息子を連れていて、災害で家族を失っており、恵まれた環境ではありません。昔と変わっていないね、といわれても、黒崎への関心はなく、むしろ黒崎の女を見る目の幼稚さを感じ取ります。幸恵は大地に根を生やしており、黒崎はいささか根無し草の印象です。滝を見学すると、ダムにまわり、そのダムの水

面下に幸恵の故郷が沈んでいます。彼女は現実と過去とを明晰に識別しています。黒崎とその息子を駅に送りますが、そのとき母親へのお土産の「養老の水」を買い忘れたことに気づきます。この最後の場面は書き手の狙いの象徴でしょうか。

●「流域」70号(京都府)

「一八七〇年代のマネとゾラ——書簡を中心とする交友について」(吉田典子)はマネとゾラの交流についての考察です。エドゥアール・マネは「草上の昼食」や「オランピア」でスキャンダルの餌食になっていて、エミール・ゾラは窮地に立つマネを擁護します。一八六六年五月のことです。マネはゾラよりも八歳年上ですが、急速に親しくなり、その友情の記念に「エミール・ゾラの肖像」を描いて、サロンに出品しています。六十年代の後半になると、モンマルトルのクリシー広場の近くのカフェ・ゲルボアがマネおよび彼の周辺の画家や批評家の溜り場になり、モネやルノワールまたファンタン・ラトゥールなどが顔を出しています。普仏戦争によってマネのグループは離散し、その当時の画家や芸術家はやがてピギャール広場の周辺のカフェに移って行ったようです。

七十年代の後半になると、マネとゾラの関係に亀裂が走り、ゾラはもはや印象派の革新性を評価できなくなった、という見解が広まります。これは通説になります。この書

き手はそのような通説に異議を唱えています。六十六年から八十二年にかけてのマネからゾラへの手紙は五十通が確認されており、さらに七十九年にはマネはゾラ夫人の肖像をパステルで描いていて、マネとゾラおよびゾラと印象派との断絶はありえないのではないか、ということ。一般的な通説にどこまで対抗できるか、この書き手の辛いところ。です。

●「MON」創刊号(大阪府)

「小川」(浅井梨恵子)には不可思議な感性が織り込まれており、幻視の世界に誘惑します。美咲は三十路を過ぎて独身であり、同僚に同じ年頃の既婚の香苗がいて、恋人の祐司に香苗のことを軽く話しており、いつしか無意識に美咲は香苗と祐司を結びつけ、その二人との間に迷妄の深淵が介在しています。美咲のロッカーは窓のそばにあり、小川が見下ろせ、その土手に八重桜が咲いていて、桜の風景を祐司に写メールします。ある日、ロッカー室に入ると、窓がなくなっており、その一面は壁になっています。香苗に訊ねると、ロッカー室の窓などまったく知らないという返事です。香苗が小川まで埋めてしまったと勘繰り、さらに祐司に送った八重桜の写真も見つかりません。会社の裏手に回って確かめますが、小川や八重桜の形跡は見当たりません。香苗と祐司の企みのような気がします。祐司との食事の後、わざわざ会社の裏手に行くと、小川が流れ、土

手に八重桜が咲いています。祐司にも桜と土手が見えるのは納得できません。この書き手は祐司と香苗との関係を妄想する美咲を描いており、明らかに矛盾しています。美咲の意識の迷路に非現実な情景が映りますが、香苗は空想とは縁のない現実的な生き方で、ちょっと精神的に不安定な美咲との対比において、効果的な脇役を演じています。暗い霧の中を浮遊しているような印象です。

●「ばさーじゅ」27号（大阪府）

「春を待ちながら——三」（宇野勝之）は文章の流れに優雅な趣きが融け込んでいます。書き手と私（ファビアン）あるいはセリーヌとの距離は冷智に設定されていて、私やセリーヌの内面は独立しており、書き手の思惑で乱れるということはないようです。私とセリーヌおよび私とマリイの関係は微妙な色彩を帯びていますが、そこをどのように展開してゆくのか、書き手の技倆の間われるところですね。

「今は夢中（二） 旅する女」（豊田マユミ）はモロッコ紀行ですが、言葉が弾けて踊っていて、その快い響きには感性の煌めきが表れています。

「滴に酔う時」（二）（冬樹真沙）は城野の経営する喫茶店の人間模様が描かれています。古い町屋を改装して、京情緒の漂う雰囲気です。城野はスマホやネットにあまり興味はなく、時代の風潮には鈍感なところがあ、それが彼の魅力になっているのでしょうか。別れた妻が気がかりであ

り、また学生アルバイトの麻里乃に好意を持たれていて、どのような険しい曲折が表れるのか、楽しみです。

●「播火」84号（兵庫県）

「闇の湖、光のハーブ——前編」（山田正春）はカンボジアを舞台とするサスペンスの香りが漂っています。書き手の構想力が飛躍すると、歴史を織り込んだ壮大なロマンに化けるかもしれません。

俊と亜衣子の夫婦は娘の亜梨を連れてカンボジア旅行を楽しんでいます。俊は主に中近東などの紛争地域を駆け巡るカメラマンであり、亜衣子は国境なき医師団のボランティアの看護師であって、二人が知り合ったのはイラクです。カンボジアの中央部にトンレサップ湖があり、琵琶湖の十倍以上の広さで、そこでは百万人以上の人が水上の粗末なブラックや朽ち果てた木造船などで暮らしています。シエムリアップの町はその湖から十キロほど北にあり、日本人の千歩がハーブ園を経営しており、俊夫妻が見学していると、トレンサップ湖畔で二人の変死体が発見された、というニュースが流れます。俊にジョージから連絡が入り、ジョージはイラクやアフガニスタンで共同戦線を張って取材した仲間です。残酷なポルポト政権は崩壊していますが、その中枢にいた残党はいまだに活動していて、変死体はその仲間のようです。ジョージはこの事件の究明に俊の協力を求めます。一旦は断るものの、国際紛争の修羅場

を経験している妻の亜衣子の後押しで、俊は夜のトレンサップ湖に向かいます。

●「たまゆら」88号（滋賀県）

「長安の振り——第三章（三）」（梅本修一郎）では、自在な筆捌きで現実と幻想の識別などは無意味になっていきます。神仙界と人間界を気ままに浮遊するという趣きであり、文学の在り方などは下司の戯れになっています。

姚芳は子供が授からないのを気に病み、祠堂の神詣に出かけます。人家が少なく、竹藪が多く、都城内とは思えぬ寂しい地域です。そこで無頼漢に襲われ、護身用の短刀で自害します。城外の墓地に埋葬すると、私は喪服を着て家と墓地の往復を繰り返すばかりで、魂の抜けた状態です。墓地で姚芳の幻に出会い、また書斎にも現れ、宮廷風の袖の長い衣裳で美しく気品を湛えていて、私の未来を語りま

●「芸文学」81号（広島県）

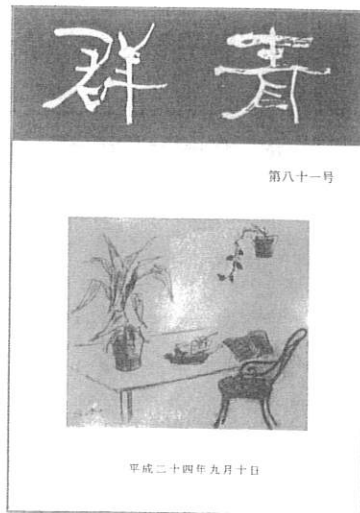
「斑猫」（藤井翠）では、白とベージュの混ざった猫がうまく活用されています。尾道の骨董屋「潮香堂」の店の中

を見知らぬ老人が覗くようになり、いつも足元には猫がいて、ヨシエは気になっていきます。店の奥の掛け軸を眺め、手毬にじゃれつく二匹の猫が描かれていて、俺の家の客間の襖絵だ、と老人は呟きます。主人の洋介によると、平田玉蘊という女絵描きの作品です。その当時の尾道は北前船が寄港し、繁栄しており、文人墨客が訪れ、大いに賑わっていました。頼山陽との縁談もあったということです。ヨシエは玉蘊の墓参りに出かけますが、店でよく見かける猫がヨシエの前を歩き、道案内の役割を果たします。境内から尾道の海を眺めていると、和服に薄紫のショールをかけた女性に出会い、彼女は懐かしそうに、

「昔はこの辺りにも鶴が飛んできて……港には何艘もの帆かけ船が浮かび、荷物を運ぶ男衆の掛け声が風に乗って聞こえてきたものです」

そのとき、強い風にヨシエの帽子が飛ばされ、拾って振り返ると、その女性の姿は消えています。その帰り道、老人を見かけ、老人は尾道を離れるということを伝えます。その後、白とベージュの猫は潮香堂の店先に端然として座っています。

この作品には書き込み不足のところがあり、たとえば玉蘊の幻をもっと成熟させると、妖しい雰囲気は漂い、現在と玉蘊の時代とが交錯して面白くなったのではないのでしょうか。



●「群青」81号（東京都）

「十のアリア（九）『私の名はミミ』——大西麗 四十五歳」（渡邊裕子）はブッチーニの「ラ・ボエーム」がテーマになっていて、オペラという分野に自在に取り組める書き手は稀であり、異色の存在でしょう。大西麗は音楽大学の後輩の白瀬美々を教えています。「ラ・ボエーム」に可哀相なお針子のミミが登場し、肺病で若くして死にます。大学芸術祭で美々はミミのアリアを歌いますが、その後には白血病で亡くなります。同じ頃、麗はベルディの「椿姫」のヴィオレッタを演じていて、ヴィオレッタも肺病です。ミミおよびヴィオレッタの肺病に美々の白血病を重ね、充分な人生を歩めなかつた女の哀しみを投影しているのでしょうか。

●「南風」32号（福岡県）

も琴子に何事も依存しています。琴子はちづるの青写真を断るつもりですが、龍雄は明白な姿勢が取れず、父と娘の葛藤にうろたえています。

「台風」（宮脇永子）では、平成三年の台風によって百年前の屋敷が被害を受け、建て替え工事がはじまり、床下から白骨死体が発見されます。佐賀県鳥栖市の鶴亀屋は配置売業で資産を築きますが、太平洋戦争の敗戦前に廃業します。後継ぎになるべき息子が亡くなったからであり、戦後は広大な屋敷に長女の菊子は数少ない使用人とのんびり暮らしています。台風で相当な損傷を受けたとき、昔の栄華は失われています。菊子は戦前からの下女の民子との侘しい生活です。お嬢さん氣質が抜けず、菊子は資産を食い潰しており、民子は畑仕事に精を出し、また近隣のポランテアをしていて、知り合いも多いようです。床下の白骨死体は菊子の婚養子の徳治であり、菊子には情を通じた古川登がいて、登が菊子の意を汲んで埋めたわけです。徳治は家の金を持ち出して女と逃げた、ということに収まっています。民子は古川登と再会していて、菊子の秘密を知らされ、金に困った登から強請られています。民子にとっては菊子の鶴田家には恩があり、菊子の犯罪を公にはできません。二人とも八十歳を越えており、凋落してゆく鶴田家とともに歩んでいて、菊子および民子の女の一生としても読めそうです。ストーリーの盛り上がりにはちょっと難がある

「弓子の挑戦」（渡邊弘子）は歯切れがよく、リズム感に溢れていて、爽やかな印象です。マンションを購入して古い家から解放される、という七十歳を越えた浜本弓子の喜びが素直に表れています。年上の夫は難病のパーキンソン病で、風呂には一人で入れず、週に二日ずつデイケアとデイサービスを受けています。夫は不便でも馴染んだ家から離れることに難色を示しますが、不動産屋との交渉や役所への提出書類の作成など、弓子は一人で扱えます。気合いで夫の不満を抑えたところでしょうか。心の影の追求だけが小説ではなく、古希を過ぎた女の夢も充分に新しい地平を切り開きます。

「洗面台」（和田信子）では、洗面台の水漏れを契機にして、ちよつとボケて頑固な龍雄と龍雄の弟ですでに亡くなった洋平の嫁の琴子との厄介な関係が描かれています。龍雄は知り合いに修理を依頼しますが、古い洗面台なので部品がなく、今度はホームセンターに当たります。金額の折り合いがつかず、相当にもめます。琴子は亡き夫の兄なので辛抱強く龍雄の面倒を見ていて、しかし洋平と比べると、龍雄の欠点ばかりが目につきます。そこに龍雄の娘のちづるが夫婦でやってきて、家を改築して夫の運転代行の事務所にしたいと相談しますが、龍雄名義の地所や資産はいずれ自分達のものになるという魂胆が丸見えです。龍雄は優柔不断で、将来の設計図を描けず、意地っ張りでありながら

りますが、時代の流れに取り残された二人の女の悲哀が滲んでいます。

●「鉄道林」52号（北海道）

「鉄道狂時代」（柴田耕平）には鉄道への愛着が滲み出ています。書き手はJRの技術者であって、革の半長靴は出世しないと履けず、その半長靴に憧れて仕事に励み、月給の半分で手に入れて喜ぶところなど、誠実なひたむきさを感じます。

新橋と横浜を結ぶ鉄道は明治三年に着工され、人夫は別にして作業監視役は羽織袴に脇差しをしていたということ。明治五年九月に開通し、車両はイギリス製で運転手もイギリス人です。天皇が臨席し、新橋周辺は群衆で大混雑でした。田町付近から品川までは海岸沿いに堅固な堤を築き、そこに線路が敷かれていて、品川駅の下は海水が波打っています。鉄道建設は急速に進み、線路は田畑を横切り、山裾を通り、産業振興の輸送機関として発展します。また鉄道は災難や疫病をもたらす魔物のように思われてもいました。那須塩原で外人技師が測量をしていると、近くの村の名主が長老とともに振り袖姿の娘を連れてやってきます。この娘を献上するので、鉄道は村から離れたところに変更して欲しい、という意味です。各地でも似たような事例があったようです。さまざまエピソードに触れていますが、構成に乱れがあり、そこが気になります。

●「カブリチオ」38号（東京都）

「いくたびの、昭和幻燈館」（塚田吉昭）は精神の蜃気楼の遺跡です。戦後の混乱期にアブク銭を手にした男が日本海側の海辺の廃れた町にヨオロッパのシャトーを連想させる娯楽の…殿堂を建てます。洒落た外装に贅沢な舞台そして寛げるバーもあって、最先端の文化の芳醇な香りに満ちています。しかし交通不便な僻地に人気のある歌手や芸能人は見向きもせず、旅廻りの一座あるいは食いはぐれたストリップパーなどが出演していて、客席はまばらで赤字が膨らみます。住人は町を離れ、駅前 の路地奥に飲み屋と雑貨店がひっそりと残っているだけです。劇場主は夢破れて亡くなります。劇場主の遠縁に当たるアキイチが現状の確認にやってくる、屋根裏に仮面を付けた男がいて、飲み屋では哲学者といわれています。漆黒の宇宙を眺め、存在と時間に想いを巡らし、現実はずべて心象風景にしかすぎぬ、と嘯きます。劇場は壁が落ち、雨漏りがあり、いささか気味の悪い雰囲気であって、確かに懐かしい幻影に出会い、奇怪な事象に遭遇しても不思議ではありません。かつてレスビアンショーに出ている年増女と若い娘が戻ってきて、屋根裏の哲学者は高邁な思想を棄てて女達と酒を飲み、そこにアキイチの妻が登場します。年増女とは昔の仲間、二人はジュリアアナ東京のお立ち台で羽つき扇子を妖しくそよがせ、男どもの魂を狂わせていたようです。朽ち

のハリム空港のロビーで若い日本人から手荷物の運搬を頼まれますが、断ります。ジャカルタを飛び立つと、どうも監視されている気配で、部下の笠原君も同じ感触です。メナドに着くなり、取調室に連行され、丸裸にまでされる厳しい尋問を受けます。理不尽な拘束に怒り心頭です。やがて将校が来て、一枚のポスターを机に置くと、その写真の一人が笠原君にそっくりです。日本赤軍のポスターであり、インドネシアに潜伏している日本赤軍と間違われたわけです。将校は失礼を詫び、外で将校を挟んで私と笠原君の記念写真を撮ります。その夜、ホテルのロビーのソファの私と笠原君に二人の美人が近づき、ハルトノさんのご依頼で今夜は一緒に過ごす、ということ。ソファでの記念写真を撮りますが、ハルトノさんとは連絡が取れず、



果てている昭和幻燈館を華やかに蘇らすためにジュリアナ東京の煌びやかな夜が再現されます。ピンクやブルーの光線が舞い、音楽のリズムが場内の床や壁を揺り動かし、万華鏡の色彩乱舞の世界がはじまります。

書き出しは崇高な怪奇物語の兆しがあったものの、締め括りがジュリアナ東京の舞台では、その落差は大きく、地上を離れた幻想の祭典を創出して欲しかったところ。●「カオス」19号（東京都）

「銚子の海と人たち」（城邦子）は銚子の周辺を巡る紀行文ですが、感性の豊かな戯れがうかがえます。女の一泊二日の独り旅であり、外川から犬吠埼灯台まで太平洋を眺めながら歩き、リュックの双眼鏡で遠くの景色に親しみます。黒生（くるはせ）港で民宿の親父と出会い、その辺りの描写は小説の断片です。

●「私人」76号（東京都）
「日本赤軍爆破事件余波」（柴しげる）は文意明達の芯のある作品です。小説ともエッセイとも受け取れますが、筋立てはうまく流れていて、構成も整っています。二十年以上前、私は自動車修理部品会社のインドネシア駐在員であり、その頃の取引先のハルトノさんが来日することになります。古いアルバムを開き、昔の記憶を整理していると、奇怪な体験に触れた二枚の写真を見つめます。一九八六年三月、スラウエシ島のメナドに仕事があつて、ジャカルタ

成り行きにまかせます。翌朝、国際ホテルを根城にする高級娼婦とわかり、ハルトノさんとは全く無関係で、ホテルの従業員が泊まり客の情報を流しているようです。二枚の写真を見つめると、メナドでの珍事が懐かし、笠原君も呼んでハルトノさんを囲む予定です。

この書き手は自分のスタイルを見出していて、引き出しには稀有な題材が隠されており、今後も興味をそそる作品が現れてくるでしょう。

●「北」58号（東京都）
「立神様」（寺本五郎）は素直な筆遣いであり、戦前および戦後の枕崎の町の変遷の断面を冷静に描いています。堅実な書き方であり、明瞭な描写になっていますが、曖昧な雰囲気嫌っているのか、ちょっと文章の余韻が希薄になっています。

昭和二十四年、三浦隼人は台湾から引揚げてきて三年になり、小学校の教師ですが、酒瀬川勝利と再会します。中学生のとき、一時的に枕崎に帰っていて、勝利とは二十年前ぶりです。勝利は戦場の傷で左足を引き摺っており、大空襲によって焼け野原になった枕崎の町の悲惨な姿を語りまします。さらに敗戦の翌月の枕崎台風の猛威は焼け残った家屋を瓦礫にし、住民は悪夢と絶望に打ちひしがれていたという事です。隼人は引揚げ者住宅に住み、配給品の採め事、でんざりしていましたが、空襲と台風の状況を知ると、

運がよかったと感じます。やがて枕崎は復興の気運に燃え、漁港が整備され、町並みも整い、町から市へと昇格します。沖合に人の姿をした奇岩「立神様」があり、空襲の難を逃れていて、出漁するとき、漁師はその岩に安全と豊漁を祈願しています。この書き手は確かに文章のコツを掴んでいますが、感情の起伏や筋書きの曲折などは苦手なようであり、そこをうまく処理できると、もっと奥行きが出てくるでしょう。

●「文芸事始」30号（東京都）

「エール」（山田修治）は幻視小説といってもよさそうです。根子野は五十歳代の半ばでボロアパートの四畳半に住み、工場の床掃除のアルバイトをしています。学生アルバイトの滝沢朋美と知り合い、妙にウマが合って幾度も赤提灯の暖簾をくぐります。クリスマス・イブ、根子野のアパートで、二人はコンビニ弁当で祝杯を挙げ、落ちこぼれのおっさんと世間からずれた女学生です。男と女の関係ではなく、幻視の妖しい香りに酔っています。彼は箱を開けて縄土器の破片を取り出すと、朋美は興味深く手に取ります。彼は昔の土器や石器に憧れていて、学生仲間の座標軸に馴染めぬ朋美は根子野の収集品に惹かれます。年明けの商店街で朋美は根子野を見かけ、声をかけて手を振っても彼は気づきません。商店街を出て農道を横切り、星明りの畑に入ると、根子野は星空に両手をかざし、胡坐を組んで

座り込みます。お酒を飲んでいるようで、誰かに笑いかけてもいて、さらに女を抱き寄せているような気配です。朋美は栗林の蔭から根子野の奇妙な振る舞いを観察し、ちょっと星空を眺め、ふたたび彼に視線を戻すと、獣の皮を身にまとった古代人が焚き火を囲んで酒を酌み交わしています。根子野は気に入った女と踊っています。焚き火が消えると、縄文の宴は消滅し、根子野は名残り惜しうに畑を離れ、実際、朋美に縄文の宴が見えること自体が彼女の異様な心の奥を表出しているのでしょうか。

数日後、根子野の凍死体が畑で発見され、焼酎の空瓶がそばに転がっていたそうです。警察の霊安室で朋美は根子野に対面し、彼は安らかな笑顔を浮かべています。まっとうに生きろ、というメッセージのようです。根子野の死によって朋美は現実社会に還るという構図でしょうか。

●「孤帆」18号（神奈川県）

「パーティー」（北村順子）は、結婚寸前までいった二人が二十年ぶりに再会し、流れていった時間をしっかり受け止める話です。より子の年上の友人の哲子は三十年間も別居していた夫と同居することになり、その内輪のパーティーに招待されます。哲子の表情は年齢を越えた喜びに溢れています。そこでより子は村瀬に出会います。翌日、より子は村瀬の誘いで岬の灯台までドライブします。入り江の先の白い灯台は四角の建物であり、その意外性に驚きま

す。突然、横殴りの激しい雨に見舞われ、慌てて車に戻りますが、村瀬の後姿には離れていた時間が刻印されているのに気づきます。村瀬とは和やかな距離があり、今後は一人でも生きてゆける、という実感をより子は強く感じます。時の流れによって見えていたものがどこかに消え、あるいは見えていなかったものの姿が浮き上がってきて、いわば時間には心の浄化作用の機能もあるのかもしれない。

●「狐火」17号（埼玉県）

「オルゴール」（志野木保子）の的確な表現は書き手の意図を正確に反映していて、しかも幽かな情感も融け込んでおり、冷静な筆遣いでありながらも不可思議な温もりが感じ取れます。智美は定年になり、実家の離れに住んでいて、甥の信之のスナックを手伝っています。最近、気になのは母の遺品のオルゴールであり、鎌倉彫りが施されていて、鍵のかかったままで、母の秘密の予感がします。腹違いの兄に相談すると、遠慮がちにお前の気持ち次第という返事です。庭石の上に置き、金槌で叩くと、木片が飛び散ります。母は笹尾先生に惹かれていたので、二人の記念品があるような気がしており、父と母の写真とは意外でした。父と母の過去を封印するために鍵をかけたのでしょうか。オルゴールは笹尾先生の贈り物ではないかと思ひ巡らします。

昔馴染みの山西君、母が想いを寄せていた笹尾先生、さ

●推薦作

「それは石臼から始まった」（朝岡明美／「文芸中部」91号）

「とうにみね」（紺谷猛／「海」86号）

「台風」（宮脇永子／「南風」32号）

「ローレライ」（長嶋絹絵／「小説π」11号）

「空地のまんなか」（猿渡由美子／「じゅん文学」73号）

●準推薦作

「本能寺の変・殺人事件（上）」（堀本広／「文芸シャトル」75号）

「養老」（遠藤昭己／「海」86号）

「洗面台」（和田信子／「南風」32号）

「いくたびの、昭和幻燈館」（塚田吉昭／「カブリチオ」38号）

「パーティー」（北村順子／「孤帆」18号）

「霸王樹／サボテン」（北原深雪／「じゅん文学」73号）

「オルゴール」（志野木保子／「狐火」17号）

「十のアリア（九）私の名はミミ」（大西麗 四十五歳）

（渡邊裕子／「群青」81号）

（全国同人雑誌振興会／東谷貞夫）

●「長崎文学」71号(長崎県)

「黄金蝶事件」(江口宣)は宇宙からやってきた蝶を題材にし、書き手の豊かな構想力が飛翔して



第71号 長崎文学の会 2012年11月15日 発行

るつもりです。女子の茶の湯は明治時代に普及し

●「あるかいど」48号(大阪府)

「二対」(小島千佳)は別れた男に未練を持ちつ

私は四十歳に手が届き、独り住みです。会社の帰り、自分のマンションの近くにトクン音の

最後の場面で二匹の猫がベンチで仲良くじゃれ

であって、その不可解な現象は誰も説明できません

●「飛行船」12号(徳島県)

「なんまいだ心中」(佐滝幻太)は野沢菊男の人生

そのほかに亀谷美子の「シューベルトの子守唄

●「野火」29号(兵庫県)

「緑陰の人」(水嶋元)の書き手は非常に捌け

筋書きとしてはいささか跳んでいて、書き手

巡礼姿で悪兵の追及を逃れます。戦後は脱走兵と

●「水羊羹と青い風」(竹内菊世)

および物流や人の往来の変化など社会状況の進化

●「石菫」(石川好子)

ハラの問題と主人公の弘子の厄介な家庭事情を重

●「暗渠」(近藤重郎)

た旨みが沁み渡っている印象です。

に翔子を取り巻く厄介事の対処法を教え、さらに弁護士などに相談して遺産処理の手筈を整えています。故人の遺志という言葉が有効だったようです。病床の母親は若い頃の男との苦学話を洩らし、死を前にして語るのはよほどのことでしょう。母親を苦しめた語はまだ生きていて、その消息が翔子の耳に届きます。厄介なことに巻き込まれる心配です。ゆったりとした流れの中に世の中の表裏が織り込まれていて、この書き手の不思議な魅力になっていきます。

●「劇」7号（愛知県）

「曲がり角の先」（朝岡明美）は軽妙なタッチで、読み手を惹き込む洒落た味があります。総務部で経理の桂木萌子は四十歳に手の届くところですが、二十歳代後半の中川君に惹かれています。彼とは通勤が同じ路線で、言葉交わすようになり、裏表のないさっぱりとした性格です。やがて中川君は萌子の近くに引越してきて、週末には二人で鍋を囲みます。萌子に東京への転勤話が出る、歳の差もあって、彼女は悩みます。彼の真意がわからぬままです。萌子はたとえ曲がりの角に佇み、その先の景色が見えないようです。この書き手にはわざとらしさがなく、信頼できますが、今回はちょっと若づくりになっています。

●「R&W」13号（愛知県）

「迷羊」（渡辺勝彦）は、大学生の小川三四郎が東北大地震の被災地にボランティアとして出かけ、明治二十九年六月の東北大津波の時代に迷い込むという奇想天外な物語です。小川は石巻で同年齢の佐々木と六十歳ぐらいの白い髭の画家の広田に出会い、釜石に向かいます。海岸沿いは家も建物

もなく、漁船が廃墟に横倒しになっていて、悲惨な状況です。 TENTを張り、灯りはランタンとヘッドランプ。強い余震に襲われ、明りは消え、暗闇になり、ヘッドランプが灯ると、TENTは食器やテーブルも見えず、古い天井と土壁そして板張りの小屋になっています。壁の新聞には日清戦争の戦勝記事が載っています。書き手の構想力は魅力的であり、構成も堅実であって、巧みなストーリーの流れに誘い込まれます。地元の実業家の娘の美称も時空を超えて釜石の人になっているのです。美称の時代は、日本の原爆が崩壊し、国上は放射能で汚染され、人口の半分は海外に移住しているという状況です。美称は数日後に襲ってくる大津波に人智を超えた超能力を発揮して悪魔の黒い波に立ち向かい、時空の狭間で小川とともに「ストレイシブ」となって歴史を変える決意です。この辺りは観念的な緻密さが不足しており、書き手の狙いに無理があるようです。

●「薔」92号（愛知県）

伊造は怠け者で、田畑の手入れはせず、いつも町で遊んでいます。代官所の手代に唆され、新米を渡すことになりました。新米は年貢を納めるまで村から運び出せません。清吉は主人の利兵衛と相談し、代官所の手代の企みを暴きます。伊造は性根を入れ替え、家族と一緒に田畑を耕します。後半になると、内容にちよつと詰込み過ぎている気配であり、ゆつたりとした趣きが失われています。このような書き手が同人誌を支えているのでしよう。

●「薔」50号（福岡県）

三人のボランティアは無事に現代に戻り、絵描きの広田は「東北の瞬間と永遠」という美術展に女の横顔を展示します。東北のジャンス・ゲルクというタイトルであり、美称の面影を宿している、その絵を眺める女性は美称の生まれ変わりのようであり、小さく「ストレイシブ」と呟きます。新たな事件の予兆かもしれません。

「想像力の行く手は阻めない」（川村道行）はコロラドスプリングからの手紙ではじまります。カズオ・ハヤシが事故で亡くなったという知らせです。林和雄には心当たりがあり、学生時代、北アルプスの白樺の高原のリゾートホテルでウェイターのアルバイトをしていたときに知り合っています。彼は星空に興味をもち、天体望遠鏡で星座を眺めていて、僕も果てしない宇宙を覗き、とくに土星のリングの美しさに感動します。漆黒の宇宙は静寂そのものであり、音や光は余計な異物です。また彼はかつて奇妙なアルバイトをしており、高級料亭の庭を眺めながら老人の昔話に付き合っていたのです。ときに相手を打ち、ときに微笑み、老人の話しやすい雰囲気を作ります。子供の頃、母を失った老人は養育係に付き添われて、信州の別荘でしばらく過ごします。子犬を拾って育てていて、それから先の林和雄の話は聞き洩らして



表紙：岡村道行「八景」

「青い狐」（吉村まど）のプロローグは意味ありげで読み手の好奇心を掻き立てています。私が運河に架かる橋に佇んでいると、橋の向こうから年老いた老人が現れ、橋の向こうに何があるの？と尋ねると、私をそつと抱きしめ、「カミサマだよ」と呟き、運河に身を投げ出します。

熊子は七十歳代で高級老人ホーム「エデンの園」で呆け防止の算数の問題をやらされていて、人間性を向上させるカリキュラムにうんざりしています。熊子は老人ホームを抜け出し、田舎にある屋敷に戻りますが、荒れ放題になっています。翌日、雑木林に分け入り、トタン葺きの小さな祠を見つけ、その近くに鳥の死骸が転がっていて、ひと休みしていると、間に蔽われます。息子や娘また老人ホームの職員も登場して熊子の悪口をまくらしてきています。意識を取り戻した熊子の前に青い狐が出てきて、熊子はその狐の道案内で山の奥に踏み込んでゆきます。幻想への旅立ちですが、書き手の持ち味が上手に発揮されているようです。

●「風土」12号（高知県）

「やまあいの風」（宮地たえこ）は堅実で正確な筆遣いであり、そこには清らかな小川のせせらぎのような透明感が見出せます。妙な情感に訴える甘さはなく、あくまで言葉による研ぎ澄まされた

一度も会っておらず、彼にこだわるのは奇妙な現象であり、得体の知れぬ磁場に魅了されているのかも知れません。僕は聞き洩らした話の続きを想い描きます。老人は子犬と自分の遊んでいる様子を描き、そこに母親も描き加えます。父親に送ると、東京の屋敷で飼つてもよいという連絡が入り、大人になるまで子犬を大切にします。母親の形見の象徴でしょうか。

●「ゆん文学」74号（愛知県）

「脱皮する虫」（堀田明日香）は上品な感性と言葉の舞踊とが巧妙に融け込み、散文による緊張感を演出しています。「好き・嫌い」とか「ウソ・ホント」などの言葉がその意味の裏表を自在に行き来しており、男が「ウソ」という言葉を投げかけると、女は「ホント」に転換し、精妙な手品の世界です。

大学生の由香と友人の伊藤崇は言葉の神秘的な森を歩いていて、その謎めいた散策に由香の祖父も加わり、迷彩色の風景に交響します。詩的な感覚が弾けて跳んでいる文章を削り上げており、書き手の特異な手腕が表れています。

●「土下座」町人清吉の村奉公（二）大倉克己

はまるやかな味わいのある文章であり、村人の生活および庄屋と小作人との関係などに触れていて、書き手の温かな筆遣いがうかがえます。小作人の

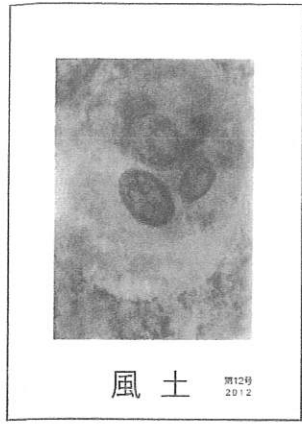
隣に志穂が眠っています。いささか乱れた表現が見えますが、淡泊なデッサンの趣きがあり、そこに妖しい志乃を浮かび上がらせているのは魅力的です。

●「雪嶺文学」48号（石川県）

伊造は怠け者で、田畑の手入れはせず、いつも町で遊んでいます。代官所の手代に唆され、新米を渡すことになりました。新米は年貢を納めるまで村から運び出せません。清吉は主人の利兵衛と相談し、代官所の手代の企みを暴きます。伊造は性根を入れ替え、家族と一緒に田畑を耕します。後半になると、内容にちよつと詰込み過ぎている気配であり、ゆつたりとした趣きが失われています。このような書き手が同人誌を支えているのでしよう。

表現に徹しています。描写には明確な輪郭線があり、山の風景あるいは人の素振りなど、巧みに刻まれている、そのような基調の中に四国山地の山奥で働く青年の姿が的確に捉えられています。

横山健史は大阪で八年間も散髪屋の修業をしていて、軍隊から帰還すると、村で散髪屋をはじめます。二十歳すぎの若さなので、間借りでなく自前の店を望みますが、なかなかうまくゆきません。結局、散髪屋を諦めて管林署に勤め、袖の道に入ります。木を伐採する仕事ですが、意外に気に入ります。山の斜面に分け入って大木の格闘に魅力を見出したようです。組合の書記を頼まれるものの、現場の作業を選びます。時代は変化し、ダム工事や発電所の建設など、山の仕事は多様化して山間の生活が変容していきます。伐採の仕事は減少し、生き字引のような先輩の沖次が大怪我をし、健史の父親も材木運びの途中で棧道が崩れ、谷に転落してしまいます。母親のとみと妻の里美は健史の危険な山仕事に不安を感じています。杉岡の町は道路工事や発電所の建設などで賑わっていて、とみと



風土 第12号 2012

里美は散髪屋の店を借り、外堀を埋められた健史は、やむなく辞表を出します。三十歳を越えた健史は時流に乗って活気の漲る杉岡の町で勝負する覚悟です。袖の仲間とは疎遠になりますが、母親および妻と子供のために新しい人生に対峙します。

●「出現」5号(長野県) 「寄る辺」(内村和)は信州の農村の独り暮らしの老婆に焦点を絞っています。サトは八十七歳で、二人の息子は東京に住み、田舎に帰ってくる気配はありません。サトは墓掃除などの村の行事には顔を出さず、世帯が違って馴れ合えず、親切にされると、逆に孤独感に沈むところがあります。妻に死なれて後添いをもらって男の子が生まれると、大喜びをした父親、また年下の婿養子の宗吉は村では他所者扱いで、消防団でも役職につけず、サトはそのような昔のセピア色の情景を懐かしみます。人の助けを借りずに日常をこなしていますが、寄る年波に不安を感じます。尿意を催したとき、トイレが間に合わず、サトは独り暮らしの限界を痛感し、といった息子の薦める養老施設への入所には抵抗があります。書き手は温かな筆遣いで村の習慣や景色を散りばめながら寂しげな老婆の姿を浮き上がらせています。まろやかな流れに書き手の人柄と優しさが融け込んでいるようです。

●「小説家」137号(千葉県) 「泡沫のキリスト」(関谷雄孝)は同じ町内にあるプロテスタント教会の長田牧師が頭に包帯を巻いて私の診療所に駆け込んできたことよって私は遠い昔の友人およびその頃の軍事情色に染まった時代を回想します。

●「溯行」130号(長野県)

が、その警備隊長はロドリゴであり、謁見の場に同席し、日本の衣裳の特異な外観に驚き、さらに国王に献上された精妙な蒔絵箱や巧妙な屏風絵などに心を動かされます。ロドリゴの胸に日本のイメージが広がり、少年使節団よりも数年だけ年上のロドリゴは日本への旅立の機会を狙います。

●「個性」38号(神奈川県)

「六区のお処」(柳修二)は戦前から戦後にかけて浅草六区の芝居小屋あるいはカフェなどに出没した名物女・お浪についての話です。六区の映画街の入り口近くに「ハトヤ」という喫茶店があり、大正の末頃に開業し、エノケンの仲間また踊り子や歌い手の溜り場になっていました。永井荷風もときおり顔を出していたようです。その「ハトヤ」の女将さんがお浪の面倒を見ています。六区にカフェ「紅葉軒」があって、お浪はその女給をしていて、ピアノ弾きの梅次に惚れ、梅次が博打で借金をすると、ハトヤの女将さんが尻拭いをして、貧乏な芸人や踊り子は女将さんに頭が上がりますが、戦後になって浅草の賑わいが戻ると、演芸館や芝居小屋で紫の着物の女が声を張り上げ、役者を持ち上げます。お浪はサクラになって稼いでいたのです。紫の女は大相撲の後楽園球場場所また神宮球場にも現れ、話題になっています。しかしお浪が何処に住んで二十五年ほど経ち、店の場所の変わった「ハトヤ」の前に救急車が止まり、年寄り女が運ばれ、お浪の年齢は女将さんしか知りません。お浪は浅草の特別な女ではありませんが、書き手の大きな情けでお浪は生き返っているようです。もはや浅草では失われた世界です。

「もうひとつの松代」(大本管地下壕をめぐって)は、戦争末期になると、大島博光は詩人であり、フランス文学者でもあって、反ナチのルイ・アラゴンの「フランスの起床ラップ」を翻訳し、敗戦後の若者の精神を刺激しています。西条八十に師事し、西条八十の主宰する「蠟人形」の編集長を務めます。室生犀星や堀口大学などが寄稿者です。アラゴンやエリユエールまたロートレアモンなどの詩を訳出して、松代町に大島博光記念館があり、彼の著作や訳詩集が展示され、また彼の長年のさまざまな業績にも触れることができます。

●「溯行」創刊号(神奈川県) 「暗渠」(大城定)では定年まで半年の小学校教師の忘れたい昔の風景および父親への追想が描かれています。帰りの電車が駅に着く前、山崎公一は丘の上から少年が田畑の広がる田園風景を横切る電車の線路を眺めている姿を見つめます。父親の帰りを待つ昔の自分の幻であり、胸が疼きます。

長田牧師のR教会は昭和四年に教会堂と牧師館ができ、初代の広瀬牧師とは顔見知りであり、その息子の真也は同級生でした。真也は真摯に前方を見据えています。満州事変から太平洋戦争へと時代は変転します。教会は軍部に睨まれ、家宅捜査を受け、信者は離れてゆきます。広瀬牧師は軍部に協力する姿勢を示し、教会を守るための屈辱的な手段です。真也はその父親には冷ややかで、肉体は天皇に奪われても魂は神に奉げよう、という信念です。昭和二十年三月の大空襲で本所一帯は火の海となり、教会も焼け落ち、広瀬牧師と真也は婦人になり、教会も焼け落ち、真也の精神的な軌跡を辿っている、私自身の生き方や考え方を反省するところがあります。私は意外にキリストのそばにいたのかもしれない。長田牧師は五十年前の修道女の幻を見て昏倒し、頭に怪我をしたのですが、あらためて五十年前の初心に還る決意を固めます。重厚な味わいがあり、戦前の教会を取り巻く暗い世相にも触れていて、胸に迫るものがあります。

●「横」35号(千葉県)

「ここはジバンゴ」第一章 天正少年使節(岸本静江)は天正少年使節のマドリドにおける断片を紹介しています。一五八四年十一月十一日、国王フェリペ二世の皇太子であるフェリペの立太子札が行われ、貴族や各国大使の馬車や警備の馬また見物に押しかけてきた群衆などで式典の行われる礼拝堂付近は大混雑です。賓客達が聖堂に入ってから最後の馬車到着し、天正少年使節団です。九州のキリシタン大名の名代としてローマに派遣され、スペインはその途中になります。その数日後、少年使節団はフェリペ二世に謁見します

Table with 2 columns: Title and Page Number. Includes '溯行' and various articles.

同じ町内の人の通夜に町内会館に行くと、かなりの年齢の瘦せて白髪の老人に遭遇し、喪服を着てお清めの食事にありつくことを愉しみにしているのですが、係員に放り出されます。老人はいささか痴果が進行しているようで、車道に飛び出して見かねた公一は老人に近づき、お母さんが待っているかと囁くと、老人は素直に俯返ります。父親も痴果になり、徘徊していましたが、お母さんという言葉を聞くと、従順になったようです。公一は見知らぬ老人と父親のイメージを重ねます。老人は公一を自分の息子と錯覚します。父親は女と住み、別れると、酒に溺れて人生を狂わせたのです。夜路を見知らぬ老人と歩きながら父親への哀惜の気持ちに沈みます。父親と一緒に歌った「出た、出た、月が！」を口ずさむと、そこに老人のかすれた声が重なります。舗道の下は暗渠です。ちよっと筋道がややこしくなっていて、わかりやすく整理の必要があるでしょう。

●「湧水」53号(東京都)

「白線流し」(飛田一步)は穏やかな基調で、冷静な筆遣いであり、構成も整っています。セーラ

「服の白いスカーフと男子の制帽の白線を結び、おそろく結び目は三百を越えていて、その白く細い帯が川を下ってゆき、高山の町の卒業行事の感慨深いイベントです。高校三年生の哲也と理代子の心の推移を描いています。和菓子屋の息子の哲也は東京の大学に進み、理代子は就職し、二人の立場の違いが鮮明になります。理代子にしても哲也の変容してゆく気持が見えますが、それを理解すること納得することの落差を痛感します。白線流しの白いスカーフは川の水に汚され、それは社会の諸相に対する隠喩なのでしょう。」

「あまんじやく」(亜木康子) はお節介の不思議さを捉えています。英会話教室に通っていて、講師が駅前の女ホームレスにお金を差し出すと、その女は激しく罵り、唾まで吐きかけたようです。生徒は講師の善意を踏みにじる女ホームレスを非難しますが、お節介をするからよ、と私が皮肉ると、気まずい雰囲気になり、私は英会話教室を止める羽目になります。駅前にお気に入りのカフェがあり、ダンボールを抱えて横断歩道を渡る女ホームレスに気づき、私は慌てて飛び出します。老けて肩までの髪に白いものが混じっていて、見失うはずなのですが、駅前周辺また商店街にもホームレスの姿はあきません。路地の奥の雑居ビルの谷間にタンホールと新聞紙の寝床がある、という「あまんじやく」の声がかかります。しかしホームレスの秘密の寝床は見つかりません。女ホームレスは私の意識の深淵に潜む私の分身なのでしょうか。これから先の物語は書き手にとって苦しいところですが、「あまんじやく」という着想は面白く、とはいえその事例を多く出し過ぎています。

その伯父から京子の生みの親は律子であると知らされ、理解を超えた暗い渦巻きが解消してゆくように感じます。律子の家で彼女の緑のドレスが気に入りに、身につけてみると、その京子を見た伯母は律子そっくりと驚きます。家の処分や父親の介護など、すべての手続きを伯父に任せ、京子は深夜バス「シリウス」で東京に向かいます。郷里の記憶ははかない影絵となり、京子は東京が新しい古里になります。すべての過去を断ち切る京子の決意がじんとしています。

「山妖記」(森下征二)の背景は奈良時代の末の紀伊国の山奥の羅刹ヶ嶽という深い山になっています。人を食う鬼が棲んでいる、地元の狐師は近づきません。凶作の年、村の周辺では猪や鹿は獲れず、木の実も拾えず、村人は飢えに苦しみ、悲惨な状態です。多聞丸と次郎太の兄弟は最後の手段として羅刹ヶ嶽に分け入り、獲物を狙います。二人は獣道を挟んで待ち構えていると、腐敗臭が漂い、多聞丸の頭髪が強く引つ張られ、鬼の出現です。木枯らしが吹き、濃密な闇に敵われ、視界の利かない状態で次郎太に助けを求め、兄の叫び声に次郎太は弓を引き、多聞丸は自分の顔に向かってくる弓矢を察知し、眼を閉じたとき、鬼の力が弱まり、彼は木に渡した足場に落ちます。矢は鬼の腕に命中し、彼の顔に鬼の血が滴ります。

憔悴して帰ると、母の住む壺屋から呻き声が漏れていて、戸を打ち破って松明をかざし、そこには母親の頭に二本の角があり、裂けた口には鋭い牙が生えており、片腕は失い、血が流れています。松明を投げつけると、襲ってくる鬼に当たり、葉が燃え、一瞬にして壺屋は炎の渦が舞い上がり、

●「文芸復興」25号・26号(東京都)
「五十年」(丸山修身)は中学を出てから一度も会って話をしたことのない同級生との不思議な交流の物語です。ここ何年か、東京の春彦の許に百合子さんから新鮮な山菜が届きます。春彦の胸の中には心象風景に昇華された百合子さんが生きており、彼女の人生を追想しますが、春彦の険しい感情の曲折が抑えられているような気がします。百合子さんの実家はお大尽でしたが、戦後は没落し、古く広い屋敷に祖母と二人で住み、生活保護を受けています。中学三年のとき、彼女が春彦の家に泊まり、同じ部屋で布団を並べます。春彦は性的な好奇心で眼が冴え、百合子さんの肌着越しに指先で触れると、眠っている彼女がびくつき、身体を反対側にそらせ、そのようなことが幾度か繰り返され、暗い想念にうろたえたようです。父親が帰ってきた物音で春彦のやましい冒険心は萎えてしまいます。春彦は長野の高校に進学し、その後は東京の大学に入り、東京で勤めま

す。百合子さんは中学を出て織物工場で働き、半年ほど祖母の許に帰ってきて、部屋に閉じこもり、気が触れたようです。村では悪い噂が流れています。帰省したとき、春彦は人目を忍んで彼女に会いにゆきますが、月の光を浴びた縁側で彼女は「きた、きた、きた」と叫び、月の方向に腕を差し伸べながら飛び跳ね、母親の幻に取り憑かれてはいるのです。凄惨な姿に春彦は茫然となります。彼女はやがて長野の病院に送られ、三十年後に姉が身元引受人になり、彼女は姉の民宿を手伝っています。春彦の兄に出会って、春彦の消息を知り、手紙の遣り取りがはじまります。春彦は百合子さ

棟木が崩れ落ち、鬼は炎に包まれます。炎に包まれたまま鬼は多聞丸と次郎太の方に顔を向け、人間に戻った母親の穏やかな表情になっていて、兄弟殺しを避けるために多聞丸を助けたのです。母親と多聞丸との確執として次郎太の多聞丸への恨みなど、積み重なった暗い怨念が現れています。多聞丸は都の偉い坊さんに母親の供養してもらい、自分は出家する覚悟です。

狐師を恐れさせていた羅刹ヶ嶽の鬼は兄弟の母親とは思えず、筋書きがちょっと歪んでいるように感じます。また、最初の書き出しではもともと凄惨な結末を予測させていましたが、穏やかな終わり方になっていて、そこが気にかかります。

●「菅原道真と美作菅家」我が幻の祖先たち
狐師を恐れさせていた羅刹ヶ嶽の鬼は兄弟の母親とは思えず、筋書きがちょっと歪んでいるように感じます。また、最初の書き出しではもともと凄惨な結末を予測させていましたが、穏やかな終わり方になっていて、そこが気にかかります。

文芸復興
創刊七十年記念特集号
現在文芸復興編集部
26
2012・12/No.126

んの出菜という好意をどのように捉えているのでしょうか。また春彦に山菜を送る百合子さんの気持はどうなのか、どうもやりきれない影に蔽われてゆくようです。いささか綺麗ごとにと収めているのが気になります。

「冬のシリウス」(多門昭)はなかなか巧妙な仕掛けの小説です。父親の貞三が痴呆になり、実家の処分もあって、京子は十数年ぶりに郷里に戻ります。思えば、京子の家庭は謎めいており、貞三は淫の女といわれる律子と暮らしていて、母親の三津子は京子が律子の家に遊びに行っても何も言わず、七五三のお祝いは律子の家であって、そこには三津子の姿はありません。三津子は京子に対して淡泊で、京子は強い愛情を感じ取れず、奇妙な思いに囚われていました。貞三と律子そして三津子の関係は暗い影に蔽われているようです。京子は貞三から見えてられ、さらに三津子からも大事にされなかったという意識から抜け出せません。律子が料理中の火災で亡くなると、貞三は急に精気を失って衰弱し、呆けはじめます。

貞三は伯父夫婦に面倒を見られていますが、

「絆」(島有子)には独特な雰囲気を感じていて、文章が成熟しているとか個性が宿っているととかは別の魅力のような気がします。書く以上は何らかの意匠を凝らすわけですが、素材な装いでありながらも匠の技量が秘められているのかもかもしれません。

語り手である私の祖母は十五歳で新潟から桐生に来て機械織りの仕事に就き、近所の桶屋に後添えで入りますが、二歳ぐらいの女の子がよく懐いていたからです。二人の娘が生まれた後、桶屋の主人は亡くなり、祖母は三十歳代の半ばで三人の娘を育てます。やがて還暦前後の人と暮らさしはじめ、やはり生活という切実な問題を切り抜けるためです。祖母は娘を育てることに懸命であり、自分を棄てて時流に流されるような印象がありませんが、現代流の解釈でしょう。祖母は素直な性格で働き者であり、そのひたむきな生き方は時代の移り変わりを超えていたのです。とにかくちよつと異質な文章の感触は独自の輝きを秘めています。

●「銀塵録」18号(東京都)
「いつか晴れた日に」(石原恵子)では、駅前のロータリーの標が倒れて切り株だけが残っているのを見て、和枝は生き方の転換点の象徴のように感じます。四十歳を過ぎた彼女には瑠璃子という友人がいて、むしろ憧れの人です。瑠璃子の感覚や趣味が和枝の意識を浸食し、仕事に住居あるいは男の問題など、いつも瑠璃子の影がちらついて

います。

阿佐ヶ谷のスナック「レント」のママの美貴とは気が合って気分が晴れ、どこか手応えがありますが、美貴とおしゃべりしていると、瑠璃子の

全国同人雑誌振興会

影が消えます。自分が瑠璃子になれないことがわかっていて、和枝の人生は瑠璃子に支配されている気配です。胸にしこりを見つけ、美貴はずぐの受診を勧めます。瑠璃子は乳癌で入院したことがあり、和枝は瑠璃子に相談しないでおく決意です。駅前前の櫓が倒れたことと和枝の転機とが重なり、瑠璃子からの卒業が暗示され、同時に四十歳代の女の不安と焦慮がうかがえます。目立った曲折が描かれているわけではありませんが、和枝の孤独の心が滲んでいます。

「エコー」(矢口樹) は経理担当の内田さんの謎めいた人物像が上手く表されています。語り手の多くはイベントの下請け業者でアルバイトをしていた頃、内田さんに出会います。会社の経理・財務の担当で、三十歳代の前半であり、見かけによらず絵を描いていて、知り合いの経営する画廊に飾っていると、買手が現れ、ここから奇妙な話が始まります。

内田さんは伊豆半島にスケッチ旅行に出かけ、その夜の夢の情景を描いた作品です。帽子が風に飛ばされ、見つけて飛び込むと、そこにパジャマのような白い服の女が沈んでいきます。永い黒髪が海草のように揺れ、口許に仄かな笑みを浮かべ、生と死の境目を漂っているようです。内田さんは郊外の買主の家に届け、絵の背景を説明していると、買主の家族の写真を見せられ、買主の妻にそっくりであり、描いた海岸はその妻が行方不明になった場所です。内田さんは家族の肖像画を依頼され、取りかかっていたが、その成果の前に会社が倒産します。会社の資産運用の口座は内田さんの架空口座だったという噂が広がります。

「見えているものなんて幻のようにあやふやなものだ」という内田さんの言葉が想い出されます。会社が内田さんの策略に騙されたとすれば、絵の話も暗い影に蔽われ、実際、内田さんは幻視の迷彩色で自分を守っていたのかも知れません。内田さんという人物を削り上げた書き手は才人であり、巧妙なひと捻りは賞賛に値するでしょう。

●「仙台文学」81号(宮城県)

「谷」(笠原千衣)にはこの世と魔界との狭間をさまよう女の妖しげな魅力が漂っています。五年前に俊也が亡くなり、彼の通夜の席で愈介の視線に捉えられ、私は魔物めいた疼きを意識します。私にはしかし雪野という分身がいて、愈介がわたしの部屋に來ると、かならず雪野が踊れるのです。雪野は雪深い谷に棲み、琴次と永久の愛を誓い合いますが、彼は町の良家の娘を嫁にします。その嫁は気が触れ、狂い死にし、雪野の小屋には簪や破れた小袖などがあり、姿を消す秘術で琴次の家に行って彼の嫁を呪ったのでしょう。琴次はすべてが雪野の仕業と勘付き、雪深い小屋を訪れ、雪野に殴る蹴るの乱暴を繰り返すものの、雪野の魔性の眼に落ち、息絶えます。俊也はスキー事故で命を落としましたが、私のというより雪野の想い描いた通りであり、雪野はまた愈介が死ぬのを待ち焦がれている気配です。私の中に雪野は生きており、異なった時空に宿る魔性が私の魂に蠢き、いつも激しく白い炎に燃えています。メタフィジックな美意識が描られています。

仙台文学



81

今期の推薦作品は次の通りです。

●推薦作

- 「黄金蝶事件」(江口宣)／「長崎文学」71号
 - 「やまあいの風」(宮地たえこ)／「風土」12号
 - 「泡沫のキリスト」(関谷雄孝)／「小説家」137号
 - 「山妖記」(森下征二)／「文芸復興」26号
 - 「谷」(笠原千衣)／「仙台文学」81号
- 準推薦作
- 「想像力の行く手は阻めない」(川村道行)／「周炎」50号
 - 「なんまいだ心中」(佐滝幻太)／「飛行船」12号
 - 「一村」(小島千佳)／「あるかいど」48号
 - 「迷羊」(渡辺勝彦)／「R&W」13号
 - 「脱皮する虫」(堀田明日香)／「じゅん文学」74号
 - 「冬のシリウス」(多門昭)／「文芸復興」25号
 - 「エコー」(山口樹)／「銀座線」18号

(全国同人雑誌振興会／東谷貞夫)

新しい日本文学の潮流を

同人雑誌から

全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

7月10日優秀作・候補作決定

同人雑誌を全国同人雑誌振興会に2冊お送り下さい
〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13
全国同人雑誌振興会